荻原井泉水編

定本一茶全集

第一卷

羽田書店刊

sep. 1949.

荻原井泉水編

定本 一葉全集

第一巻

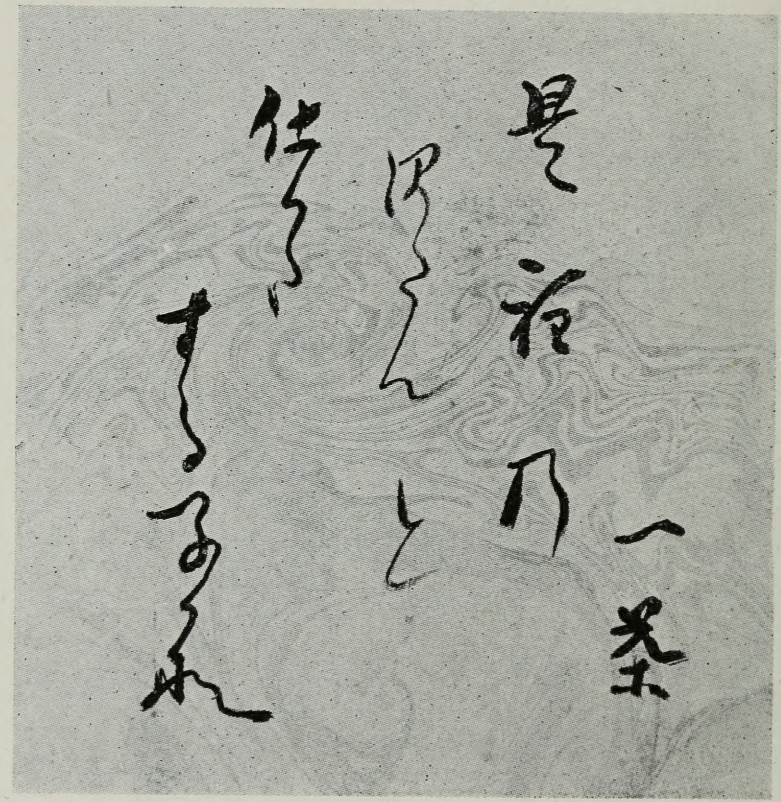
羽田書店刊

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

LIBRARY
MAR 2 0 1994
UNIVERSITY OF TORONTO

VELUT ARBOR ÆVO

Presented to the
LIBRARY *of the*
UNIVERSITY OF TORONTO
by
The Library of
Takaichi (T.U.) Umezuki


一条

緒　言

一茶の遺稿を校訂したる、信據すべき集大成、いはゞ定本「一茶全集」をつくらうとして、私はいま其の仕事にかゝつたのである。

私が一茶の研究に指を染めたのは、大正の初年、今から三十餘年の昔である。たま〳〵信州に遊んだ折、故束松露香、故中村六郎の兩氏と懇意になつたことが因縁と云へよう。一茶といふ名は俳句を好む人の間に知られてゐるだけで、一般には耳遠かつた頃だつた。芭蕉とはちがつて、一茶は歿後百年あまりにしかならない。信州に於ける、其の門人の家には、彼の眞蹟と原稿とがたくさん殘つてゐる。いまのうちに、其を寫眞、又は複刻しておくがいゝ、散逸した後になつては悔いても及ばない。さういふ氣持を私は早くからいだいてゐたが、じつさい其に着手したのは、大正十二年の大震災で、幾多の貴重の文獻が空しき灰になつたことを痛感してから後のこと

だつた。昭和十二年ごろ、私はそれまでに集成したものを一先づ、何卷かの纏つたものに整理しはじめた。その時、大戦争の口火が切られた。出版事情は悪くなり、用紙は日増しに不自由となつた。それから戰爭は擴大し、人心はいたづらに興奮し、「一茶全集」どころではなくなつた。私はその原稿を一つのトランクにつめて、東京から疎開をしておいた。東京の家は焼けたが、その原稿は無事だつた。さうして、終戰後三年目の今日、鎌倉の山ふところなる疎開のまゝ住みついた家で、いま、其の原稿を取り出したところなのである。

何事も因縁の熟するのを待つより外はない。羽田書店の人達が一茶とは同國の因みもあることから、「一茶全集」を出したいと申出られたのは、その時節がしぜんに到來したものであらう。私は今年、六十五である。私が最後まで校訂しなければならぬ原稿をいつまでもトランクの中に入れておくのは墓の中に入れておくのと同じことにならうかも知れない。一茶の年は六十五であつた。してみると、一茶の年になつた私が「一茶全集」を完了するといふことも、何となく因縁のやうに思はれるのである。

ところで、一茶の書き殘したものを何から何まで集めるとなると、おそろしく大部のものとなる。それは、今日の印刷事情から許されなくもあるし、又一茶文獻としても、その必要はうすい

と云へよう。さりとて、重要のものだけを選んで集めたのでは、「全集」としての意義の乏しいものになる。そこのかげんがむづかしい、文字通り「加」と「減」とが妥當を得るやうに、と、そとが私の苦勞なのである。

昭和二十三年十一月

荻原井泉水

凡例

一、古書を校訂複刻する場合に、どこまでも原本に忠實とするか、一般に讀みやすきやうにするか、とれには一長一短がある。それを折衷する方法もあるが、それは便宜のやうで、ぬえ的になつて面白くない。で、本書は「一茶全集」の「定本」としたい建前から、原本に忠實といふことを方針とした。文字はすべて一茶自筆の原稿にしたがつて、みだりに改めることなく、たゞ、句讀（、。）のみを挿入したのである。

一、原稿のまゝとすると、脱字もあるし、又あきらかに誤字とおもふものもある。それが校正の上での誤植や脱字とおもはれてはならないので、本文は原文のまゝとして、誤字は其の傍に小活字を以て正字を添付し、脱字は（　）を入れて其の中に六號活字にて補正しておく。

一、數から云へば稀であるけれども、原文が誤とは思はれながら、判讀しかねた場合には、「マ

マ」。又、一おう推斷したけれども幾分、疑問あるものは「カ」と傍示する。

一、原稿はかな書が多く、これがつゞけられると讀みづらい。例へば「くるしひまぬかれさらんとすさるをなけきて」——之には濁點を加へた、即ち　「くるしびまぬかれざらんとす。さるをなげきて……」。又、漢字にふりがなを施すごとく、ふり漢字をも試みた。例へば——、「かさい」に「葛西」——「あさちふ」に「淺茅生」と傍書したごとく、これは古書を讀みなれてゐない方の爲に便したるまでである。

一、原本の漢字にふりがなを施した個所もあまたある。これも古書を讀みなれてゐる方には蛇足かとも思ふものの、「形」に「なり」、「尺八」に「たけ」の如き例である。又、一茶自身でふりがなをしてゐるものもある。それを校訂者の加へたるものと區別して、特にカタカナを用ひた、一茶自身もかういふ場合にはカタカナを以てしたものが多い。

一、校訂上の注意やノートは本文の上部に寄せて、小活字を以て挿入した。これは一々に「校訂者記」とことわつてなくとも、(……)を以て圍んであるから識別されよう。又、固有名詞または語辭に對して註釋として加へたものは、ダーシを中に入れて、例——「本行寺——江戸谷中にあり、法華宗」。本文の上部にはなれて書いてあつて、(……)を以て圍んでないもの

は一茶自身の書き入れ、もしくは一茶自身が註をしたものである。

一、一茶には個人的の書きくせがある。「一枚」とかくべきところを「一牧」、「春の宵」とかくべきところを「春の霄」とかくが如きである。これは一々に傍示して訂正するほどのことでもないから、本文として訂正しておく。

荻原井泉水

通　説

一茶は、新しい年のはじめといふものに、新しい生活の希望をかけるといふ氣持を、毎年持つてゐたものらしい。新しい日記帳をもつと、此の年こそはといふ氣持になるのは誰も同じことではあらうが、一茶は、年のはじめに、新しい紙を綴つて、一冊の帖をつくる。まづ、元旦の感想を書き、それから次々と雜感を書きつける、發句を書く。俳諧の卷が出來ればそれを寫しておく。時には、見たり聞いたりしたことを書く。だが、二三ヶ月もたつと、書くことが無くなるか、めんだうになつて止めてしまふ。そして、その一冊の帖の餘白は、友人から來た書信の中の發句を控へておくものになる、又は古人の集から自分の氣にいつたものを書きぬいておく、時には、病氣の治方や漢藥の處方などを覺え書しておく、さういふメモになつてしまふのが常であつたらしい。はじめの意圖は一年を通じての「隨想錄」ともいふべきものを書き上げるつもりが、

いつも未完成に終るのである。

かやうな一茶の随想録ともいふべきもので、遺稿として殘つてゐるものが四種ある。その一は「我春集」、その二は「株番」、その三は「しだら」、その四は「おらが春」である。こゝには此の四種をまとめて一冊とする。

「我春集」は、文化七年、十二月、親友なる鶴老の寺で一茶四十八歳の新年を迎へるために、江戸を出て、下總國守谷の西林寺に赴いた。新しい帖を綴つて劈頭に「發會序」を記し、一しなの國乞食首領一茶書」と書いてゐる。前年の五月に、一茶は鄕里柏原にのとしてある遺產の分配問題のために、歸鄕したが、繼母及び義弟と合はずして、その冷遇を憤り、遂に自分の財產として取得すべきものの何一つをも得ずに、江戸に引き返してから、藏前の札差である夏目成美の所に、食客ともお客ともつかず厄介になつて居て、時々、出でゝは下總上總の俳友を歷訪して、食つてあるいてゐたらしい。「乞食首領」と書いた氣持は其である。此の「發會序」で見ると、此の帖は「隨想」よりも、俳諧興行の作品を集錄しておくことが主眼であつたらしく、筆はじめに、「着到帳第一番」とあるのはその意味である。その句は――

我春も上々吉ぞ梅の花　　一茶

それから正月中は、いかにも長閑らしく、俳諧興行をつゞけて、月末に江戸に歸つてゐる。そして、春は、成美や太笻と俳交をつゞけてゐる。夏のところは記事がなく、秋に入つて、上總下總を遍歷中の隨想が載せてある。此の一帖には原題が無い。現に信濃湯田中なる湯本五郞治氏宅に所藏せられる、此の眞蹟原稿の一冊の題簽に題して、之を「我春集」と名づけたのは故東松露香氏である。

「株番」は、「我春集」の翌年に、一帖として綴られたものである。卽ち、文化九年正月十五日に筆をおとしてある。此年も、前年と殆ど同じやうに、十二月の末に江戸を出て、下總布川（守谷と同じく利根川の北岸）の門人、月船の家に入つた。そとで新年を迎へて後、守谷の鶴老の寺に滯在し、俳諧にうち興じ、又、題を設けて發句を作りあつてゐる。一茶の句として名高い作、

松陰に寢てくふ六十餘州かな

は此時、「題鶴龜松竹」としてめでたい句を作りつゞけた中の作である。正月の中旬、江戸に歸つて、本行寺を訪ねて一會を催してゐる。それから、上總の富津の大乘寺を訪ねて、その記のある

ところまで、前年と同じ足どりである。此の文化九年には、一茶、五十歳であつて、卷頭には――

おのれやれ今や五十の花の春　　一茶

の句を出してある。しかも、それから後は、手記風のものは殆ど無く、古い集や文通などの書拔で終つてゐる。その點は、一帖としての體裁が甚しく整つてゐないけれども、此の帖には、筆者がみづから「株番」と題して、第一の丁にその書題を自書してゐる。其の意味は、自分が新しいと考へて得意におもつてゐた句も、人が見れば、古いと評する。で、よく〳〵見直して見れば、なる程古い。だが、これは如何ともしがたい――「よし〳〵汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」とみづから書いてゐる通り。「淮南子」に、山から里へ飛んできた兎がたま〳〵古株に頭を打ちつけた、それを生捕りにした百姓が又も同じ事があらうかと、その古株を番してゐたといふ、それを自分にくらべた氣持なのである。

「しだら」は、「株番」にすぐつゞいて、文化十年（一茶五十一歳）の正月に筆をおとしてゐる。筆はじめの句は

人並の正月もせぬしだら哉　　一茶

である。「我春集」でも「株番」でも、歳旦の句は、何か明るい希望をふくめた作意であるのに、此の年の句は大そう暗い感じであるが、これには譯があるのだ。上にも書いた通り、一茶が故郷に於ける遺産相續問題は、文化七年に歸郷した時には、冷たいにらみ合をしただけで物別れになつたが、どうしても其まゝに捨ておくべきことではないので、彼は是非とも是を解決させねばならぬといふ最後の決心をして、江戸を立つたのが文化九年の暮近くであつた。義弟の家では、もちろん彼を泊めてはくれまいといふ考から、彼は其家の傍に間借をして、目と鼻との間で對抗をしつゝ持久戰に入らうといふ皮肉な計畫に出たのであつた。此の「しだら」に筆をおとしたのはその間借で年を越した正月なのである。胸のうちは、繼母と義弟に對する憎しみでいつぱいになつてゐるのだ。で、それより五年以前（文化五年）に歸つた時、義弟の家より屆けてよこした蒲團を、實母のさとの家にたのんで仕立てかへようとしたところ、其中身は綿ではなくて、古雜巾などのぼろがつめてあつたといふ古いうらみまで持ち出して、「前の寒さまで思ひ出されて」といふのが元旦匆々の感想なのである。――「今も又、あやにく玄冬素雪の折から來合せしが、のみならずしかとしたるやどりといふもあらねば、必しもかゝる太雪に埋れ果なん、……とやせん、かくやせんとさまよひけるを、情ある里人、家の小隅かしてとしとらせんとあるに、……漸西の

春にはなしぬ」と、心細いことを書いて、「人並の正月もせぬしたら哉」、即ち、人は正月らしく春を祝つてゐるけれども、自分は人並みの正月さへも出來ない體たらくである、といふのである。そして此の一帖に、此句から「しだら」といふ題をつけて、みづから其の題名を書いてゐる。

さて、一茶の遺産相續問題は、話し合では到底、解決が出來ないことが解つたので、彼は江戸に出て公儀に訴へると云ひすてゝ、草鞋の紐をむすばうとした。これには地元の人々が驚いた。明專寺の住職が仲裁にはいつて、やうやく示談が成立した。父の殘した家屋敷は折半して、一茶と義弟とは壁を隣り合はして住む事になつた。故郷に、自分の家が出來た上は、一茶は不安定な江戸の生活を引き拂つて國に住みつくことに決心した。彼は朗かな氣持であつたらしく「三月十五日、菴出なんとして」

笠着るや櫻さく日を吉日と

と書いてゐる。

文化十一年は彼の生活に太い線を引いた年である。一茶、五十二歳。四月、始めて妻を娶つた。江戸に出て、知友門人に對して、郷里引退のあいさつをした。成美其他の肝煎で彼の送別記念の

出版も企てられたりして、にぎやかであつた。一茶は完全に信濃の一茶となつた。だが、生れ故郷とは云へ、雪深い國に埋れ果てるべき自分の身をおもへば、何となく底知れぬ淋しさにめいるやうな氣持だつたに違ひあるまい。

これがまあつひの栖か雪五尺

前々年の暮、隠退を決意して歸郷した時の作を彼は再び口ずさんだことであらう。

文化十一年から、同十五年(文政元年)までの五年間には、一茶の隨想錄風の遺稿は今日見あたらない。毎年々々、彼は柏原の深い雪の中で、長い冬をすごし、雪が解けはじめると、蟄眠から覺めた動物のやうに、附近の村々をかけて出歩きまはつた。彼の足の向くところには、その門人たちが快く待ちうけてゐてくれた。彼は又、江戸までも、しば〱足をのばした。そのついでに、上總や下總の門人をも歴訪した。かやうな一茶の生活は、春の空を流れる雲のやうに、自由であり、ほがらかであるかに見える。故郷の家にゐる妻は、その間に長男を生んだが、一月足らずして死んだ。二男が生れたが、それも夭死した。文化十五年、三度目のお産は、女の子で、「さと」と名づけた。とんどこそは丈夫に育て上げたいといふ氣持の中に、文政元年と改元されて、その年は暮れたのである。

「おらが春」は、その翌年、一茶五十七歳、文政二年の元旦に筆をおこしてある。「株番」一しだら」等と同じ體裁の一年間の隨想錄であるが、此の一冊は非常に好くまとまつて、元旦の記と年末の記とが首尾對應した構想に作つてあるところなど、まつたく一卷の著述としての體裁を備へてゐる。且つ、原稿もきれいに淸書してあつて、そのまゝ版下にしても好い位であるし、ところどころ挿圖の用意をしてある點なども、一茶自身に、出版の意圖があつたのであらうと、推察されるのである。但し、彼は書題の自書を取りおとしてゐる。之を「おらが春」と呼ぶのは、彼の歿後二十五年を經て、嘉永五年に彼の筆跡を透寫(すきうつ)しして、出板された時に、題名として立てられたものである。それは、卷頭の文の末節にある――

……から風の吹けばとぶ屑家に、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける

目出度さもちう位なりおらが春　　一茶

から名づけられたのである。との文にすぐつゞいて――

とその五月生れたる娘に

一人前の雜煮膳を据へて

這へ笑へ二つになるぞけさからは

文政二年正月一日

と書いてある。此のさと女が夏のころ、はうさうを病み、經過は順調だつたけれども、病後の衰弱のために、誕生日すぎて間もなく死んでしまつた。老いた父としての一茶がいかに此の子を愛してゐたか、それゆゑに、いかに此の子の死をかなしんだか、その哀傷悲嘆の情がこまかに記されてゐる。これが「おらが春」一篇中のヤマである。又、一茶は何か心に憂鬱を感ずる時には、いつも幼い時の追憶として浮んでくる繼子としてのみじめさを、此の「おらが春」の中にるゝとして記述してゐる。

親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立つと、子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積みたる片陰に跼りて、長の日をくらしぬ、我身ながらも哀なりけり

我と來て遊べや親のない雀　　六歲　彌太郎

此の句が當今人口に膾炙されてゐるのも、此の帖が一茶の遺著の中でいち早く刊行して流布さ

れたがためである。

かやうに一茶の心には、折々あんたんたる暗い影がさし、又、嘆きの涙にぬれる日もあつたのではあるが、かれの生活としては、江戸に放浪してゐた時代のやうに、衣食の苦勞があるのではなく、住居の上では屑家ながらも「俳諧寺」と自稱する一坊の主ではある、そして坊守たる妻もゐる。外へ出れば、足の向く先き先きに門人はゐて、酒をあたゝめてくれるし、立つ時は草鞋錢を包んでくれたであらう。まづ、平安なる生活が惠まれてゐたと云つてよろしいのである。

そこで文化八年「我春集」の春から、文政二年「おらが春」まで滿九年である。「我春集」の卷頭の感懐は、

我春も上々吉ぞ梅の花

であつた。ことばに「上々吉」とは云つてゐるけれども、彼の生活は決して滿足すべきものではなかつた。されば、此年とそ生活を一轉して、上々吉の境涯に入りたいものだといふ、その希望をそのまゝ、さも現實であるかの如く自分に思ひとまして、春らしい陶醉を感じてゐる氣持が此句なのである。そんな理想はもちろん、棚の牡丹餅のごとく、期待すべきものではなかつたが、彼の生活はしぜんに落着くべきところに落着き、彼の年齢がまた彼の兩脚をしつかり大地につけ

る氣持になりきらしめた。人間は上を見るべきものでない、むしろ下を見たらばいゝ、さうして現に自分の立つてゐるところの、その平々凡々と見える位置こそ、ほんたうに自分にめぐまれた生活だといふことが解つたのである。

　めでたさも中位なりおらが春

「上々吉」を貴ぶ氣持から、「中位」をよしとする氣持に移つてきたのである。此の、ざつと十年間に於ける一茶の氣持のかはり方は注意すべきものだと思ふ。

「おらが春」の卷末には「當流の安心」といふ一文がある。――「ただ自力他力、何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如來の御前へ投出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第あそばされくださりませと御頼み申ばかり也」云々として――

　ともかくもあなた任せの年の暮　　五十七齡　一茶

　　文政二年十二月廿九日

とある。これが一茶の宗教だつたのであらう。だが、彼は自分が書いてゐるやうな境地に實際、到達したとは思はれない。さういふ安心にはいりたいと常に念願しつゝも、いつも及ばざること

を心ひそかに歎じてゐたとだらうと思ふ。私は考へる。一茶の「當流の安心」とは、それこそ本當に一茶流に、發句を作ることであつたのだ、自然の大いなる美しさに眺め入つて、自分の我執我慢を忘れ去る一刹那、いはゞ自分の慾の網も我田へ水を引く心も凡て自然のすばらしい光に洗ひ淨められた一瞬間、それこそ解脱(自力流にいへば)であり、又、成佛(他力流に云へば)だつたのではないか。

元日や上々吉の淺黄空

此句はずつと晩年(文政八年―六十三歳)の作だが、これこそ一茶が心境的に完成したものではないか。ことばとしては同じ「上々吉」であるが、文化初年時代の口先だけの「上々吉」と、晩年に至つての腹から出たことばとしての「上々吉」とは、その響きがたしかにちがふのである。

一茶の「隨想錄」風のものは、「おらが春」の後には見當らない。いや、私は、それらしいものの斷片を折々見出してゐる。それは、私が一茶の眞蹟の蒐集に着手しはじめてから、掘り出したものである。何れも「斷片」であるから、年代をはつきりと決定することは出來ないけれども、

「おらが春」以後に書いたものだとは推定出來る。一枚々々に丁付がしてあるので、もとは帖になつてゐたものが分散したものだといふことも解る。紙の縱横の寸法、文字が清書であること、挿圖まで添へてあることは「おらが春」と同じ體裁である。又、その最初のところが元旦の記事から筆をおとしてあることも、他の彼の「隨想錄」と全く同じ行き方である。私は、この「斷片」の同種類のものを出來るだけ蒐集して、それを一冊の完成したものに纒めたいと思つてはゐるが、それは到底不可能のことであるらしい。だが、とにかく、一度、私の手に入つて、私が手寫しておいたものは、全集中の他の卷の中に採錄するはずである。

おらが春・其他

目次

おらが春・其他　内容

緒言……一
凡例……四
通説……七
我春集……一
株番……五一
志多良……一三九
おらが春……二〇七

校訂餘言……二〇
挿圖小解……二六八

挿圖

一茶畫像
色紙

永春草

發會序

昔〳〵、清き泉のむく〳〵と涌出る別荘をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんことをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て、倩(つらつら)年をへたりける程に、いつしか垣もくち、水もわろくなりて、茨(いばら)おどろおのがさま〴〵にしげりあひ、蛭(ひる)、孑孑(ぼうふり)ところ得貌におどりつゝ、つひに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。此道とゝろざすも又さの通り、より〳〵魂の黴(かび)を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさゞれば、彼腐き俳諧となりて、果は犬さへも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の臭きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆく〳〵理屈地獄のくるしびまぬがれざらんとす。さるをなげきて、籠山(こもりやま)の聖人、年かしとく此俳諧をいとなみ、日夜そとにこぞりて、おの〳〵練出せる句〳〵の決斷所とす。春の始より入來る人〳〵、相かまへて、其場のがれの正月と棄など必のたまふまじきもの也

文化七年十二月　日

しなのゝ國乞食首領一茶書

（籠山の聖人——下總守谷西林寺の住職、鶴老）

（「七番日記」に文化七年十二月二十一日、一流山に入る」「二十三日「守谷入」とあり、次の「我春も」の句は「七番日記」文化八年正月の最初に「我春も上々吉よ梅の花」として出せり）

着到帳第一番

我春も上々吉ぞ梅の花　一茶

去十二月廿三日

行としや空の青さに守谷迄　ゝ

寒が入やら松の折れ口　鶴老

鶯が赤みそ汁を鳴やらん　ゝ

縫ひねくつて遊ぶ陽炎　茶

有明はととにおぼろと申也　天外

玉子売る迚植る柿の木　老

急ぎ候西に見ゆるは善光寺　茶

六月寒きけさのむら雨　外

時鳥蚤の迹まで奇妙也　老

夢の通りに小宮作りて　茶

拾ふものあらばと櫛を流すらん　外

無分別なる鴈の來所　老
名月の少（すこし）すし（筋違）かふ家を建　茶
貫之始め蓼にむせつゝ　外
かりそめに吹てのけたる螺（ほら）の貝　老
東かさ（葛西）いの春は來にけり　茶
花曇り心任せの筏さし　外
蝶に別てもどる猿引　老
灯（ともしび）の珍らしくなる夕枕　茶
鎧手向るかまくらの方　外
松風の吹起したる雪踏で　老
妹が山茶花盛り也けり　茶
鑰（たが）入の泪くむ程なぶるらん　外
艮を解（ほどい）てもどす獺（かはをそ）　老
涼しさや赤い鳥居に月さして　茶

遊行の植し合歡しげりつゝ　外
小三太ははや十三の小脇差　老
美濃の德意に任す行灯　茶
どや／＼と閑師走も中過　外
梨買に出る客也寺が妻　老
風になびく朝茶けぶりと唱へ拾　茶
舟の日記の多き吉日　老
みちのくの錢一メに身を賣て　茶
貌つきあはす兄弟の春　外
花の旦花の夕にとしよらん　老
大悲大慈の初かすみ哉　茶

一茶十三句　鶴老十三句　天外十句

走り行名なら形なら磯千鳥　天外

あらし木がらし赤き夕峯　鶴老
五六年藁の小家に伏くれて　外
鼠のわらふ秋のはじまり　老
月ささば楓の陰も匂ふらん　外
痞（つかへ）の晴るゝ露の先ぶり　老
ウ
長池の堤おりれば豊後橋　外
鶴の眞似する鳥の侘しき　老
涼しさに烏（ゑ）帽（ぼう）子（し）召せる御姿　外
樗（あふち）を送る宵の別路　老
思ふ事百年へても哀にて　外
南無阿彌陀佛木曾の棧（かけはし）　老
一概に寒う成り行三日の月　外
目をつくばかりさはぐ蜻蛉　老
鍋かりて蜆打込む秋しぐれ　外

花の序に砂をいたゞく　老
門守が寝言にかすみ引はりて　一茶
釣瓶おとしの春の鴈金　外
藍(ナヲ)染の匂ひを笹に押かくし　老
瘤取る鬼を祭る赤(せき)飯(はん)　茶
朽かゝる廊下を風の吹ぬけて　外
三里の灸にむせる實方　老
澁柿の花にせかるゝ普(ふ)門(もん)品(ほん)　茶
けふも暮行甲斐が根の雲　外
湖の端に小村のかたまりて　老
五文の酒に爺が舞ふぞよ　茶
子供等は嘘(ウソツキ)神を塗るらん　外
鶺の逃しけさかたの夢　老
名月の俵に萩をつゝさして　茶

霧にぬれたる山形の客　外
ナウ
どや〳〵と舟より上る栗丸太　老
　十里四方の見ゆる瓶風呂　茶
給りし替地は花の咲にけり　外
　祭りは過し人丸の宮　老
石などの玉の潮から長閑にて　茶
　よと町出る鳥おひが唄　外

天外十五句　鶴老十四句　一茶七句

草臥したねや時雨の筑ば(波)山　老
　我國の日をおがむ冬枯　外
白梅に月の莚の工夫して　老
　霞のかたへ放すし(篠)の弓　外
されはとそ勇立たる福わかし　老

雀はおどるうぐひすはなく　外
春風のはつせの縄を引はらせ　老
上手にならす晝飯の貝　外
うき人は山のむかふにありと聞　老
芥子の曇りに袂ぬらして　外
秋もはや月のしらける海士が家　老
世にあまされし蛙の聲　外
幻の桔梗刈かや糸すゝき　老
式部が日とて雨はふりきぬ　外
へら鷺に門のけしきを作りけり　老
腹一ぱいに寝タルはつ春　茶
花守が乙子の髻見はやして　外
淺黄にかすむ夜の大原　老
選集をしまへば崩す小家也　茶

酒ふるまふてゆづる鶏　外
裸(ナ)身ですむべきものよ神輿かき　老
辻の夜店のつゝじ紫陽花　茶
月のさすよ所(そ)の蚊いぶしうらやみて　外
御(ご)油(ゆ)の遊女のくや〱と寝る　老
若乞食適(あつぱれ)鼓ならしけり　茶
世界の花を我ものにして　老
暖に小判ならぶる會津盆　茶
寄合町の春の夕暮　外
鶯のとしも四十を越シぬらん　老
筆一本でたてし家藏　茶
頼(ナウ)朝の御成がす(済)みて閑(しづか)也　外
土人形を作る朔日　老
砂除の枳(から)殻(たち)藪も名所にて　茶

稲妻とぼす山本の雲　外

月くらき舟幽霊にもの着せん　老

（「月くらき」の作者、原本には「聲」とあり）

露心あれ吹く女郎花　茶

老十五句　外十三句　茶八句

文化八年　正月一日

初空や不二の埃のたゝぬうち　鶴老

初空や是にもほしき時鳥

草庵

〵節穴や我初空もうつくしき　茶

鶯や梅や無我には暮されず　天外

梅の地にしておく五間四方哉　〻

萬歳の丈（せい）の高さよ梅（の）花　鶴老

ひよ鳥の拾ふて行やんめ（梅）の花　〻

（〵は評點にして朱にて引けり、蓋し夏目成美が加へしものなり）

米搗や臼に腰かけ梅の花　一茶

蓬萊に南無〱といふ子供哉　、

其引

ひよ鳥のひろふて行や梅(の)花　鶴老

窓蓋上げて晝どろの春　一茶

夫(とと)嗅(かか)が桶の輪を組陽炎に　天外

あらけたゝまし酢賣酒賣　老

けふの月五尺の稲のざはつきて　茶

追るゝ鹿のよくおよぐ也　外

兼(ウ)好が莚の切と寝ても見ん　老

霰(あられ)來よ〱山の連歌||　茶

大かたは武藏さが(相模)みの人〱よ　老

身は傾城の今の夕暮　茶

風呂敷に恨十程書ちらし　老

釜をはき込むせとの潮　茶
名月の迹へ〳〵と立まはり　老
黒崑蒻をくるむ穂芒　茶
白露におどりの輿やさますらん　老
ところ〳〵舟を上る加賀衆　茶
我顔を花の木間（このま）にさし出して　老
うき世は彌生三日也けり　茶
夜をこめて、、坂越る瀬田蜆　ゝ
初郭公聲をおしむな　老
大雨に小野ノ小町をおがむ也　茶
魚屋の息子の茨刈行　老
松柏妾御殿のありさまや　茶
佛の鐘も戀ぐさにして　外
一時に蟬の小川へ這入る也　老

餅も降レかし卅日(つごもり)の空　茶
灯(ともしび)をいくらも付る假住居　外
桐のひろゝ葉に露奉る　老
三ケ月にたとへられたる御運にて　茶
黒髪山の遠く冷つく　外
む(ナウ)ら雨にふり残されし草の庵　老
此子たのむぞ又六が舟　茶
奉行所の使せわしくさゝやきて　外
鶴にをさるゝ如月の雲　老
一波際の花(とり)裴(ぬ)も花の咲(さく)やうに　茶
菫の上へ配る重箱　外

老 十四　茶 十五　外 七

其三

鶯や梅や無我には暮されず　天外
見よ世(よの)の中(なか)は皆菫也　一茶
春の月蛸壺よりも哀にて　鶴老
十町ばかり馬におくるゝ　外
麻の葉のさつとぬれたる涼しさに　茶
粽(ちまき)のやうな家の灯　老
ウ
かつらぎの鐘に泪のかゝる哉　茶
歌に詠れてつらき初雪　老
上張の上に荒縄引〆(しめ)て　茶
村にほしがる那須のしの原　老
相應にほまちの蕎麦も咲にけり　茶
山のあちらへ消る三ヶ月　老
初鴈に湯守が貌のきよんとして　茶
あら鬧(さわが)しき鉦の打やう　老

散花のそれさへいとふ御枕　茶
　文書く隙も不二川の春　老
乙松が獨活のあへものかい摑み　茶
　袋の紐のきれし朔日　老
閂丸が門から見ゆる男山　茶
　鳶にとらする鮒の腸　老
芍藥のかぼそきうちを樂みて　外
　朝な〳〵に直ス閨の圖　茶
うき人の影さへさゝぬ室の色　老
　仇鹽からきいせの喰物　外
松の木にくだらぬ發句ぶらさげて　茶
　百になる迄灸ぎらひ也　老
さればとそ明ひろげたる無常門　外
　道灌殿のめで給ふ月　茶

刈萱と桔梗とすまふ始たり　老
柱なでゝも秋は行らん　外
（ナウ）古郷の片禿山を夢に見て　茶
時に范蠡飯を焚けり　老
板の間の廣サ千疊ばかり哉　外
兄方に當る花の刀禰川　茶
鷽姫も丸一日は鳴かぬ也　老
山鳥の尾に霞引する　外

天外八　一茶十四　鶴老十四

七日會

鶯の聲をかざりの枕かな　竹里
鶯の親子仕へる梅（の）花　一茶
大聲や廿日過ての御万ざい　ゝ

（「七番日記」に、正月七日、竹里来、とあり、句は「七番日記」には左の如く出せり）
鶯や古く仕へし梅の花
初空を拵へてゐるけふりかな

初空を今拵へゝるけぶり哉　ム

員外

黄鳥の聲をかぎりの枕哉　竹里　里
菊苗伏せて十日目の露　一　茶
草餅の臼の中より月出て　鶴　老
さし来る汐に舟廻す也　天　外
里人よいづれの山が涼みよい　茶
榎の下に膳を並べる　里
ひた〳〵とよみ終タル提婆品　外
摩耶の高根に雨が降る迚　老
懐は三文程の寒さ也　里
草をかぶせてかくす行灯　茶
上紺に染通したる戀なれや　老
盆の踊の足揃へする　外

宵の月柞（ははそ）を里の名に呼て　茶
稻の匂ひの門に吹き込　里
弟は天神樣へ走る也　外
雪でつくねし淡路島山　老
如月や朔日ごろの花の空　里
蛤やけば旅のありさま　茶
陽炎に倒るゝ程の家かりて　老
文治五年の夢ばかり見る　外
黒髮を菖蒲に添へておくりけり　茶
入梅晴るゝ市人の聲　里
大鍋に馬の喰ものの拵へて　外
垣の外から盜む鷄　老
木がらしに尻を居（す）へたる葛西舟　里
御八日講（ごやうかこう）に參る夕月　茶

嚔(くつさめ)に紛らかしても露寒く　老
秋の流の藍瓶に入　里
童(わらはべ)か照り〳〵法師いとなみて　東陽
尾張などやも神無月哉　外
寒菊や今も糠(こぬか)のかゝる也　茶
爺が命をつなぐ水飴　老
春雨は平野の方へ降去て　里
車の御簾(みす)に運ぶ雛の音　陽
遍昭が花もはら〳〵咲くならん　外
みそすりかけて箱根越す也　茶

九日夜探題

けろりくわんとして雁と柳哉　一茶
下總へ一すじかゝる柳かな　ゝ

柳さし〳〵ては念佛哉 〃
番町や夕飯過の凧(いかのぼり) 〃
今様の凧の。上りし山家哉 〃
○イ上りけり乞食小屋

十日會

○初空へさし出す獅子のあたま哉 一茶
あさら井や猫と杓子と梅(の)花 〃
うす壁やどちの穴から春が來る 〃
辻諷ひ凧も上ッて居りにけり 〃

相馬京舊懐

梅さくや平親王の御月夜 〃
三ケ月やふはりと梅に鶯が 〃
鶯の鳴てをりけりひとり釜 〃

狂歌

手をそらし〳〵つゝいけ花の
はなの身ぶりを仕る哉　ゝ

正月や子供がする團十郎　　天外

片かげや這入ば直に梅の花　　鶴老

蓬萊や親ありし時の朝げしき　　素淳

何せうとまゝぞ朧の丸‥夜　　東陽

竈獅子や大口明て梅の花　　一茶

正月廿九日於本行寺會

陽炎や道灌どのゝ物見塚　　一茶

茶の花と知りつゝ呑や釣瓶から　　一瓢

むつまじや生れ替らば野べの蝶　　一茶

（本行寺｜江戸谷中にあり法華宗、一茶の親友なる一瓢［清水氏］住持す「七番日記」に、二十九、巳刻より雨止本行寺に入）

辛崎や田も打上て夜の雨　ゝ

(茅生)あさぢふや歩きながらに鳴蛙　ゝ

象潟や櫻を浴てなく蛙　ゝ

我庵や蛙初手から老を鳴　ゝ

赤馬の鼻で吹けり雀(の)子　ゝ

月さして一文橋の春邊哉　ゝ

小大工の貌に似つかぬ長閑哉　少年　米堂

墨つける笠の端より長閑也　鬼一

春雨に呼るゝ窓のけぶり哉　一和

鶯が腹をへらすや南吹　和扇

わか草に門の葎もうき世哉　蛙足

長閑さや親子の貌へ風の吹　一笑

家程の霞が出來て鳩の鳴　一竹

○黒土や草履のうらも梅(の)花　一茶

下手つきの梅の初花咲にけり　〃

春雨や貧乏樽の梅の花　〃

春雨に大欠（あくび）スル美人哉　〃

○餅買に箱てうちん（提灯）や春（の）雨　〃

門口のいぢくれ松も朧哉　〃

鍬かまのカンともいはず春（の）雨　瓢

陽炎やされば柳の植所　祇兵

せき候や跡から急ぐ小節季候　〃

棒桐を留主の〆（しま）りや朧月　〃

畠打や手渕をねぢる梅（の）花　一茶

不性神そとのき給へ春の雨　〃

二月廿五日より開帳

春風や牛に引れて善光寺　〃

人の來て元日にする庵哉　佐原　もと

漣やけぶりにさはる夕燕　太節

草の戸や人のさしたる柳陰　兄直

鶯にすゝめられたる草履哉　月船

白梅の四五日さくやしゞ（蜆）め汁　〃

菅笠の外はかすみの野山哉　青岱

佐川田へかたるな花に朝寝すと　對竹

わら苞やとうふも見へて春（の）雨　一茶

八集題火防

門の木や念彼觀音の春の雨　〃

暮春

山さくらそなたの空も卅日哉　〃

ゆさ／＼と春が行ぞよ野べの草　〃

根岸にて

山吹をさし出シさうな垣ね哉　〃

鍬の柄に鶯なくや小梅村　〻
月花や四十九年のむだ歩き　〻
花の月のとちんぷんかんのうき世哉　〻
花守りや夜は汝が八重櫻　〻
花の木にさつと隠るゝせがれ哉　〻
二月（きさらぎ）や天神さまの梅の花　〻

閏二月廿九日といふ日、雨も漸をとたりぬれば、朝とく(頭)陀袋首にかけて、足ついで、例の角田堤にかゝる、東はほの〴〵しらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに上の成らせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤〴〵とうかめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はこと〴〵く板をわたして、おのおの御遊を待つと見へたり。誠に無心の草木にいたる迄、春風に伏しつゝ、めでたき御代をあふぐとぞ覺へ侍る。

五百崎や御舟をがんで歸る鷹　茶

木母の鐘曉をつげて、又なく閑（しづか）也、花のあたりに魁の聲有、したひ行けば、木根に腰打かけて、梅干のしわびたる老法師が手爐の灰うつくしくなしつゝ、淋しさにたへたる人

つらばたばとの火ほどこきんつら（面）つきして、あたら櫻を誰にか見すべきと、ひとり言いふさへいかにもたゞ人とは見へざりけり。そこにしばし休らひけるうち、又寢亂髮のちりもはらはで、やうし（楊枝）といふものに齒をすりつゝ、ぬり下駄から〳〵ならして、あちとちさまよふさま、男十人もちたらんやうにいろ〳〵しくぞ思れける。又坂の下より男五六人聲たごといふものに朸の迹前にゆひつけつゝ、かさい（葛西）鳥の鳴やうにはなしもて來りけるが、程なく木陰に立かゝりて、女のかたはら過がてに、山神けしかる朝起よな、雨もやふりなんなどさゝやきけるを、女はやくも聞とがめて、おのれいしくもいひつるものの哉、今一度さなのゝしりそ、しや首ねぢふせ、しや足打折らんなど、女ににげなきわろ口も、花の雪のちり〳〵に吹ちりて、心に留るけはひもなく、是らも木間の春げしきとはなりぬ。

（あふこ——天秤棒）

　　下〳〵に生れて櫻〳〵哉　　一茶

（此文「七番日記」にもあり、而して此次に、けさの春四十九だやもの是も花の句を加ふ）

文化八年閏二月十三日

　　花を折ル心いく度もかはりけり　　成美

（「七番日記」同日の記に、随齋にして若翁奉呈に會す）

さく／＼汁の春の夕暮　茶
鳥打がかすみの布子ぬき替て　美
あらうつくしの橋のかけ様　茶
箕であふつ粉糠の先の三ヶの月　美

（原本「粉」の字朱書せり、成美の筆の跡と見ゆ）

木權かざして人の行らん　茶
赤ウ染が露の印の石を見て　美
あらくれ武士に身を任せつゝ　茶
匂ひなき木地の小箱を打詠(ながめ)　美
涼しき足しにならぬ柿の木(かきのき)　茶
短夜の袴をぬらす地藏講　美
欠(あくび)法(はつ)度(と)と書て張る也　茶
笠程に湖見ゆる窓きりて　美
鼓うち／＼よばる旅人　茶
山雀(やまがら)の袂をぬける月寒く　美

うき世は花の胴ふぐら哉　茶
舟にめす入道どのゝかげろひて　美
長閑也ける乞食の舞　茶
二
鐘(の)聲あれが大和の西なるや　同
明家へ這入る一期つたなし　美
白梅の片開きなるとしとりて　茶
あばたの君と誰か名によぶ　美
戀衣大行灯に打かぶせ　茶
三輪の鳥が耳につく也　美
秋風の賢者を流すはりま潟　茶
藥王品の草に入る月　美
桐一葉三葉四葉にかや葺て　茶
雨の茶湯の人を待かね　美
古沼に小桶を浮す夕げしき　茶

財布おとしていふともなし　美
ほか〳〵と壁の穴から花の春　茶
子ノ日を老にくやむ針立　美
東風吹けばほまち無盡のはやる也　茶
宵は更しか黒犬をふむ　美
臼唄のわか松(樣)もねたましや　茶
杉の葉程に髮は細りぬ　美

成美　十八句　一茶　十八句

卅日なき所が有やら歸る鴈　一茶
梅の花雀がつんで仕廻けり　〃
五月雨の翌は檜もたのみ哉　成美
乙鳥の親の後れ子を鳴　太筇

麻染るさら／＼小川さら／＼に　一茶
靱(うつほ)かつぎと人によばるゝ　美
ちる露に月の心のうつるかと　節
今や栗やけ二郎三郎　茶
寅ノ日の古き兜にわせ盛りて　美
うき世の端の甲斐の猿(さる)橋(はし)　幽嘯
うつくしき夢見る家をむすぶ也　茶
遊女の情霰ふりけす　節
ちる柾(まさき)葉守の神はないじや迄　嘯
けふ聞初る丘寺の鐘　美
尺(た)八(け)吹に別て後の秋〔の〕風　節
うどんの上も皆月夜也　茶
冷／＼と放下の袴かしてやり　美
死損ひの紙魚とた(戯)はれて　(原文闕字)

青疊ぱつぱと花のちれかしな　茶
山葵の泪うつりたりけり　節

二

古かぢの跡とりするし宵の春　嘯
人にかくして鳥さしに出る　美
菅嚢をいた〳〵しくもきせ申　節
閨にほしがる小百合なでしと　茶
いやながら五年預る佐田(の)宮　美
國が芝居の名の通り來る　嘯
桐(の)木に目鼻を書てわらひけり　茶
いざ藥めせ鴨の夕聲　節
芦火焚かげに兜(と)巾(きん)をひけらかし　嘯
名を替てより木賀を別るゝ　美
誰やらは都の月をきらはれて　節
たゞ七文の花の朝顔　茶

（此歌仙一卷は年代より云へば、此中にあることは不審なり、紙は別紙三丁にして字體も前後のものと相應せず）

傘(ナウ)張は秋に隱るゝ傘の陰　美
よい子拾ひに參る階(きざはし)　嘯
かつらぎや外山の雲にものいふて　茶
佐川田どのゝ花に瘦たり　節
草の香に額をつけし墓(の)聲　嘯
夕貌蒔てしづかなる暮　美

成美十句　太節九句　一茶九句　幽嘯八句

文化三年十一月廿五日

鳥買の行や霜おく漂(みをつくし)　太節
家さへあればけぶる寒空　成美
枝ながらの松の倒木引捨て　乙因
飯より白き菊を寢て見る　浙江
宵〳〵の月夜に牛を撰ぶらん　一茶

秋の哀にまけぬ日もあれ　太
貰ふてはやたらに植る草の株　美
あだし心をうつすうら富士　因
斧の柄の古くもならぬ戀をして　江
一むら竹に鶏を葬る　茶
さく花の京を小脇に家もてば　太
柳見がてら米買に出る　美
青天の淋しく神の鳴初て　因
うれしき物を膝に置けり　江
はる〲の心とけたる善光寺　美
荻も誠の秋になり行　太
こそつり（こつそり）と蜆口明く薄月夜　江
浴衣忘れし露の中垣　因
貫之が眠りし榎祭る也　茶

卯浪の比の蝶のへら〱　美
さま〱に田蓑の雨を佗果て　太
夢見る家は別に作りし　茶
人憎きあまりに餅をくひちらし　因
御葛籠馬を畫にうつすらん　太
めた〱と二月になりて旭さす　美
菫のおくの謎ときをよぶ　因
雀にも胡葱(あさつき)鱠(なます)祝(いはは)せて　茶
二ツばかりは見たる玉川　美
横柱それさへ月の馴安く　太
袷着たさに鈴をならしつ　茶
舜を踏で小沙彌のあはめられ　因
僅の雲の潮にかぶさる　太
盃を並てものをゆかしがり　美

筆に追やる鳩の餌ぶくれ　因
たゞ頼め昔念佛の花の時　茶
杉のあはひの水の糸遊(かげろ)ふ　太

十六日の晝ごろ、きせるの中塞りてければ、麥わらのやうに竹をけづりてさし入置たりけるに、中につまりてふつにぬけず、竹の先わづかに爪のかゝる程なれば、すべきやうなく、欠(かけ)殘りたるおく齒にて、しかと咥(くは)へて引たりけるに、竹はぬけずして、齒はめりめりとぬけおちぬ、あはれあが佛とたのみたる齒なりけるに、さうなきあやまちせしもの哉、かの釘ぬくものもてせば、力も入らずすら〳〵とぬけぬべきを、人の手かることのむづかしく、しかなせる也。此寺は廿年あまり折ふしにやどりて、物事よ所(そ)〳〵しくはあらねど、それさへ心まゝならぬものから、かゝるうきめ(憂目)に逢ひぬ。まして四十余年の草枕、狼ふす草をかたしきて、夜道たましひ消るおそれをしのび、あらし吹く舟をやどとして、底の藻屑に身を浸すうさ(憂)をしのぎ(凌)、たま〳〵花さく春にあへば、いさゝかうれひを忘るゝににた(似)れど、ほと〳〵露ちる秋の行末をかなしむ、重荷負ひて休ふごと

（此文「七番日記」文化八年六月の部に出づ、但し一釘ぬくものにてせはする〳〵とぬけぬへきに」にて止む）

く、たのしみ（楽）のうちにしる（苦）しみ先立、其折〳〵に齢のひたものちゞ（縮）まり行くことを、今片われの歯を見るにつけつゝ、思ひしられぬ。いつの日むしろ二枚も我家といひて、人に一飯ほどこさるゝ身となりなば、是則安養世界なるべし。

しわ聲に呼べども〳〵ほたる火の
聞ぬ貌してつい走りけり　一茶

かり〳〵と竹かぢりけりきり〳〵す　〃
ちさいのは眞正面なり雲の峰　〃
涼しさは雲の作りし佛哉　〃
心から鬼とも見ゆる雲の峰　〃
門涼み爺が乙鳥の行義也　〃

淺草反甫（たんぼ）にて

夕立にうち任せたりせどの富士　一茶
。切株にすり鉢きせて閑古鳥　〃
植る田やけふもはら〳〵歸る鴈　〃

のつきつてさみだるゝ也二番原　ゝ

夕されば螢の花のかさい(葛西)哉　ゝ

。夕立や乞食どのゝ鉢の松　ゝ

。夕暮の腮(あご)につゝ張る扇哉　ゝ

唐きびも闇の涼(すずみ)のたより哉　白老

さは〳〵と夕貌の夜もなくなりぬ　一茶

露の世の露を鳴也夏の蟬　ゝ

上總國百首(ももくび)の郷は、東南に山連り、西北にうみ(海)開けて、防人(さきもり)の備へに究竟の地なりとて、此度陣屋いとなむ繩張りといふこと有。其畠の瘤(こぶ)のやうにさし出て、妨なる小家あり。主と見へて翌をもしらぬ老婆ひとり、麻(を)をうみて居たりけるを、奉行人深く憐みて、汝子ありやといへば、老婆いふ、男(を)の子ひとりもちたりけるが、いつ〳〵のとし古郷をよ所(そ)にふり捨て、今は江戸の本所とやらんに、人の髪ゆふわざ(業)をなすよし、風の便りに聞侍るとばかり、泪はらひ〳〵とたふ。さあらば其男呼返すべし、よろしき替地に

かひ〴〵しき家をあたへん(與)、しかのみならず、其男には永く髪結司のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ふち(扶持)といふを申下して、身をやすくすぐさせん、あさ糸の細き稼ひをやめて、遲々たる春の日にはちりかふ花に無常を觀じ、凄々たる秋の夜にはかたぶく(傾)月に西方をねがひ、明暮心任せに菩提の種を蒔なば、なんぼうたのし(樂)からん、汝が此家とのかまへのさはり(障)になることそ、天より汝に幸ひ下給ふなれ、とく〴〵爰をしりぞき、あしとにうつれよといふに、老婆むく〴〵と腹立たしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふよう、よくもあざむき(欺)給ふもの哉、是はわらはが先祖よりいく世ともなく住みふるして、大事の〳〵栖なれば、たとへ黄金星にとゞく程給るとも、我目には一椀の麥飯にしかずとこそ思ひ扑へ、たゞ〳〵此はにふ(埴生)の小屋とそさう(双)なき寶なれ、よしや命斷ルとも、外へは行かじと、手すり足すり泪を作りて泣かぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も今は施すべきようすがなく、老婆のち(後)になく(泣)ひそと、ふたゝび繩はりして、つひに其家をよき(除)て地とりなりぬ、あはれ月日の照らすかぎり、露霜のおつる所に生とし活るもの、たれか國命そむき奉らん、しぶときをと(烏滸)の者にぞありける。

（泪、原本に貝に誤る）

月さへもそしられ給ふ夕涼み　一茶

（此文「七番日記」五月の部に出せり但し異同あり）さはいへ、そだち盛りの田畑とき捨られて、かなしむもむべ也けり。

（百首の郷は千葉縣君津郡竹岡村にして金谷町の北に當るところなり）

青稲や薙倒されて花の咲　ゝ

古かゝし三ッ四ッそれも角田川　一茶

萩の葉も二の足ふむや迷（ひ）鹿　ゝ

蜱にふみつぶされし蚯哉　ゝ

露見ても活て居（なら）るゝ住居哉　ゝ

秋の風一茶心に思ふ様　ゝ

題松島

嶋〳〵や一とぶしづゝ秋の暮　ゝ

象潟や田中の嶋も秋の暮　ゝ

初雁や芒はまねく人は追ふ　ゝ

雁とぶよそれ〳〵そこが鬼の家　ゝ

荻の葉にひら〳〵残る暑さ哉　ゝ

象潟やそでない松も秋の暮

〽三日月に残る暑さぞたのもしき

(すおかひ、原本に「すしくひ」とあり「ち」と朱訂す)

角力場やけさはいつもの細念佛　〻
角力とりや親の日といふ草(の)花　〻
夕暮を宗得心のかゝし哉　〻
〽薄月に殘る暑(さ)をたのみ哉　〻
〽蕣やうつとしければ晝も咲　〻
けぶりして露おりて無我の在所哉　〻

七月廿日素丸遠忌

かつしかやなむ廿日月草の花　〻
〽雁鳴や村の人數はけふもへる　〻
〽すぢかひに雁の鳴き込(む)庵哉　〻
〽はつ雁やあてにして來る庵の畠　〻
〽なか〳〵に人と生れて秋の暮　〻
牛の子の旅に立(つ)也秋の風　〻
名月や高觀音の御ひざ元　〻

なまあつき月のちら〳〵野分哉　ゝ

（青柴の句、のと書添えあり）

青柴や(の)秤にかゝるはつ時雨　ゝ

御地藏が何かの給ふ露時雨　ゝ

赤い月是は誰のじや子供達　ゝ

名月や女だてらの頬かぶり　ゝ

七月廿六日とろより北方七星の邊りに稲つかねたらんやうなる星現るゝ老人豊秋のしるしといふ

――

（「人並」は原句「里並」の朱訂）

人並や芒もさわぐはゝき星　一茶

むだ人や秋の夜寒の身つくろひ　双樹

小けぶりやさて又鳴の影法師　一茶

（「かふり〳〵ぞ」は原句「かふりかふりよ」の朱訂）

何事のかぶり〳〵ぞ女郎花　ゝ

秋風や壁のヘマムショ入道　ゝ

さぼてんの鮫は(膚)だみれば秋の風 〃

うしろから大寒小寒夜寒哉 〃

豐年を招き出したる芒哉 〃

ほ芒やおれが小びんも共そよぎ 〃

きり〳〵すふと鳴出しぬ鹿の角 〃

親鹿や片ひ(膝)ざ立て何かいふ 〃

名月や藪蚊だらけの角田川 〃

蜱が貌とそぐつて通りけり 〃

秋の夜やせう(障子)じの穴が笛を吹 〃

おち葉して佛法流布の在所哉 〃

千鳥鳴九月卅(みそ)(日)(か)と諷ひけり 〃

佛にも作る氣はなし庵の雪 〃

はつ雪や雪隱の供の小でうちん 〃

わら苞(つと)やもちろん鰒(ふぐ)と梅(の)花 〃

(供の字、原本洪に誤る)

はつ霜やかた衣(きぬ)かけてさす小舟　〻
庵崎の犬と仲よきちどり哉　〻
雁鴨よなけ〳〵としが留るなら　〻
正月の町にするとや雪の降　〻

普化忌

口笛も御意にかなふかはつ時雨　〻
門口に來て氷る也三井の鐘　〻

信州善光寺商人のいはく、けふは越後今町の沖にて漁あらんといへば、三日ばかりへて、必（ず）魚荷所せく迄引つゞきて來ぬ、けふはなしといへば、はたしてしか也、是其道に志深き物から、廿里をへだゝりたる彼地に魂もやかよふなめりと、友人柳荘常にかたられ侍りき。されば立砂翁と今は此世をへだてたれど、我魂の彼土にゆきき(往來)してしりけるにや、又佛の呼よせ給ふにや、十三廻忌といふけふ、はからずも巡り來ぬることのふしぎさに、そゞろに袖をしぼりぬ。

何として忘（れ）ませうぞかれ芒　一茶

法筵の夕かたなれば

此時雨なぜおそいとや鳴く烏

塚の霜雁も参て啼にけり

冬木立むかし〳〵の音す也

夕暮の頭巾へ拾ふ紅葉哉　立砂

紅葉葉や爺はへし折子はひろふ　一茶

寛政十年十月十日ところ二人てとなつ（手古奈繼）ぎ橋あたりを見巡りしときの事也

眞間寺で斯う拾ひしよ散紅葉

生残り〳〵たる寒さかな

眞直に人のさしたる樒（しきみ）かな

はつ雪やとても作らば立砂佛

來もきたり抑けふの御霜月

ちる木の葉則去(いぬ)ル夕かな

松蒔て十三年の時雨哉

木がらしや是は佛の二日月

けふ迄はちらぬつもりか歸(り)花

墓の前にて手向心の十三句也、人に聞すべきものにもあらねば、草葉の陰に穴をほりていひ入れぬ。

木がらしにしく〳〵腹のぐあひ哉

あら寒し〳〵といふも榮耀かな

合點して居ても寒いぞ貧しいぞ

ゐせ侍の祿をうしなひ、世にはふれて、小ばくち(博奕)にさへ負けほうけて、たよるべきよすがもなく、國々を巡りて人をおびやかし(脅)て身をやしなふ(養)と見ゆる輩、五人ばかりとかや、十二月二日の夕かたとよ、下總かとり(香取)郡鳩山村といふ所に來かかりて、一夜のやど(宿)

りたびてんやとひた乞に乞ひけり。しかるに名主といふものも、頗（る）心きゝ口かしこき男にて、さらにうけがふけはひもなくて、虻、蠅をはらふがごとく、聰の先にてあしらひけるが、後〳〵は聲をあらくし、目を皿にしてたがひにのゝじりあひけり。其間に名主はからひけん、かまびすしく鐘つき貝吹ならして、棒引さげ鎌ふりて、村人百人ばかりおしよせぬ。名主大音に、やよ〳〵きやつらにものないはせそと呼りつゝ、五人をひし〳〵と取たり。曲者どもも今を最期とや思ひけん、おの〳〵太刀ぬきかざして、しばらくたゝかひけるが、終に名主の首打おとし、むらかる（群）人を四五人きり（斬）伏せたりければ、むら人おそれて、風の木葉のはら〳〵と逃ちりけり。曲者共も闇のまぎれに走りうせぬ。かくて一日二日へたりけるに、其跡に神職の免状といふもの一紙おちちらばひてありけるを、村人おほやけに詔（訟）へけり。其一紙おとしたる者は、佐倉領六方野の神主、木田大進といふものゝ弟子にぞありける。大進けふ十五日、布川の里に妻ぐし（具）來りて、年忘といふ遊びすとて、諷ひ舞、鼓ならして、心打とけ戯れ居たるを、寝みゝに水のおし來るやうに、追捕使の武士どや〳〵とおしかさなりて、大進に繩かけて、鶤籠といふものに押込たり。そばにありあふ人〳〵は、顔色草の葉のやうに成て、我にもあ

らぬ氣色して立さはきぬ、大進は露おどろきたるさまもなくて、
鳩山で切て放した鷹はそれとんだなんぎが木田の大進、と高聲に吟じて、江戸松平兵庫
頭の廳へ引かれ侍りき。あはれかゝる期にいたりて、魂（たまげ）消たるけはひも見えず、又なく
肝（きも）ふときおとの者にぞありけると、里人かたり傳へけり。
又小見川の里いかけしが人を殺し、ばくち打（傳奕）が追剝すなど風聞、みな此あたりなれば、
小南行は思ひとゞまりて、布川の里にとしをとりぬ。

行としやたのむ小藪もかれの原

（此文「七番日記」十二月の部にも出でたれども之より簡略なり）

旗番

文化九年正月十五日、下總國相馬郡布川(ふかは)の郷なる月船亭に、日待といふことをして、人々こぞりて(擧)、夜の明るをなんまちける(待)折から、さる生かしこき(賢)人のいふ、としのいなり(稲荷)祭りは丙午といふにて、大火地火にあたれり、六十年に一度の大凶日なれば、其日地より火起りて、其けぶり(煙)大きくなりて、其災野邊の駒に及ぶ、おそろしき(恐)日也、つゝし(愼)むべしと、事觸が告たりしとかたり(語)ぬ。又隅の方より、白雪の土に汚れしやうなるかし(頭)らつき(付)しておこつきたる叟の、やをらよろほひ出ていふやう、雲をつかむやうなる根なしことをゆめ／＼誠とし給ふな、それは事觸等がそらよみと覺ゆ、大火には侍らじ、天火なるべし、ことし(今年)の初午は天地ことの外あたゝかになりて、かすみ(霞)かくれの桃柳、おのかさま／＼色をあらそひ、其たのしび野邊の春駒におよぼし、夢に見てさへよいけしき(景色)ぞよ、我／＼ごとき(如)老かゞまりたる身もめでたき(目出度)時にながらへて、うとんけ(優曇華)の花まつやうに、今からたのもしく思ふ也、そこ迄も火用心はしかる(然)べし、さらにおそれはあらじといふに、主手ばやく暦投出して、是見られよといふ、叟目しる(汁)ふき／＼、いく度もすかし見るに、しかいふごとく(如)大火也、しばらく小首かたぶけていふやう、昔長頭丸の句に螢もや暦には

（事觸―鹿島神宮の御告をふれあるくもの）

なき天火地火とこそつゞけ、是はいせ人のひかもじなめり、かくては上下とゝのはずと、とよみを疊めば、人〳〵同じ聲に、まさしく栗の花が咲ても木はならの木としひごと(讒言)のみないひそ、上み万乘の君より下乞食にいたる迄、天下のきく(規矩)となすもの、露おろかやあらん、ましてそなたのやうに衣のきたなげなるものゝ及ぶ事にやはと、きやら〳〵と笑ひ、わら〳〵とのゝしりあへり。

程なく來見寺の鐘曉をつげて、布佐臺の烏かは〳〵と鳴わたるに、おの〳〵はら〳〵歸りけり。是万人の定たる大火によらんや、一人の極たる天火にしたがはんや、思ふにふたつながら非なるへし、前日しか〳〵(かたしきられしきと書テ消ス)の事あれば必あらんと思ひとみて、空しき株を守る輩にぞありける。されば我らがたま〳〵練出せる發句といふものも、みつ(自)から新らしきとほこれば、人は古しとあさけ(嘲)る、ふたゝびよく〳〵見れば、人の沙汰する通り、いかにも古く、ほと〳〵おのが心にもうんじ果、三日ばかりも口を閉れば、是又木偶(でく)人のごとくへんてつもなく、よし〳〵汝はなんぢをせよ、我はもとの株番。

おのれやれ今や五十の花の春　一茶

(朱)。かゝる代に何をほたへて鳴蛙　、

（朱）◦行がけの駄ちんに鳴やけさの鴈　、

蝶と鹿のがれぬ中と見ゆる也　、

山烏おれがさし木を笑ふ哉　、

（朱）◦やよかゝにも御鶯ぞ寛永寺　、

猪ねらふ肱にすがる小てふ哉　、

うつくしや雲雀の鳴し跡の空　、

いたふりし今の乞食よつゝかすむ　、

鶯を招くやうなるわらび哉　、

春雨や翌ば何くふ浦の家　、

（別紙）

文化九年正月廿四日

霞口の咄するやら野べの馬　一茶

（「七番日記」文化八年十二月廿二日、布川に入、とあり、それより引つゞき滞在したるなり）

へそにあてたりやき飯の秦　鶴老
八巾(いかのぼり)庄屋の松に引かけて　、
朔日汐のやうな夕月　茶
綿市をいざ迚鼓打ぬらん　、
露もつ草を今しもて来ぬ　老
佗(ウ)ぬれば柱の数もむつかしく　、
車序に越るあふ坂　茶
夕立のかきなくる(マヽ、脱字アルカ)ゝ恨みにて　老
お竹如来を祭るさゝ百合　茶
惟然坊が鼻のひとつく涼風よ　老
天和二年と壁に張る也　茶
薄月のちら〳〵蝶の世となりぬ　老
大かはらけの花にまぶれる　茶
青草に獅々の頭を投出し　老

あらありがたの那智の晩鐘　茶
ひよろ長くつき並べたる橋の錢　老
臼ところがして皆あそぶらん　茶
二
牛の子も殿の御紋をき(着)たりけり　、
黄色なめしにかゝるむら雨　老
うれしさを蕗の廣葉に書つけて　茶
闇の灯の見ゆる節穴　老
御馳走に鷗ななきそ角田川　茶
としとり豆をはかる赤貝　老
木のはしの親をひたすらおがむ也　茶
咄に聞し大はらの里　老
有明の裸祭りが始りて　茶
九尺四方のきりの葉がちる　老
露寒き鹽茶の淡(あは)に住ならひ　茶

又来る人も狐なるべし　老
輿（ノリモノ（原））にさく〱花を吹つけて。　茶
苦ミのぬけし壬生の念仏　老
めし給へ爺が草飯召し給へ　茶
山時鳥はや過にけり　老
眉墨のたしにもならぬ杜若　茶
釣簾（みす）のうしろに立る仇人　老

西林寺に今日至来（到）の
一木満花也

あのくたら三百文の桜かな　一茶

（別紙）
おなしく廿八日張行

鶯も雀と寝てや軒の松　鶴老

（原稿は長句短句を高低なく書けり、次にウの置き所を誤りたるも其爲めなるべし）

ほんまの春よけさの有明　茶

一かすみ舟とぐ人にはじまりて　、

石をひろひに出たる小わら(童)は　老

おとゝひの連歌にまけてあやめ引　、

ウ(書キ所誤リシマヽ)桶の中からほたるとぶ也　茶

八九年野上の酒にわかやぎて　、

走り出てもしのぶ俤　老

たゝら踏音は師走のたゞ中よ　茶

大山伏の兜(と)巾(きん)すゞ掛　老

鍋飯につゝさす笹のそよぐ也　茶

圖(づ)にはづれたるむら雲の月　老

今捨る身の思出にお(踊)とらはや　茶

志賀の薪は露にぬれつゝ　老

ほの〳〵と虱の辻の風の吹　茶

山をゝ(敎)しへて逃す山鳩　老

能登どのゝ袖かけ櫻咲にけり　茶

ひゝなの宵の虫歯かゝへる　老

二

行春を追ツ立るやらたゝき鉦　、

鈴鹿は曇る宮の御馬　茶

ちる芥子のかゝるはづみなる泪にて　老

菜汁にかゝれ夢のうき橋　茶

一休の前に備へし小長刀　老

てうちあはゝで暮す末の子　茶

鳴雀きのふに替る寒かな　老

河内國へ三足ふみ込　茶

茶をまいれ江湖(ごうこ)崩れの羅漢達　老

それも咲たりな垣の朝貌　茶

大名の寢間迄月のさし入て　老

とんと度の角力面目もなし　茶
さればとそ美人に似たる角田川　老
なんぞふるまへ婆ゝが草庵　茶
百年に一度かそとら鶴の鳴　老
おの〳〵赤き木綿たつ也　茶
初花に角を並べる芋頭　老
さあ是からはおれが春風　茶

二月一日至(到)來文通

二ッ三ッ喰ふがまどの雑煮哉　金令
梅翁の塚と聞さへ春ごゝろ　〃
凧上る人かげ寒し高貲垣　〃

（別紙）

題鶴亀松竹

鳴鶴の退屈もなしいせの海　鶴老
彌陀佛にたまはる亀の齢哉、
住吉の松にかくるゝ月日かな、
皺貌を洗ふて見ばや竹の雨、
（朱）
○鶴の子の千代も一日はやへりぬ　一茶、
（朱）
○亀どのゝいくつのとしぞ富士の山、
（朱）
○松陰に寝てくふ六十よ州哉、
竹にさへ丸にまろきはなかりけり、（此句、書違ヘカ、「七番日記」参照）

（七番日記、
竹林是も丸きはなかりけり
竹にさへいびつでないはなかりけり
竹つい〳〵天にさはらぬ氣とり哉）

（思ふ事とは――芭蕉作の狂歌なりと云はる）

思ふ事二つのけたる其跡は花の都もいなか也けり、と此ふたつは何やうのものならんと、ある知職（識）に尋ければ、それは牡丹餅と饅頭なりとたへ給ふとかや、いとありがたき事になん

―正月十六日布川閑蓮堂に参りて

〔原本に役人の手跡にて「淨破利の鏡の月の難波江やよしあし言の葉にやそうつらふ　讀人しらず」と註めきたるものを記せり〕

ちる梅の影かはら〱淨破利(淨玻璃)の
かゝ(鏡)みの中も春風ぞ吹。　一茶

題猫小判

君か代は猫も杓子も夫婦哉　鶴老
月雪花ほとゝぎすにも小判哉　〃
(朱)。三日して忘れら(れ)ぬか野らの猫　一茶
(朱)。小けふり(烟)も小はん(判)のはしそ江戸(の)空　、

賀治世

松陰に寝てくふ六十よ州哉　、
鶴と遊(ぼ)ん龜とあそばん　老
月影のだん〱細き春なれや　、
八重山吹のかゝくす行灯　茶

鮓賣の聲をつんづと東風吹て　、
子どもの走ル辻の獅々舞　老
むく起に肝のつぶれし蚕の迹　、
五尺の菖蒲見ぬ別して　茶
うき人の鎧も山に朽ぬらん　老
散たばしる朔日の膳　茶
又ふ(吹)けと又せがまるゝ螺(ほら)の貝　老
あ(阿)はう(呆)に長き加賀の金澤　茶
ほちや／＼と餅屋が月は出たりけり　老
鈴ふり二人急ぐ秋風　茶
雁がねのおち来る程にくゝるほどに　老
寝(ね)茎(ござ)も捨よ風呂もわかせよ　茶
有がたや東叡山の花の雲　老
かすみたがりて歩く供の衆　茶

鶯に赤の御飯をふるまはん　、
　不二を向ふにしたる海士(あま)が家　老
忍夜(しのぶよ)は只どひやうじに明過て　茶
　ひち笠雨のうつり香をとく　老
青簾三日都といはゞいへ　茶
　笋(たけのこ)ほりに其角嵐蘭　老
宵の月はした祭りは過にけり　茶
　霧一面に三井寺のかね　老
不甲斐なき御最期かくせ糸芒　茶
　菓子を貰ひに出たる山猿　老
権禰宜(ごんねぎ)が小春日向にはたかりて　茶
　しぐれの舟の迹もどりする　老
山(ウ)城の入口見へて茶のけぶり　茶
　菩薩の貌の眞ッ白き也　老

梅か(香)ゝの垣への草履は五文にて　茶

花に吹かれて参る糞(こえ)汲(くみ)　老

格別に世(の)中よしと鳴蛙　茶

藍でそめたる明ぼのゝ空　老

題六道

地獄

(米)
。世(の)中は地ごくの上の花見哉　一茶

是がまあ地獄の種か花に鳥　鶴老

餓鬼

(米)
。花ちるや呑たき水は遠霞　一茶

しらぬ火の春も忽暮にけり　鶴老

畜生

(米)
。散花に佛とも法ともしらぬ哉　一茶

牛馬の寝てくふ春の野山哉　鶴老

修雑

散花に太刀長刀もかざり哉　老

(朱)○穴一のあなかしましや花の陰　茶

人間

人〳〵よ花もあらしもうはの空　老

(朱)○さく花の中にうと(蠢)めく衆生哉　茶

天上

(朱)○かすむ日やさぞ天人の御退屈　、

永日と思ふ程なほ暮やすし　老

欣求浄土同行百人

我一にかせげよ〳〵花の春　、

元日

云(いな)なしの花の先さく世界哉

といふ句を、ある旅人とれ解せるにやと問ふ、おのれさら〳〵とけ(解)がたきといへば、是大切の事なれど、一樹の陰も他生の縁と聞からに、をしへ(教)とらすべしと、懐より和歌呉竹集といふもの出したり、其書に曰、梅の異名をさしていひなしの花といふ　古今集

うち渡す遠方人に物まうす我そのそこに白くさけるは何の花ぞも

是は梅の咲たるを遠かた人にとひかけたり　返し

春されば野邊に先さく見れどあかぬ花まひなしにたゝ名のるへ(き)花の名なれや

歌の心は、花も云なしにて、あれは我とたへん花の名にあらずと、梅を賞翫していへる也、是よりして、梅を云なしの花と云也

云なしに花もなのらぬ匂ひかな　宗祇

此句の心は梅かゝ(香)は人の云なしにてけがるべきにあらずとなん注し侍る、是おのれごとき(如)のをこ(烏滸)かましけれど、此解のさまにては夢にいめ(夢)見るやうにとり所なく覚ゆ、是は賂なしにたゝ名のられぬ花のといふ歌の心と聞侍りぬ、發句もまひなしになのられぬといふを書あやまりて傳へしものならん、さなくてははきとわきがたき也、おぼつかなく思ひ給は(はは)、

古今打聞といふもの見らるべしといへば、旅人あきれたる貌して、わどのはおのがしらざるをば棚へあげて、大事の書に泥をぬりぬ、彼慈悲すればはこ（業）するとはそこのヿ也迚、口をとが（尖）らして歸りぬ、世の中にはかゝるねんごろなる人もありけり。

彌陀佛もゆるせし龜の齡哉　鶴老

和歌の流を染色の山　一茶

有明の初花守に補せられて　、

大蛤に春は立けり　老

めり〳〵と霞の中をおし歩き　、

世はヿ〳〵く更衣する　茶

小（ウ）蓮の子ににぎらする芥子花　、

局の泪ほねをとくらん　老

御灯を初瀬の御山につきつけて　茶

追儺（難）の宵のあらし凩　老

酒くれて長尻どのを歸す也　茶
髻切ておくるふる鄕　老
宗因の大事がられし月か今　茶
はつ〳〵と立たる小雀山から　老
お花薄ほや(穂屋)のはくちがさは〳〵と　茶
見に放れたる狩人が妻　老
うつくしき年打暮て仇火たく　茶
さのゝ渡りに馬を逃して　老

二

竹垣も禁の御用に立かとよ　、
袖つゝ張て茶を詠る　茶
涼風の西も東も砧うつ　老
聖霊もまいれかまくらの米　茶
ひよろ〳〵と朸の先に月出て　老
山から見ゆる土間のへつ(竈)ゝい　茶

九十九の母をしばしと笹の上　老
足利様の御代の青空　茶
草枕昆布かぶつて寝たりけり　老
赤鬼致せやよ太郎冠者　茶
大雪の夜に大鍋をか(借)りかねて　老
辨才天をおくる川舟　茶
鶯(ナ)のとしより聲のなつかしく　老
志賀の菫に丸二年すむ　茶
咲花に大小さしてまかり出　老
へ(ぺ)そ(こ)かく妹を駕にへし込　茶
百年も思ひ切たる文書て　老
我名やなきそ奈良の小男鹿　茶

古鐘やかすめる聲もむつかしき　一茶

鶯のさて大つらもせざりけり　、

世につれて菴の草もわかいぞよ　、

はんの木のそれでも花のつもり哉　、

かすむ日や鹿の寝て行さらし臼　、

御不運の佛の野梅咲にけり　、

三人上戸

笑

古蔦も笑へやわらへふく俵　老

と、喰た花と指す佛哉　茶

泣

（朱）ノン（夏）
○吞太良泣ならやらん梅の花　仝

夜明から泣せ給ふや花の神　老

岱

鶯が來ても腹立上戸かな　仝

東風吹や今ほふ(つ)たる陶から　茶

團十郎

咲たりな江戸生ぬきの梅(の)花　一茶

春もはや千兩箱の夜明哉　鶴老

芥子之助

(朱)錢降れとをがむ手元へ櫻哉　一茶

ちる花の間へちよいと月夜哉　鶴老

濱藻

鶯や田舍巡りのおちやつぴい　仝

乙鳥よ紅粉がたらすば梅の花　一茶

住空聲聞未必鈍根

梅の木や月がなくても其通り　仝

何のそのだ(默)まつて居ても鶯は　仝

題東都

(朱)○かすむぞよ金のなる木の植所　一茶

(朱)○錢から〳〵敬白(うやまつてまうす)ん(梅)めの花　、

(朱)○はや淋し朝皃まくといふ畠　、

不忍池

(朱)○永の日を喰ふやくはずや池の龜　、

雜

(朱)○佛ともならでうか〳〵老の松　、

松苗や果はいづくの餅の臼　、

とつてなと我をもおふ(負)へ礒の龜　、

修羅といふ題をとりて

腹中は誰も淺間のけぶり哉　、

(朱)○鷄に修羅もやさせて遊ぶかな　、

猫小犢

耻入てひらたくなるやどろぼ猫、
古猫の蛇すら(るトモ読ミウレド)不性〳〵哉、
同じ世をへろ〳〵百疋小ばん哉
(朱)。天、からでも降たるやうに櫻哉、

葛西辭

せなみせへ作兵衛店の梅だんべへ、
青柳も(マヽ)(お、脱カ)見さめしてや歸る鴈、
(朱)。おりよ〳〵野火がついたぞ鳴雲雀、
。どちむくも万吉(よろづきち)とや鳴蛙

(別紙)
十二日まれの晴天なれば、籠山を出て、あたご町といふ所を過るに、いまだ廿にたらぬと見ゆる女の、荒布(あらめ)のやうなるものを身にまとひ、古わらぢ馬の沓のたぐひいくつとも

なく腰にゆひつけツヽ、黒髪に箸あるひは（煙管）きせるなどさして、かくす所もかくさず、あらぬさましてさまよふ者あり、人にとへば、おすか氣違とて、此里のものなるぞと、何として佛神に見はなされたるや、盛りなる菖蒲の泥をかぶりて、折る人さへもなく思はれて哀也、汝父やあらん、母やあらん。

（布施東海寺は千葉縣東葛飾郡富勢村にあり、布施の辨天といひ櫻の名所なり）

（「七番日記」二月十二日の欄に「二十二、大晴、布施紅龍山東海寺に詣で流山に入」）

一

布施東海寺に詣けるに、鶏どもの跡をしたひぬるヿの不便（ふびん）さに、門前の家によりて、米一合ばかり買ひて、菫蒲公（すみれたんほほ）のほとりにちらしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始たり、其うち木末より鳩雀はら／＼と（飛）ひ来りて、心しづかにくらひ（食）ツヽ、鶏の来る時小ばやくもとの梢へ逃さりぬ、鳩雀は蹴合の長かれかしとや思ふらん、士農工商、其外さまざまの稼（なりはひ）みなかくの通り。

米蒔も罪ぞよ鶏がけ（蹴）合（あふ）ぞよ　一茶

（別紙）

春風や浮名も立し古地藏　以樹

梅さくや閑はきらひな今の人　ゝ

青柳や樒(しきみ)提(さげ)るも片ごゝろ　、

青柳や腐(つ)た錢も芽を出して　、

蝶〳〵や草に寝るのも是らから　、

(朱)○麥の葉も朝きけんぞよ春霞　一茶

○花の咲くうちにしまへよ鳴蛙　、

蝶どももうろ〳〵慾のうき世哉　、

一 下總田歌

あれみさい筑波の山の横雲よこ雲の下が我らが親の里

(朱)○有明の雁になりたや行かりに　一茶

十七日 隨齋會

(朱)○おくるぞや佛法わたる花も咲　一茶

(朱)○一大名蝶にまぶれて仕廻けり　、

（「七番日記」に、
十五、晴、江戸入
随に入
十六、晴
晝より雨
十七、随會出筵
晴、南吹書
雷氷降
十八、小雨
本行寺入）

十八日　本行寺

（朱）○陽炎や貝むく奴がうしろから、
（朱）○乙鳥や里のぱくちをべちやくちやと、
（朱）○山〳〵は袂にすれて青むぞよ、
（朱）○花さくや榎に張りし火用心、
（朱）○薑（はじかみ）や天神さまのむら雀、
（朱）○雛達（ひいなたち）そとで見やしやれよしの（吉野）山、
（朱）○ついそとの二文渡しや春の月、
むさし（武蔵）のやたゞ一ツ家のうかれ（浮）猫、
松原に何をかかせぐ子もち猫、
猫なく〳〵や巾を流るゝ角田川、
なの花のとつぱづれ也ふじの山、
春雨やてうちん持の小傾城、

（「七番日記」に、
三月
一、晴、寒、流山
に入
二、鰭か崎はか参
晴夜一雨
三、風邪
曇晝より晴）

三月三日

翌は又どこぞの花の人ならん　双樹
川なら野なら皆小てふ也　一茶
水風呂のゐひして焚きぬ田うち時　樹
宿ちんだけの居(ゐ)合(あひ)はじめる　茶
腰伸よ〳〵卯の花うす月よ　樹
藪蚊の中に御馬よぶ聲　茶
手(ウ)でなでし壁も三とせの夢にして　樹
遊女が墓に膳居(す)へる也　茶
そこといふ所(とこ)も一里の上總路や　樹
貧乏鳥すとししぐれよ　茶
掘植ルひよろ〳〵松に餅うれて　柳（樹ノ誤カ）
濱の喧嘩に又枝がさく　茶
布施に引荒山畠淋しげに　樹

親の眞似して月を見る哉

風の秋うつせの舞がはやる也

柱に張りし御彼岸の事

淺ましの老を櫻にかとつけて

志賀と一ツにかすむ鍋ふた(蓋)

二輪(たが)竹(だけ)のそゝぐ先から歸(る)鴈

與作屋敷に金ほりそむる

丸雫(あられ)でも鑓(やり)でもふらば降れかしな

縛りからげて送る山笹

六條は忍びぐらしによい所

朝妻ぶしをうたふねむたさ

輿(のりもの)にくゝしつけたるけしの花

死も活るも珠數の世の中

べら坊と人に呼(ば)るゝうれしさよ

茶樹茶樹茶、樹茶樹茶樹茶樹茶

子ばかりふへゝる畠新田　樹
名月の大杉様を祭る也　茶
一本橋に名をつける露　樹
風ナウの吹芒の下に住なれて　茶
紅葉折にも琵琶(竈)かつぎつゝ　樹
僧正の御成あるやら鐘をつく　茶
犬の巣をくふとうふが(や、脱カ)門　樹
さく花の何へんてつもなかりけり　茶
常盤がましき春の松風　樹

鶯を横に坐ざどるやばくち宿　ノ且
蛙なく守り貫ふや二月堂　、
山寺ははや鎌して雉の聲　蘿物
白魚も子にあかるゝな角田川　遅足

今のある迄も花さく老木かな　一茶

馬行や迹はほんまの角田川　〃

雛と白寺の小昼(こびる)は過にけり　〃

雛なくや見かけた山のあるやうに　〃

なむあみだおれがほまちの菜が咲た　〃

雛うろ〳〵〳〵(うろうろ)菴を覗くぞよ　〃

鶯のむだ足したる垣根哉　〃

株番　巻の二

時鳥花のお江戸を一呑に　一茶

郭公大内山を夜逃して、

今ごろや大内山のほとゝぎす、

それでとそ御時鳥松の月、

有明をなきとくりけり時鳥　成美

俳諧躰

から臼の隣にすめば時鳥

なけども〳〵紛れとそすれ　仝

子規さのみななきそ作(る)べき

田はさら〳〵にもたぬ花ぞ　一茶

峰作る雲が出ればとちらにも

雪をつくれる垣の卯の花　千代丸

（七番日記一に、
三、晴、花喬佛三回忌
四、晴、北風吹未刻より雨、終夜不止、花喬追善會）

四日、花嬌佛の三廻忌、俳莚舊懐

目覺しの牡丹芍薬でありしよな　一茶
何ぞいふはりあひもなし芥子(の)花　、

當日探題

三粒でもそりや夕立といふ夜哉　、
夕立やけろりと立し女郎花　、
夕立の天窓(あたま)にさはる芒哉　、
うれしさよ兒の袷の短さよ　貞印
青天の清水流れてかんこ鳥　、

四月七日張行

短夜の草に生れしとんぼ哉　貞印
布つく、唄に夏がなくなる　一茶
五六枚新らし畳淋しくて　とく阿
茶の水汲に参る夕月　ユ等

霧時雨はら〳〵松をすぢかひに　阿

袷羽折を馬にかぶせる　雪

ウ
夕市の三輪の御山に造酒(みき)上ん　茶

子どもかしらの逃る鬼面(おにめ)ン　印

冬枯のよろとび鳥啼にけり　雪

かさい(葛西)隣の藪に住つく　白
老

明暮の泪の玉に灰かけて　茶

謎に作りし峰のしら雲　老

僧正の刈給ひける女郎花　阿

ふる廻(振舞)風呂のしづかなる秋　印

月うすき叺(かます)に胡麻をはかり込　老

おの〳〵祝へあれが木曾山　茶

ちる花に寝ぐせの付くがおもしろき　阿

文珠を刻む窓の陽炎　印

二 うつくしき飯を燕の笑ふらん　老
母のふとんをほふる川舟　茶
君か代は嘘(うそ)つきどのも涼しくて　印
牛のうしろの鈴が鳴る也　阿
幻の鳥羽田へ雨をやり過し　老
いざ〳〵一首侍(はんべ)らんかな　茶
かた衣の終に直かなるとしの暮　印
丸い枕をころがして見る　阿
したゝかな赤から薬のうらめしや　老
山ほとゝぎす志賀をあらすな　茶
宵の月鍋と菴を引ずつて　阿
芒がもとの祭過けり　印
ナウ うそ寒しさむしと鐘のなるまゝに　茶
何の願ひの銭みがくやら　老

臍(へそ)のを(緒)はきのふ埋たる門畠　印

ひたちど葉(常陸言葉)のまだ抜(ぬけ)ぬ也　阿

さく花は我らがための菩薩にて　老

路の葉ど(毎)に餅を並る　茶

貞印 八句　一茶 九、　徳阿 八、

ニ雪 三句　白老 八、

(別紙)

白露の玉をいだきて菱

もがれし足もいとはずになく　丌(三鴨)階

金拾ふ夢よりはるかめで度は

かねをおとした夢のさめ際　不知人

せんきの薬

マス一本常のごとく煮て上酒一升呑べし筋下りて愈(ナホ)ると砂明上人かたられき

去蛇毒藥

露草三寸程ヅヽ二本なめくじり一疋右二味を黒焼にして胡麻油にて練て付べしと同人

八日　灌佛

お日和のかたまる四月八日哉　徳阿

御佛の生れ給ひしぼたん哉　貞印

けさ程や子（マヽ）（の脱カ）供しても花御堂　一茶

・おなじく

卯の花の中に顯れ給ふゆへに

尊の御山のどうしといふらん　阿

ちよ／＼と祝ひはやしてみ佛の

うぶやにおどるむら雀かな　茶

菴の苔花さくすべもしらぬ也　、

かはいさうな花の咲けり麥の秋　一茶

やけどの薬

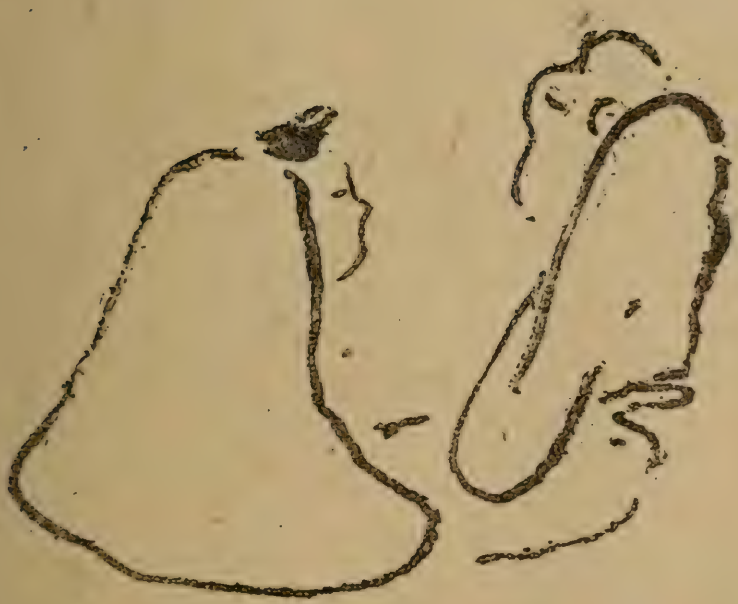
胡瓜をいくつも陶(とくり)の中へつめ置、其きふり數日してこ〴〵く(悉)水に變ず、其水一味やけどにつくれば、さらに迹つかずして愈(なほ)るとかや、是徳阿上人拵へおきて、多の人を介(助)けしとはなん

大原や前キの小町が芥子(の)花　一茶

けしさくや賣れるともなき赤藥　白老

夕陰や今植たれど芥の花　一茶

古郷や細い柱の芥も咲く　、



（別紙）、
上總國富津の浦に、みゝづ貝（ナ）といふかひ（貝）有けり、日〳〵いく船ともたくとりて、老若男女群りて、小刀やらの物もて、中の實をほり出しツヽ、石などの玉の樣に乾（ほし）かためて、唐の問屋とやらんに送るとぞ。其殼そとら散らばひありける、赤きはつゝじの咲亂れたるかごとく、白きは梅の吹ちるにひとしく、ほと〳〵かすみ棚引春の山邊に似たり。此物たま〳〵木曾山の片邊りなどに持つたへたるを見るに、ひとつ〳〵綿につゝみ、ふかくひめ置て、かりそめの戯れに箱開く事なく、雛の日、又は晴れ〴〵しき祭りやらの時、いざととり出して、手入皿といふものになして、賓客もてなす第一の器とす。しかるに此所にては、此殼のせん（す、脱カ）へなく、境目〳〵の垣際に富士のやうにつみ累て、折〳〵のあらしの吹べらす時をまち、或は大道に引ちらして、牛馬の蹄にふみくだかしむ。是全く一ツのものながら、山おくにては寶と尊み、海邊にては芥といやしむ、げに〳〵崑山の麓には、玉をもて鳥に投げうち、彭蠡の濱には、魚をもて犬をやしなふとかや。是を思へば、三千世界の中には、黄金の捨場にもちあぐむ國もなどかあらざらん。

金が降る〳〵てふ白雨を
はら〳〵海へ捨るむら雲　一茶

夕立の始る海のはづれ哉　全

十六日晴　砂明上人入來

卯の花や夜のう月も晴れ〳〵し　砂明

十八日晴　半歌仙略之

萍も願ひありてや西に咲　一茶

蓬の苦花さくすべもしらぬ也　〃

時鳥聞（待ト書キテ改む）ふりするがはづかしき　〃

麥秋やうらの苫やに魚の秋　〃

雲の峰草にかくれて仕廻けり　〃

三粒でもそりや夕立といふ夜哉　〃

朝〳〵や花の卯月の時鳥　〃

なでしとやそなたは親の番椒　〃

鹿の子の迹から奈良の鳥哉　〃

萍のそれも樂やら花の咲　〃

四月廿七日於大乘寺張行

朔日や袷もたねば褻きる　房州嶋三門人 雉啄

とある小家も青すだれせり　一茶

へら鷺の見事に並ぶ船引て　とく阿

翌の西瓜を荷ふ人聲　貞印

うす月の少冷つき給ひけり　茶

雛の貌見る萩のいはひに　啄

小はつせの大鐘聞にいざさらば　印

人が安房といふがうれしき　阿

鹿の道をその道にも雪降りて　啄

壁〱の先からとしは暮けり　茶

筋違にずらりと居るそばの膳　阿

土器うりに折らす草花　印

みちのくの月夜〱に御泪　茶

闇の灯の露にかはりて　琢
闇齋の鳥居をどつと囃すらん　印
必返すな花のからかさ　阿
さく花の一重のうちは鴈が鳴　琢
長刀形りの川かすむ也　茶
二
投節に那智の御山の畠打に　阿
螢のやうなちよつとした戀　琢
さらしなの石の世並が直るそら　印
風の吹込む土間のへつゝい　阿
馬士(うまかた)に默禮うけし帘(さかはやし)　琢
彌勒菩薩を祭る名月　茶
稻の穗を榎の股（の、擬カ）芽を吹て　阿
鶴一鳴かせに猿澤へ行　印
綾錦それもけぶりになさばやな　茶

鏡戸さして白髪ふりむく　　啄

誰か子ぞ陶(とつくり)さげて今かへる　　印

將棋法度の雨の夕暮　　阿

旅人に鯉の鳴子を引きられ　　啄

くわり(ら、脱カ)〳〵と暖に成る　　茶

ありたけの花のとぼれし朝朗　　阿

たて茶の淡(あは)のそよぐ春風　　印

探題

風道の小笹に交ル太蘭かな　　徳阿

車坐に飯くふ舟や入梅明り　　雉啄

萍の花よ來い〳〵爺が茶屋　　茶

住の江の隅の餅屋が茂り哉　　〃

蚊柱の外は能なし榎哉　　〃

鴨の子の走り込たりほつと雨　雉啄

夏の夜や短い町のうつくしき　とく阿

通題

時鳥つゝかけてなく走り水　雉啄

若役に寢に行く丘やほとゝぎす　とく阿

時鳥つゝじまぶれの野よ山よ　一茶

御地藏よ河原なでしこたゞ頼む　、

瞿麥（なでしこ）は子の日せし野に咲にけり　雉啄

なでしとに添へて貰ひし佛哉　とく阿

里の子と…所に歩く鹿子哉　、

鹿の子の大事に歩く家陰哉　雉啄

さをしかよ我に得させよ迹なる子　、一茶

古郷卯花

むら雨のふるの垣ねや野鼠の

あなうの花のさくばかり哉、

時鳥通すまじとや夕暮の
　蚊やりも雲を拵る哉、

七夕

星たちの人見たまはゞむさしのゝ
　草葉の虫とおぼしめすらん、

上つさ(總)の國富津の里に、西蓮寺法印とておとの名僧ありけり、狂歌を好みて眞顔といふものゝ弟子になりて、名をは鶴雛丸とぞよびける。おり〳〵高點の狂歌をよみけるが、此ところ眞顔のもとより時鳥卯花雑(ざう)なといふ題おとせたるに、心得ぬ貌して、同し里壽千代丸がりに参りていふやう、此ざつ(原)といふ題何とよむべきにやと問けるに、千代丸思ふやう、此僧我をなぶらん迚かゝるざれ(戯)事いふにやと思ひはかりて、おのれもえ(得)しらず只ざうの歌よむ也と答へければ、やがてよみて参りぬ。

鼻長く色白らして耳たれて
　舌をべろりと出した象哉

(雛などいふ題―雑は「ざう」と讀むことを知らざりしよりなぶられたるなり)

（五十ざう｜五十文を相場としたる下等なる私娼）

百文の錢を二ツに折介の
袖を引たる五十ざうかな

と短尺に書て出しぬ、ありあふ人々、袖に袖を覆ひていふやう、御歌こそ彼小人事成かたの秀歌なるべけれと、そらほめ（空褒）にほめければ、又なくゑつぼ（笑壺）に入りて歸りとか（し、脱カ）や。是きのふの事と千代丸かたり侍りき。

京都銀閣寺鐘銘　細川玄旨法印

大鐘の功徳廣大成事は、經文にとき給へば、山鳥の尾のながながしきは今の世の人の心心にかなはず

聞よりも心に思ひ身に修せば
いつか菩提に入相の鐘

いかにせんきのふも過（ぎ）ぬけふも暮
翌しらぬ身の入相のかね

入相のかねとばかりに聞すへて

我身の暮をしる人ぞなき

文通　涼しさの夜をやり過す蓮哉　素迪

箏によしや痩ても奈良法師　至長

庭掃てそして晝寝と時鳥　以樹

其角花つみの下に

いせの國にて狐の人につきて云いてける句

仁あれば春もわかやぐ木目哉

此狐つき日比の田夫にてぞ有ける、狐い(去)にて後は無筆なりしと也、其筆迹正しう狐にて侍れば、誠にあやしくたえ(妙)なるためしにもと書付侍る。

元祿元年七月の事にや

契沖法師富士百首　寛政十年三月板　平　春海　編

けなしのゆきげの雲は空とぢて人ぞいひつぐふじの高ねは

ふじのねに年をわたりてふる雪のめづらしげなくめづらしき哉

ふじのねは烟りとそたていつよりか始て人ののぼりそめけん

山人のやどの玉だれをたへしてふじのすそ野に霰ふる也

ふじのねに昔くだりし天乙女ふりけん袖や今のしら雪

いつはりのある世になれるふじのねは雪のみしろし雲のあなたに

なる澤におひたるしのゝしのぶれどあまる思にふじもゆるらん

月と日の光りをさくる乞國の山もふじにはかぐろひぬべし

ふじのねに半のぼらは雲を出て天が下さへちひさくやみん

ふじのねは土とてふんも雪なればなほや乙女の心空なる

山人のけぶりの衣日にそめて名も紫に高きふじのね

夏の雲峰はなせどもふじのねの風のあたりにえやはくらぶる

夕立のすそ野過るなしぐれにてふじの高根は初雪ぞふる

雪の山人の國にも聞ゆれど我ふじのねぞ高くたふとき

空の海天乙女子もしほやゝくけぶりの下のふじのしら雪

唐に山祭りする山よりもふじのけぶりぞかみたちにけり

〔「七番日記」に、十七、陰 隨會出筵泊 今日百句吐〕。

五月十七日於隨齋一人百句致しける、其中より二ツ三、みづからより侍りぬ

(朱)。我菴を夜と思ふか鳴く水鶏 ‥ 茶

水鶏なく拍子に急ぐ小雲哉 、

俤のかはらなでしこあの通り 、

なでしこや片陰作る夕薬師 、

(朱)。わか竹やさも嬉しげにうれしげに 、

蓮の葉に乘せたるやうな菴哉 、

掌の虱に並ぶ氷かな 、

鶯よ江戸の氷室は何がさく 、

我菴の巾着茄子にく〳〵し 、

戸口から難波がた也夏の月　（未）
夕立を天王さまが御好げな
粽とく二階も見ゆる角田川
帷（かたびら）やふし木のやうな大男
むさしのや蚤の行衛も雲の峰
夕顔の花にぬれたる格子哉
蓑虫の運の強さよ五月雨
行月や花の都も一ト涼み
草花が咲朴と扇かな
瓢から餅が出る迚扇かな
苔清水さあ鶯も来よ雀来よ
初蟬といへば小便したりけり　（未）
湖に尻を吹かせて蟬のなく

六月七日菊池氏にて

（「七番日記」に、
六、晴、下山泊
菊池にて天王
祭
七、晴
夜酉下刻下山
叟本所妙げん
寺）

むく犬や蟬なく空へ口を明く　、
家なしも蟬の羽衣きる折ぞ　、
なでしこのもまれて咲や汐風に　（朱）。、
隠家に何の来ずともよい螢　（朱）。、
馬は鈴虫ははたをる夕涼　、

（巻の二の續きの意か、巻三の誤なるべし）

株番　巻の二

寛文九酉九月廿二日曉靈夢　　東順

言のはをせど（背戸）にも門にも植置て
　いづれやくにはたちつてとかな

○（朱）秋立や鴫の小すみの小松嶋　　一茶
聖靈にとられてしまふ寝所哉　　〃
蚯蚓諷ひ蚊が餅をつく盆の月　　〃
露下りて四條はもとの川原哉　　〃
○（朱）稲妻や蚊にあてがひし足ながら　　〃
草花を腮でなぶるや勝角力　　〃
風そよぐ赤てうちんや星迎　　〃

小兒をすかして

泣者を連ていぬとや秋(の)風　、

むだ花にけしきとられて青瓢　、

輕井澤

有明や淺間の霧が膳を這ふ　。(米)、

狗(いぬころ)の葬さきぬ店の先　、

夕陰や下手におりても須磨の鴈　。(米)、

明く口へ月がさす也角田川　。(米)、

外ヶ濱

けふからは日本の鴈ぞ樂に寢よ　。(米)、

月も月そも〱大の月よ哉　、

雁とや〱おれが噂をいたす哉　、

末の露もとの雫や賑しき　、

露はらりはらり大事のうき世哉　、

小梅筋を通りて

かしましや将軍様の雁じや迚　、

兵庫築嶋

行秋や入道どのゝにらみ汐　（来）、

朝貌やだまつて居たら天窓へも　（来）、

湖へおりぬは雁の趣向哉　、

涼しさは露の大玉小玉哉　、

我星は（何處）どこにどうして天の川　、

初雁に旅の寝様をおそはらん　、

獨旅夕暮

我やうや十聞ばかり迹の鴈　、

迹の雁やれ／＼足がいたむやら　、

（別　紙）

下總國相馬郡藤代の里に、百姓忠藏といふ者有り、朝夕のけぶりも糸筋のかすかにくら

（永祿のむかし――永祿七甲子年、丹波の國にて七才の女子、子を産みたること年代記に見ゆ）

して、夫婦人に雇（は）れて、老母の心をなぐさめける、其中に娘ひとり持たりけり。貧家のならひ子守りといふ者もなければ、土べたに這廻りて、草花をとらへてあはゝをならひ、鳴子のうごき（動）にてうち／＼を眞似つゝ、そよ吹風の草木を友に育（ち）けるが、ことし（今年）八ツになんなりける。何にあやかりけん、其娘たゞならぬ身と成りて、かりそめのなやみもなく、九月三日といふに、彼桃（モヽ）太郎のやうなるくり／＼したる男をなんうみた（産）りける。其日より乳の出る呑口（のみぐち）の枘（ほぞ）ぬきたらんやうに、莚の外迄とばしる物から、父母のよろこびはさら也、界隈の者も打群りて、いまだ井筒のたけにもたらで（足）、かゝる愛（めで）度（たき）ためしは今世にくらぶる（較）ものあらじ、永祿のむかしを目の前に見る心ちす迚、とりはやしツゝ、村よりむらへ咄つきいひふらし（言觸）ければ、やがて領主きこしめして、其男子の名をつけ下さるゝとなん沙汰し侍る。かゝりしものから、野もせ山もせ、其噂ひろごりて、誰しらぬといふ者もなくて、人に人かさなりて、其家尋訪ふものから、祝ひにおこせる産衣、又は百文、或は二百、あるは五十ばかりのおひねりといふもの、雪の降りたるやうにつみ累（かさね）て、所／＼に山をなせり。二親久しき貧の病も忽に忘れて、今は心のまゝに老母をやしなひけり。げに／＼此家のまづしさ（貧）をすくはん迚、救世觀音かれが子

と現じ給ふにや。是を思へば、切ル竹の節毎に黄金のこぼれ出しといふ古き物がたりも、さら／＼いつはり(詐)にはあらざるべし。

是うきたる説にあらず、布川(藤代へニリ)の月船といふ者、きのふわざ／＼見にまかりけるに、其娘露ほどもはづかしきけしき(氣色)なく、手遊びの偶人(デク)などうみ(産)たるやうに、人に見せけるとぞ。

下總國相馬郡(常州土浦 土屋治三郎殿)領
藤代驛下町
百姓　(死去)久右衛門
悴　(中三十九)　忠藏
仝　(三十)妻　よの
仝　(五十七)母　かな
文化二年丑五月十一日生　仝　(八才)娘　とや
此度從　土浦侯賜シ名也　(九月三日生)　男子　久太郎

（一「あつさりと」の句、「七番日記」文化十一年正月にあり、同二月に、「五、晴、田中に入」とあり、其折の作ならんか）

（別紙）

あつさりと春は来にけり浅黄空　一茶
西に鶯東（ひんがし）に雪　希杖
青柳や大俎（まないた）に平して　、
御舟ををがむ丘の人立　茶
有明の廿九日の涼しさに　、
土鍋やくらん紫陽花の末　杖
いざ我も傘で越さうぞ春日山　、
連歌座敷にあそ（遊）べ雀等　茶
しら〳〵ととらふ（虎斑）のやうに夜明たり　杖
泪〳〵に汚すすが（菅）蓑　茶
我戀は天神様に任すべし　杖
節季候（せきぞろ）はやせさくら（桜）山吹　茶
里〳〵は松葉けぶらすうす月に　杖
霧ふきおろす圓覚の鐘　茶

牛ぞろり〳〵山路の多近く　杖

風の藥に梅ぼしを出す　茶

花盛りかるたにあきて寢たりけり　杖

足利どのゝ御代の春雨　茶

二

燕とぶ窓のわらぢ(草鞋)は三文に　、

うら松坂へぬける猿引　杖

けふも又白字つかむ小いさかひ　茶

衣かぶせて忍ぶ行灯　杖

竹植よ壽永二年を夢に見ん　茶

熱田の宮へはなつへら鷺　杖

皷打て駕舁どもを呼(よば)ふらん　茶

すかり〳〵とかせる疱(はう)瘡(さう)　杖

風そよぐ三介早(わ)稲(せ)を皆刈て　茶

鹿の尻尾に入相の月　杖

うそ寒き隣並る人もあれな　茶

遊行を送る荒(あれ)のしつ（靜）まる　杖

さゞ波や志賀の都に夜の明て　、

まて酒くれん苫浦盜人　茶

湯けぶりにちんぷんかんを唱へ捨　、

江戸の方から雨の降り來る　杖

それ／＼におのが花見と思ふ哉　、

頭巾にためる革たん(蒲公英)ぽゝ　茶

（別紙）

文化十年
信濃札

花咲て梅折(をら)ぬ日はなかりけり　士朗

鳴(な)かして鶯竹にとまりけり

山里は梅鶯の月日哉

大佛の雨を見に行春邊哉

松櫻一木おき也あらし山
ちかつきになりて門出る櫻哉
年〱に花の見やうの替りけり

義といふ題

北へちる花とそ見へねよしの山
虵の聲何そ(マヽ)花のさく日なる
人もふへ蛙もふへて山家哉
山吹の花たれとめて鳴蛙

善光寺

朝な〱虱掃出す御堂哉
春おしむ鳥の木に行竹に行
けふ迄は物も思はす春の暮
苔生ぬはや露もちぬ花咲ぬ
植て去(さる)山田を鹿の通りけり

夕立や頓て火をたく藪の家

松陰はや月にてぞありにける

秋の夜は明てもしばし月よ哉

何をして人は暮(くらす)ぞ須磨の秋

日の暮ぬ日はなけれども秋の暮

枯〳〵や野邊に出向ふ菴の犬

寒月に立並ぶ松のかしら哉

行と(年)しのとそりともせぬ山家哉

大空に隈なき鶴の齢哉

木がらしや茶の葉につゝむ鴨の足　尾州 駄六

安(テ)房(ハウ)とは誰子呼らん花菫　エド 國村

水鶏にもうとまれかまし世にあれば　ヲク 雄淵

松風に寝るまでほどく粽哉　斤俗

鵙のとぶ跡へ廻るや栗ひろひ　エド 守静

蔓草やどこ迄伸て盆になる　サガミ　洞々

三ヶ月はもの丶紛レに見たる哉　ヒタチ　李見

鶴や心は捨ぬ草の露　下ンサ　青谷

住吉へ行當る迄わかなつみ　兵庫　桐栖

(今年)ことし来ぬ鴛もあるべし池の草　アキ　鶯老

桑の實に染る鹿子の鼻柱、　立蛙

見へもせぬ日に見おくるや春(の)鴈　チクゴ　文角

烏賊賣の聲に色ます柳哉　長崎　菊也

(文化十一年正月なり)

(別紙)

正月廿八日とゞく、

望は我と起くらべせよ門の蝶　武曰

山寒く山のかげさすぬり枕、

長閑さや萩見し丘を田に出かす、

町うらの一本桜も餘寒哉　〃

文化十年十一月四日出　正月廿九日とゞく

十夜

一酒賣の十聲ひと聲たのみ有　成美

世をうんじ果たるころ

此上に榴もたてよ厚衾　〃

今正月十八日出　仝日とゞく

冬としより病中にて

百日の炭ふすぼりや寄(る)はしら　素玩

梅(の)花としとり貌に又白し　〃

朔日を前に廣がる柳哉　〃

浅草

平(へい)内(ない)を力にかすむ老木哉　〃

榾の火や團十郎も見た男　成美

音なしに住居する家の枯かつら　エチゴ左琴

白萩や天の川迄咲つゞく　五芳

桃の花實のなるさたも取出しぬ　甘雨

蚤とりて殺しもせぬや關角力　越中白年

二月九日出一通　三月四日來

東海道殘らず梅に成りにけり　成美

旅人をすき間に見する柳哉　、

藍瓶の上迄影や春の月　、

芹嫁菜少(すこし)の事もかすむ也　、

陽炎や千代もうごかぬかな(要)め石　、

松がねに波もと(屆)ゝきておそ(遲)き日ぞ　、

鳴(く)雀海苔やくさへも春は朝　、

文化六 苔莚

呂風 杉保 斗白 昨枝 杉長

菫江湖

何袋

世中に咲て見せけり忘草　房州 郁賀

芦の穂におどろかされて暮にけり　杉保

夕時雨どこへよけても牛の角　斗白

夏の月庵は椿の葉にくもる　其則

みちのべのかゝしも逢ふやお霜月　ナニハ 長齋

稲妻や瀧にもならず貴船川　士卯

水鳥のづぶりと春の行え哉　宰阿

灌佛や世の白露を見せ申　ミチノク きよ女

極樂の畫にも書たしけしの花　丹波 東鳥

鯉鮒もまめそく才か五月雨　ミチノク [illegible]美女

撫子に腰ぬけて居る鵜飼哉　カヒ 有、妻

今朝鳴てそれきり見へず草(の)蝉　ハリマ 文哉

江戸に生れ男に生れはつ松魚　エド 泰里

老らくと見てやくはしく鳴雲雀　サガミ 灃水

見る程の革つみたく成にけり　はまも

冬の月豆腐の上にとゞまりぬ　郡内 桂嶋

元祿三年二月六日

鶯の笠おとしたる椿かな　桃青

古井の蛙草に入聲　年木

陽炎の消さま見たり(「何袋」三、ろ)夕かけに　百歳

指さす方に月ひづむ也　村皷

稍なる隣の柿をからすらん　式之

きびを吹折る風のあらさよ　梅額

佗しらに、牛の子迯す朝朗　一桐

世を土なべといのち也けり　槐市

俤に妹が袷を上に着て　皷

夢さへ酒に二日酔する　青

古郷を忘れぬ馬にほく／＼と　木
生へて程なき月の花蕎麥　蔵
住持なき庭に木實の落るを(音)と　額
鳩吹人のなり窄(すぼ)き也　□(原闕)(桐)
給物は麓の市には賣て　哭　雪
機嫌にむけば幸若の舞　之
孫曾孫うち並べたる花の陰　蔵
藤紫にさま／＼の蝶　木
二 春の色新古今とぞ哀なれ　青
尾上をへだつ木魚はかなき　市
むら雨の笠きぬ程に降過て　鞁
桑も早苗も一度也けり　雪
免れて流され人の立かへり　桐
泣てゐる子の顔のきたなき(「何袋」ニ、さ)　額

宿かして米搗程は火も焚す　青

脚氣を佗て膏薬をはる　市

大内に井戸堀(掘)をめす秋の暮　桐

地震にところぶ松の下露　木

有明に母の里より文をとし　歳

かたみにひんを殘すみちのく　之

掛香を小袖のふりに縫ふくみ　鞍

三絃引てならぶ乞食　青

東山中にも花は清水寺　木

げに長閑なる智恩院の鐘　桐

連歌師の杖を忘るゝ春の宮　之

すいかん疊む庭のわか草　雪

春の草お七が墓に人見ゆる　成美

秋暮ぬ百がものなき痩からだ　寥松
白雲の宿におくれて秋の風　サガミ濃水

三月十二日出　仝廿五日とゞく

菰槌に永き日あしぞかゝりける　一峨
山吹やそつと覗(け)ば小薙刀、
ちる花や小督の塚の影法師、

二月八日認　仝日來　歳旦帳入

筑紫へ旅立とて
首途や不二の霞を笠にせん　白芹

三月十二日出　仝日來　反故搜一册入　甲州八代郡鵜飼川附小石和村 山下半三郎

いなれたる人の跡なり蛙鳴　百二
田鼠の貌も見らるゝ春の雨、

文化十一
追善反古搜

仝

入相の柳がくれに行人ぞ　亡人　百童

陽も氷るうき（世、脱カ）の小隅かな　、

露の世と見へてさつさと蓮（の）花　車両

よし切の口もさけずや雲の峰　心非

埋火を鼻で尋るひとり哉　妻丁

六十も四ツ見ぬさらば鰒汁　道彦

みしか夜に木がくれ月のはづみ哉　護物

十月の道ばたにある櫻かな　サガミ　叙来

冬の日や野にひつゝいて一軒家　雉啄

鹿の音の来たぞ、庭木の寝入ばな　スルガ　東陽

合点して聞ばきく程閑古鳥　江州　亞渓

楢の葉に山がかくれてほとゝぎす　しら女

枯かつら手くるも人の師走哉　宗阿

葉櫻やたゞの木どもの其隅に　輪之

名が賣れてかくれにくさや青簾　ミチノタ　田人

山の月霰とぼした貌もせず　乙二

去十一月二日出　仝日來　スリモノ入、

壁の蚊のとまり直して初時雨　ナニハ　井眉

砧うつ筋に道あり夜の原　魚眼

舊冬出　一通すり入　仝日來

夕陰やおち葉かぶりて鳴すゞめ　ヒダ高山　乙丸

二度三度月が出たとて鉢たゝき

子どもらが牛の背を掃(く)時雨哉　、

(下の一句は行間に書入れあり、作者は、乙丸ならんか)

三月十二日文通　廿一日とゞく

(三月十二日云々は、原本上欄に記す)

わか草の夜明もあるやかゝり舟　年眉

（みちのべの以下三句、前出と重複す）

董江湖

春雨やさまく（マヽ）に長き鮹の足　、
みちのべのかゝしも逢ふやお霜月　長（ニナ）齋
稲妻や瀧にもならず貫舟川　士卯
水鳥のぢぶりと春の行え哉　空阿
此やうな末世を櫻だらけ哉　一茶
今やひかんとほとる鶯　文虎
うす草履通さぬ程の陽炎に　、
朝茶の番を當る有明　茶
秋来ぬと門の小松のそよぐ也　、
鹿に鳥に人に馴ッ、　虎
無（ウ）縁寺の庭からぬける丹波道　、
腰かけ飯にかけるる冷汁　茶
我慰のはら／＼麦は穂に出ぬ　、

うつくしき手に螢這はする　虎（原翩）
むら雨の木曾の御坂に宿とりて
はした喧嘩も薪の降りツヽ　茶
挑灯のほかりと消てうそ寒く　、
吹つぶれたる草花の月　虎（原翩）
初鴈に大長刀を引さげて
盃流せ加茂の川原に　茶
咲花もたゞむちやくちやに過にけり　、
清和を名乗る者どもが春　虎

二

何かしてやたらにはやる山の神　、
黄色な餅をくるむ蕗の葉　茶
てゝ親に仕上て見せる薄小袖　、
寝ぼけたやうな次郎作が継　虎
霰降風が吹迚酒の燗　、

鵆(千鳥)なけ〳〵我隅田川

百姓もなんぞの時は太刀佩て

十筋(二十筋)はたすし野路のやゝ寒

水風呂の大聲上る秋の月

謡稀見せて狙(さる)を舞はする

象潟は昔に昔てさへ小淋しく

申あはせて一射かく

老松の曲り形なるとしとりて

ほたた(牡丹)餅雪がどた〳〵とふる

朝市の辻の祠をはやすらん

ひとり目明けばはつと霞みて

とかくして花の都も十五日

いざめし給へつゝじ欵冬(やまぶき)

茶、虎、茶、虎、茶、虎、茶

（別紙）
三月卅日認　四月十四日來
重箱に鯛おしまけて（曲）花見哉　成美
喜晴
まくり手に蝶の羽風もこゝろよや、
夕ぐれは淺黄らしくも藤（の）花、
はし近き行灯も春の名残哉、
なの花の中へふみ込月よ哉、
正月十日認　全日來　スリ入
蚊の聲も月夜に成りぬ壁の穴　東鶴
名月や升にさしたる草の花、
稍村を町家に交て柳哉　集兆
鶴の首最う是切と霞けり　一瓢
王十一月廿四日認　全日來ル　スリ入
赤間關　油家仁左衛門
冬籠とし（今年）の古人聞（く）夜哉　羅風

叱られて一日を塞（き）けり猫の戀　、

山寺（スリ）の鐘は時雨の相鬪哉　、

日月ナシ一通　全日來

餅喰し跡の心や春の月　一瓢

辻下にはよ所（そ）目も寒し裸錢　、

日永とて人のおく歯も見ゆる也　、

二月十日認一通　外ニ華雨一通 素英一通人　全日來

陽炎やけつく苦になる須磨簾　雪峁

行春や麥の中なる三軒家　、

四月六日認　全日來

尻輕にいく野ゝ（の）駒や更衣　梅壽

手拭で狐つ（釣）らふぞ花の山　巢兆

夕、柳人立よれば横に吹　平角

乙鳥や門と小藪の其中に　空阿

寛政十 百物語

いねつむと聞夜もかぶる衾哉　　幽嘯

壬戌十一月一日出　七月十日隨齋よりとゞく

高雄山けさうつくしう時雨けり　　楞堂

十月の鶴を見に行漁村哉、

日の出や仲上りても鴨の足、

鶯に琵巴(琶)聞(か)さうぞ寒の入、

やるせなき雀の戀や夕時雨、

四月十五日出

春の立しるしに若のみどり哉　　万和

病床

人の袷寝ても居られず成にけり、

草庵

朝貌と露と朝〳〵賑しき、

あみだ池詣の道すがら

盆の月犬に錢やるゆきゝ哉、

淺ましく栖並べるかれ野哉　、

鵜山は俄(餓)鬼が麥也夕時雨　、

八月四日出
十日手入

いざけふは迹へとしとらん更衣　成美

いで戻れ大津車にかたつぶり　、

きのふ見し旅人もどる五月雨　、

人の世は片さがりなる蚊やり哉　、

法花よむ鼻のあたりの扇哉　、

一葉おちて面ゝにかぶらん貌の皺　、

稲妻を待や旅寝の探しもの　、

何草か咲てもやがて鳫の旅　、

スリモノ

清水はかやうと蚤の行へ哉　一瓢

文化十一春
スリモノ猫
ト華
万和ヨリ来

いろりにも月すむ夜也梅の花　高野にありて　無物

奈良の代にして暮しけり注連のうち　百嬰

はや淋し蕣蒔といふ畠　一茶

大津絵に吹かぬ日もなし春の風　方和

得手ものゝ麦は穂に出て山櫻　双樹

甲斐がねや江戸で見て来し秋の雲　鶴老

三井鐘

又もなけ鐘に霰のかゝる時　、

桔梗とも萩とも名のれ草角力　、

七月廿日出

蟷螂の男めかして鳴ぬげな　長甫

春の夜の蓑きて膳に居りけり　木一海

玉笹や露の長居をする所　金堤

文化十　手操舟　金堤

蛤と成りてもおどれ鳴雀　蕉雨

汐畠に鳥鳴く也春の雨　有斐

文化十　ぬさ貫　有斐

我に柳のけしきする暮　士朗

初時雨雀も和歌を囀るか　サガミ 濃水

十六夜は暮ぬうちからしづか也　シナノ 若人

文化十　星作　有斐

夏の月牛の肥しをくらべけり　イガ 士得

蔓草やはゝき立ても星の空　閑(ヒキ)斎

草の戸や星に手向し小行灯　(下フサ)蒼峨

錦木の夜毎にふへる蛙哉　(下フサ)至長

達磨忌や母喰鳥は翌を鳴　(サカミ)濃水

雲わか茶花のやうなる日を拝む　(アヘ)其文

見る程の菫つみ度成にけり　はまも

蚊の逃る程咲立や蓮の花　久臧

二人して曲突造るぞ秋の雨　月船

風や星のなる木を植て行く　調實

天和二年調和門二人
一ノ瀬市十郎

(別紙)

世につれて花火の玉の大きさよ　一茶

舟にめしたる十六夜の月　鶴老
穂すゝきも桔梗も箸にねぢ切て　茶
白眼つめたる冬の浮里　老
散霰くわら〳〵金の降やうに　茶
角の付たる婆ゝが摺小木　老
木曾山を剝てのける工夫して　茶
廿四文がほとゝぎす聞　老
紫陽花にふはりとほふるうす被　茶
戀も無常も活て居るうち　老
かるた程視に貫た畠ぞよ　茶
定家の歌を瘤のまじなひ　老
ぼた餅の春の夕暮待からに　茶
凧一ぱいの山あひの空　老
櫻花つひの褥に進らせて　茶

はりまの國の末の子を見る　老
なら柴の爺がふぐりも名月ぞ　茶
狐を馬にのせるやゝ寒　老
瓢うて波利女の宮のあと祭　、
桶に(をヲ一テ消)かくれて笑ひ給ひぬ　茶
赤鬼になるとも髭おし切らん　老
太郎倚ふけもや／＼の關　茶
雪おろしあさつて迄の酒呑て　老
灯をけしに立圖を出す也　茶
犬猫のやうな命を賽ぞと　老
連歌一句に越る志賀山　茶
うき雲に、月もべそかく夕ま暮　老
闇の下吹く秋(マヽ)(萩ノ誤カ)の秋風　茶
きり／＼す身のつみ科を鳴へらせ　老

あらはしたなのはした侍　茶
岡崎（ナウ）や橋のたもとの小豆餅　老
雨のやむ迚耳がなる也　茶
薪一把茶碗一ツも打くれて　老
かまくら様の世ををがむ哉　茶
馬かりて花盗人と追ればや　老
つゝじの小家麥の大寺　茶

（別紙）

ヌサ買
明て行空も朧の草家哉　（ヲヘリ）竹有
鳶の居る朝氣やん（梅）め花（の、脱カ）畠、　椿堂
かまはずに月の出てある野分哉　（八ヘタ）芳之

文化十月ノ里
すかる鳴ひゞき（に、脱カ）閑く桔梗哉　（ナニヘ）米彦

月底
落る所今日もかはらで桐一葉　井眉

雁の聲月は行灯にうつりけり　由肆

炭の香や更旅の朝朗　ヨ　木ド阿

松の葉の細きひまより後の月　京　其成

雲雀鳴湖へ捨る足袋の砂　八　班車

山里やほむれはくれる唐がらし　竹有

物陰や女のをがむ天の川　路大

（此の次に「笈日記」の「水鶏鳴」の巻、芭蕉の「翌は檜」の句其他の寫しあり、普く知られたるものゆゑ之を省く）

株　番

今はとゝせばかりに成ぬらん、越後國の誹諧法師以南といふものありけり、國〱さまよひ歩きて都にしばらく足をやすめける折から、脚氣といふ病をなんやみける。させるくるしみは見へねど、ふたゝび(再)もとの(元)やうになりて古郷に歸らん事おぼつかなきなど、より添ふ者のさゝやきけるをふと聞つけつゝ、かくありて日をかさね月をへて、見ぐるしき姿を人〱に指(ゆびさゝ)れんも心うしとや思ひけん、ある時

天眞佛の仰によりて以南を桂川の流にすつる

染色の山を印に立おけば我なき跡はいつの昔ぞ

とて書、その柳の枝にありしとなん

念佛無間と申者不有近代事ニ　日蓮宗始而凡五百年以來　宗流ニ說廣所也　誰有而國中ニ不可有妨　若於有之違背スル者可爲曲事者也　仍如件

享保十三戊申天

源右大臣吉宗御判

越後蒲原郡吉田村

妙音山七世本久寺

酒井　雅樂頭

大久保加賀守

水野　和泉守

松平左近將監

寺社奉行

本多　紀伊守

（次に其角の句十二句の寫しあり省く）

諏訪　因幡守
大久保長門守
青山　因幡守

町奉行
稲生　下野守
大岡　越前守

春尹良

（祖母―かな女、安永五年八月十四日歿、年六十六）

（弟―義弟仙六、一茶より九歳の年下なり）

（二倉―一茶の生みの母のさと、柏原の西一里に近きところ、宮澤氏と云ふ、今存す）

（父―彌五兵衞、享和元年五月二十一日歿、年六十九）

文化五年祖母三十三回忌墓參りの時になんありける、弟かたより古衾おとしたりけるに、しばらくして又武さし野にさすらへけり、其迹にて、其衾いたく垢つきたれば、二倉なるゆかりの所にて洗ひ得させん迚、ばら〳〵にほどきけるに、とはいかに、中に入たるは綿にはあらで、襤褸の果。あるは古雜巾などの、荒布のやうに黑くしほしたるものにぞありける、かくては縫ひたらんとも喚きたしにはならじと、其まゝ箱におし込置たりけるを、ことし霜月廿四日父十三同忌といふに、はる〴〵古鄕に來たりけるに、二倉の人しか〴〵のもの也とてかたられ（語）きを、よく〳〵見れば、いかにも申さるゝ通り、都の乞食衆は爪はじきして嫌ふべき品也けり、昔ある人纏子をうとみて、芦の穗の布子をなん着せけるといふ。むしろふくらかにして、いかで此ものよりあしからんや、さればぞ、過しいつ〳〵のところ、たゞならぬ閨の下冷に長の霜夜を泣明かせし事よと。前の寒（さ）迄思ひ出されて、よしなき罪を作り侍る、今も又、あやにく玄冬素雪の折から來合せしが、のみならずしかとしたるやどりといふもあらねば、必しもかゝる大雪に埋れ果なん、されど鐵臼か靈となりて、鐵杵をとり殺さんも今さら古めかしく、とやせんかくやせんと、さまよ

ひけるを、情ある里人、家の小隅かしてとしとらせんとあるに、地獄にて佛見たらんやうにうれしく、師走廿四日といふに、そこにうつりて、可候よりめぐみたる鳥の毛蒲團をかぶつて大寒を凌ぎ、春甫に貰たる紙帳を引張て、裂風を防ぎつゝ、人〳〵のかげにて、漸酉の春に、はなしぬ

（可候―門人、上水内郡毛野の人）
（春甫―村松氏、上水内郡長沼の人）
（しだら―體たらくの意）

人並の正月もせぬしだら哉　一茶

倩おのれを思ふに、ものゝ下の艸性にやあらん、桔梗かるかや女郎花のたぐひ　茅又は萍の下に生へつゝ、永の月日をつかの間も伸ることならで、たま〳〵上の物の盡る期あれば、盲龜のうき木にあへるごとく、日影めづらしく、うれしげに見ゆれど、ほと〳〵其色としもなく、さらに灯心のそよぐやうに、やをらいさみ、やをら婆娑の風に吹れつゝ、おのがさま〳〵の姿にならんとすれば、又あらけなき荒箒にかけられつゝ、生涯花さく事もなく、五十年の夢けろ〳〵さめて、たゞ〳〵立枯るゝを待のみ、皆是前生の報ひのなす所なるべし

（一茶この時五十一歳なり）

世中の梅よ柳よ人は春

文化十年正月一日　信濃國柏原　一茶認

四日節分

かくれ家や歯のない聲で福は内　一茶

月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ　、

人日

垢爪や薺の前もはづかしき　、

正月や梅のかはりの大吹雪　、

梅の木に花と詠るしめ(標深)しか(推定)な　、

鶯にあてがつておくかきね哉　、

ほく／＼と霞給ふはどなた哉　、

まふ蝶にふりも直さぬ野猫哉　、

穴藏の中で物いふ春の雨　、

板橋

かしましや江戸見た雁の歸り様　、

淺草の富士を踏へてなく蛙　、

とけ際に成て見る也比良の雪　、

（赤打山―淺草大川端にあり）

花ちるや今の小町が尻の跡、
かすむ日や問屋がらの芭蕉塚、
かるた程門の菜畠も咲にけり、
小むしろや土人形と雀の子、
大凧や上げ捨てある赤打山、
かすむ日も雲の上なる住居哉、
なくな子供赤いかすみがなくなるぞ、
西山やおのれが乘るはどの霞、

善光寺

雀子も朝開帳に參りけり、
ちる花のわらぢながらの一緩哉、
ちる櫻犬に侘して通りけり、
木母寺の花を敷寝の蛙哉、
狗に委迄ごされと蛙哉、

藪入が供を連(れ)たる都かな、

棒切でほぢつておくや菴の畠、

我蒔た種をやれ〱けさの露、

山里は猫が木の目(芽)もほけ立ぬ、

我宿は何にもないぞ巣立鳥、

陽炎や臼の中から一筋、

題吉原花

目の毒としらぬうちとそ櫻かな、

春雨や喰れ殘りの鴨が鳴、

子守唄雀が雪もとけにけり、

はんの木と同じ並や雛達、

出代やいづくも雨しんめの花、

雛なくや先今日は是きりと、

山寺や翌そる兒の爪、

（原圖）　看齋

雪どけや雀と牛の寢所程　柏我

寢よ子供焼る山から鬼が來る　春和

猿と雉連立一なく寺の山　允兆

花の山さても大な人が來る　、

春風や鼠のなめる角田川　一茶

朝露の瓜の二葉をきじの鳴　素鏡

けふからは世（の）中よいと燕哉　、

芋洗ふ妹や春風さらし臼　、

つみ艸や肩で風きる女達

春雨や留主とは見へぬ藪の家　松宇

さらぬだに淋しき秋の夕間暮　、

渡る鴈（かり）金（がね）山寺のかね　雪丸

思（う）さま寢てはとして歸（る）鴈　一茶

（はこして―糞をすること、信州方言なり）

（成美—夏目氏、隨齋）

ヌかとて鹿の見るらん歸鴈　、

人丸の筆の先より歸鴈　、

かはる〳〵巣の番したり親雀　、

二月十八日出　三月一日來　成美

夢の世となぐられもせずすゝ拂　、

我宿は氷をつるすあたり哉　、

脊をほすも入日がち也としの暮　、

おろかにもをしみし年を君が春　、

人住(め)ば水もこぼれて藪の梅　、

魚さげて柳がくれにもて入ぬ　、

人日

妹が子は薺うつ程に成にけり　、

春の寒たとへば蕗の苦み哉　、

雀子も足を引ずる涅槃哉　、

同日來

古雛に胡粉の過し餘寒哉　（習兄改）道隣

叔人（よきひと）のよき中に似し春の風　道彦

菜の花や染て見たいは富士の山　巣兆

畠打と語りに行んむしろ切　竹馬

かまくらやばくちの錢もかげろひて　久臧

二月の海へ向るや小行灯　秋守

朝酒もうれしとしりて小松引　浦人

餅にもならで春ふる柚みそ哉　壺然

鶯の日もとにさす旭かな　春蟻

軒下や吹寄貝もんめの花　素玩

去三月四日出　全日來　樗堂

出たければ出る夜が出來て梅の花、

山吹もはや、今（推定）出たりかたつぶり、

（樗堂―栗田氏、伊豫松山の素封家）

（万和―晋氏、大阪人、臥鵰の別號あり）

思ひ出して俄に春の名残り哉　、

正月十五日出　全日來

きのふのが皆と思へば歸鴈　万和

朝な〳〵げにもと思ふ柳哉　、

ひとり目が明(い)た所が花の春　、

松風や百を頭のとし籠　、

やす〳〵と買(は)れ給ひぬ星佛　、

薪わりや春待力出る拍子　、

山藪やちつとも吹(か)ぬ冬の月　、

月折〳〵心ある雪の降りやう空　、

蒲公(英)を中に坐どるや道者達　白(フルマ)飛

菴の雪下手な消やうしたりけり　一茶

大鶴の大事に歩く菫哉　、

待〱し櫻となれど田舍哉、

山吹のとがねあざふく水かげを、
　うしとやと牛に呑せざらなん、

里人のねまる程づゝやく野哉、

城中鶯

鶯や殿より先へ朝飯を　一茶

武士や鶯に迄つかはるゝ、

てう(推定)〱と大伐木の下わらび、

晝ごろや雉の歩く大坐敷、

陽炎や鍬で追やるむら烏、

其艸が放れづらいか鳴く雲雀、

晝飯をたべに下りたる雲雀哉　、
古笠へさくり／＼ととき茶哉　、

長沼に長泊りなす折から、誹諧歌のまねをするとて、（長沼―信濃上水内郡、昔の善光寺街道）
おの／＼題をさぐり侍る

蝶
みよしのゝ吉野の山にぬるてふは
からの櫻や夢に見るらん　一茶
世中はかくてもへけれぬるてふの
夢見てばかり身をすぐす哉　仝

車
いくばくのなげきとりつむ小車の
下り坂なる我齢かな　仝
老の坂上りつめたる小車の
跡へもどれる月日をも哉　仝

梟
春風にうしろつんむく梟け

吹ちる花をいきどほる哉　仝

乞兒　櫻さく木の下かげに乞食して
袋にあまる花の雫哉　仝

梅　梅の花ちらぬ先にと鶯の
がはりに來鳴むら雀かな　仝

雉　花山は住なれぬとや夕雉子
もとの燒野に鳴もどる也　仝

子を捨る藪を見過し〳〵て
つびにのぼらぬ夕雲雀哉　仝

御日さまに囀殘りの有やうに
今の雲雀の又上るなり　仝

ある山寺にうつろ木の一なん有り
ける今にも枯るゝばかりなるがさ
すが春のしるしにや三つ四つふた

つつぼみけるを

淺ましの老木櫻や翌が日に
倒るゝ迄も花のさく哉　、

松の吹折たるを

ちよ八千代あだ欲としき松(の)木を
やにはに折(り)し大あらし哉　仝

かつしかの菴をいづる時

我庵に又すむ人よ露程の
心さし木の櫻とをしれ　仝

露の身は翌(の)あらしも白桃の
二葉三はを植てける哉　仝

月代の中ずり程に卿やけて
山の額のうつくしき哉　仝

杣人の眞柴のけぶり心せよ

軒ばの梅のすゝけもやせん　仝

三月十五日菴出なんとして

笠着るや櫻さく日を吉日と　、

花に出て犬のきげんもとりけらし　、

蝶來るや何のしやくりもない菴へ　、

後家雛も一つさくらの木間哉　、

春風やひらたくなりて家根をふく　、

高い山から谷そこ見れば

春の風おまんが布のなりに吹　、

春風や御祓うけて歸る犬　、

さをしかよ手拭かさん角の迹　、

すりと木の音に始るかすみ哉　、

人のするほふほけ經も梅の花　、

手枕や蝶は毎日來てくれる、
善光寺も直通りして歸る鷹、

三月一日出 すりもの二葉入 廿九日來

小坐頭や花の日なたに寢てあそぶ　成美
年よれば度をうしなふや花盛り、
世に住ば人の供して花の中、
起て寢て花の日數のあはれ也、
巣立して鳥の心は跡もなし、

三上吟に

匍すればたつ〳〵子也　白獅
月あかき家の月いかにうかるらん　新眞
衞府の火箸に堀起す菊　キ角

○

人魂の都へおつる星月夜　洲

(「三上吟」は書名芭蕉七回忌追善集として其角の著すところ、こゝに一茶の書きぬきたるは己れの好みたる附句を拔萃したるなり)

(洲―沾洲)

鳥の露の十徳へちる　　貢

軒下に粉蝶侯を秋のくれ　　令

（令―序令）

○

友鵆すかし扇に詠やる　　貢

まだ供人の鰐口が鳴　　潮

（潮―東潮）

○

空腹のはし折おろす継の門　　獅

（獅―白獅）

淺香のかつみ水鍋に入　　（欠）□

（欠字は東潮なり）

○

銀杏を待風さはぐ也　　貢

月すめば肩にのる子を聲で漕　　角

（角―其角）

（漕の字一茶は書誤りたれども「三上吟」に依りて今訂正す）

○

狼ゆへに密夫も來す　　角

蜑ならば忍の浦とうたはれん　　貢

し　だ　ら

（叟—朝叟）

（俳諧勧進帳は路通の著にして、元禄四年刊、その中より一茶の抜萃せるものなり）

（「辻人形」以下は「三上吟」なり）

とにかくとちて部屋の讃談　叟

○

懸目安にて月が照ル〳〵　洲

ちる柳継母所しどけなき　叟

水口籠恵のよはる菖のは　介

俳諧勧進帳

其角參會のとき

目をしやれよ花しほれたる庭（ママ）なと　李吟

○

辻人形の耳はあらまじ　序令

小盗を扇でしばるけふの月　白獅

はたかり草の腰を折風　新眞

○

川越に談義聞る枯野哉　沾徳

から鮭のはたへ也けり鉢敲　口遊

風やさし木なりしも森の聲　曉松

しみ／＼と子は肌へつくみぞれ哉　秋近（色）

椋ちるや城の稲荷の小豆飯　橘叟

海越に田地をぬらすしぐれ哉　里東

かれ尾花のあらましにて
門人をしのび侍り

次郎兵衛は何あきなひを夷講　横几

蓑虫の下に何着て時雨哉　秋航

しだら二

手まり唄

下谷一番の良して更衣　一茶

貫綿や尻のあたりのへの字穴、

閑坐

手枕やぼんの凹よりとぶ螢、
小けぶりも雲を作りてほとゝぎす、
江戸の雨何石呑んだ時鳥、
我宿や鼠と仲のよい螢、
藪並や同じ夕の紙の蚊屋、
うつくしや若竹の子のつい〳〵と、

（淺野―信濃上水内郡、文虎は西原氏、一茶門人）

門口にふき並るを待かねて
菖蒲の先へ下る蜘哉　、

奴賛

じやらつくなどつといそとな女郎花　、
味噌豆の珠數がそよぐぞ芥子花　、
うの花も葎の軒もおしなべて
たゞ一聲のほとゝぎす哉　、
時鳥もてなすとてや夕暮の
里の蚊やりのなせるよと雲　、

地震瀧

瀧けぶり袂に這入る袷哉　、
白川や馬の耳にもほとゝぎす　アサノ文虎
笋に病のなきもなかりけり　一茶
閑居して笋番をしたりけり　、

けふの日や替てもやはり苔衣、

更衣門の榎と遊びけり、

追悼

墨染に茨もさけよ閑古鳥、

うかれ蚊や臼となりつゝ又柱、

夏の蟬戀する隙もおしむらん、

短夜やくねり盛りの女郎花、

短よや蠶の口のさはがしき、

そとでなけ同じ風ぞよ夏の蟬、

露ちりて急にみじかくなる夜哉、

だまれ蟬又髭どのがおじやるぞよ、

笹の家や掴み捨れば又螢、

逢坂の蕗の葉かりて一夜鮓、

蕣のあつらへたやうなをし竹、

前の世のおれがいとこか閑古鳥　、

麦の葉のはつとかすみてかんこ鳥　、

令身ニ加ヾ氷著ケ酒ニ水ニ活與人者
死作ル水中ノ虫ト

孑孑のふり盡しけりけふも又　伏水あし丸

筏士の箸にかけたる螢哉　一茶

門涼夜は煤くさくなかりけり　、

貞丸に一夕立の始りぬ　、

蟬鳴や我家も石に成るやうに　、

涼し〳〵や八兵衛どのゝ祈り雨　、

迹からも又ござるぞよ小夕立　、

西山や扇おとしに行〳〵月夜　、

有明に涼み直すやおのが家　、

蚤の迹それも若きはうつくしき　、

蚤とべや野らは刈萱女郎花、

たのもしや西紅の雲の峰、

旅人や山に腰かけて心太、

むだ雲やむだ山作る又作る、

灯籠のやうな花さく御祓哉、

梶の葉に借錢書て流しけり、

柴賣

老の身や一汗入て直に又、

三月七日出　四月廿日浅野より來

出代や今さら壁のたはれ言　成美

三月廿八日出　四月廿二日來

蒲團ごと朝寢を引や蠶棚、

寒食の是をもいとへ唐からし、

二月出　仝日來

松嶋のなつかしきところを蝶は行　駿州　東陽
春雨の中や竜の松植る　、
鶯のなさけに逢ふやうつの山　、

二月出　全日來

正月が來た上にまた梅の花　一瓢
雪どけやそろ〳〵家が邪魔になる　、
蝶とぶや袂焦して出てあれば　、
よい聟をたんと吹かせよ春の風　、
蝶の空家鴨の水と成にけり　、
錢なくて袂二つの長閑也　、
繼さまや爺がもて來しよしの山　、
二三文錢もびちや〳〵春の水　、
小雀の口も淺艸そだち哉　、
陽炎に墨つけてやる柄杓哉　、

（一瓢―江戸谷中本行寺の住職、清水氏）

（道彦―鈴木氏、金鈴舍と號す、仙臺の人、江戸に住）

三月五日出　全日來

わか芝に今降をさへ残る雪　久蔵

九月廿七日出　全日來

かげさすや夜永をつたふ手長蜘　イガ士得

掌に名月おかぬ夜としなし　、

四月十四日出　廿六日來　スリ入

あかぬ日や竹林麥に茶の給　道彦

あはぬ世の神もわか葉の八日哉　、

空豆の花の墨にも暮の春　、

爐（明）扇とよびそめ給ふけふに逢ひ侍るにも例の老婆心とこそ先立なれ

花葬ならぶ土筆にうとまれな　、

皈菴納涼

一吹の風も身に成る我家哉　一茶

御祭りや誰子寶の赤履、

おゝさうじや迯るがかちぞやよ螢、

祇園

ほとの兒大(太)皷に醉もせざりけり、

月ほとにもつと聳(え)よ朝けぶり、

小莚やはした夕立是も又、

帷子を四角四面にきたりけり、

夕月や大肌ぬいでかたつむり、

おく信濃に浴して

下〱も下〱〱の下國の涼しさよ、

誰宿ぞ蓮に吹かれて夕茶漬、

虫干

迯る也紙魚が中にも親よ子よ、

葉がくれの瓜を枕に子猫哉、

一

人來たら蛙（カヘル）になれよ冷し瓜、
山蜂や鳴〳〵通る大座敷、
投出した足の先也雲の峰、
さはぐなら外がましぞよ蓮の蠅、
川狩りや地藏の膝の小脇差、

碓峠

汗の玉艸葉（に）おかばどの位、
蟬鳴や天にひつつく筑摩川、
とうふ屋が來る晝顏が咲にけり、

青田

ちぐはぐにつゝさす稻も青みけり、

五月廿一日張行

けふの日や替てもやはり若衣　一茶

（大綾—信濃六川の人）
（知洞—信濃六川の人）

せどは卯月の花だらけ也　大綾
むら雀松から松へ縄張て　知洞
舟よ〳〵と呼る笛持　茶
月影に錠（の）かゝらぬ門もなし　綾
芋に實の入る風の吹らん　洞
ウ
鳴鷹も殆あきし鞍の上　茶
珠數つまくれどかまくらの鐘　綾
是式の恋さへ齋の嘲げしき　洞
聟の氣立を量ふ餅搗　茶
思ふ事紙縷五尺に見せばやな　綾
いつより早きむら鳥威　洞
川舟にばら〳〵西瓜ほふり込み　茶
萩のうしろの小酒屋の月　綾
虫籠を握りながらに寝たりけり　洞

すは宮さまの御通りぞと　茶

花盛りうき世は慶長十九年　綾

どつかりかすむ古郷の松　洞

二

韮汁に藥師祭りがはやる也　茶

馬の尻尾に袋かぶせる　綾

妹は大竹原をゆづられて　洞

涼しき風に配る木枕　茶

おかしさよ笛も李も三文に　綾

熊野參りの箸をいたゞく　洞

板壁やおくの狀日もとし暮て　茶

頭巾の先へ消る三ヶ月　綾

千鳥なけかゝる小橋も名所也　洞

大事の〳〵松子(まつかさ)をたゝく　茶

念佛は上總訛りも珠(ず)勝にて　綾

加賀蓑二つ垣に吹るゝ　洞
まてしばし次郎三郎さきん達　茶
よき夢見する水風呂も有　綾
朝朗棚のぼた餅春めきて　洞
とつても同じ花の世の中　茶
初雲雀ちやくや何がいそがしき　綾
そよりともせぬ軒の染糸　洞

わか竹に一癖なきもなかりけり　一茶
よい口やら蚤が踊るぞはねるぞよ　、

雨國
大涼み無疵な夜もなかりけり　、

其引

わか竹の一節なきはなかりけり　一　茶
　細き蚊やりを頼む夕陰　大　綾
霧しぐれ御用車の聲かけん　知　洞
　五介團子の切る秋風　茶
荻(萩カ)の葉のひた〱汐に暮の月　綾
　雀おどしの笊たゝく也　洞
みちのくの忍の鐘も聞馴て　茶
　笑てのける恨み十程　綾
榾の火をかきちらしたる小山伏　洞
　夜市〱も翌は正月　茶
跡舟は松本酒と室の梅　綾
　晉良も其角も諷へ催(さい)馬(ば)樂(ら)　洞
生壁に窓三つ二つくり拔て　茶
　鶴の御扶持を下されにけり　綾

しだら

（□はむしくひなり）

薄月の單羽折を引かつき　洞
肴のやすいあきの宮嶋　茶
追〳〵に漆のかはく花咲て　綾
艸履の先は皆小てふ也　洞
雉ウの聲平親王の祭り迚　茶
□（糸いカ）□達磨のそよ□（ぐカ）□（神衛カ）□　綾
戀衣□（胡カ）な〳〵に湯をかけて　洞
夢は二百に手をたゝく也　茶
山陰も江戸のてぶりと世はなりぬ　綾
夷三郎の社いとなむ　洞
はつ雪に大の字なんどにぢり捨　茶
たゞ有明の下馬先の松　綾
皷打昔おどりに氷くれん　洞
一休流の玉祭り見よ　茶

吹からに荏三本植てけり　綾
升借してやるらやむやの關　洞
夕やけがへなく橋に始るぞ　茶
四五軒ばかり乳を貰ふて　綾
いさや鳴け鳥小鵆山鳥　洞
彌勒菩薩に御茶奉る　茶
花盛さしたる人も来ざりけり　綾
隠居畠の春の夕暮　洞

行な螢□(都カ)の空はやかましき　一茶
お江戸迄□(今カ)一息か時鳥　□(、乞)
(ムシ)……し竹、
夕□(ムシ)□□咲かせ釣□哉　知洞
五月雨の瓣の付た□□哉　大綾

蚊いぶしもなぐさみになるひとり哉　一茶
蚤どもに松嶋見せて逃しけり、
わる赤い花のとて〳〵苔清水、
うれしいか垣の小竹もわか盛、
陽炎の眞盛也麥の秋、
つゝじから出てつゝじへ清水かな、
わか竹とそよぐも一夜二夜哉、
せはしさを我にうつすな時鳥、

雜談集□百□（）

（雜談集―其角の著、これは其の抜書なり）

醉てほゆるか梅の下臥　仙花
春の水三十川の安き瀬に　其角
、
しけ地ふむひつぢまじりの芹（の）花　化

野にうかれては鼠とる犬　角

しづかに漕げや夕汐のふね　化

一二三寝は景のよい時月をあきて　角

心(しん)をつむとてきえし挑灯　化

出あへと千人切をよばふらん　角

全歌仙

桐のはや土用の中も今幾日　彫棠

簾を空におほふ夕立　其角

入川に通らぬ舟の棹とりて　全

捨がてに腰よはく成團(うちは)にて　棠

目張をしたる二階いぶせき　角

狐の風呂に入かたの月　栄

加茂川に今朝は流るゝ瓜茄子　角

茶店に□□□（よりてカ）升の隅より一息にのむを

秋□（のカ）□（蚊カ）や血にふくれたる醉心　嵐山

殘暑をさぐる馬上の人その様平懐也

秋の日や笠に着せたるひとへ物　仝

袴たゝむもくるふとしもと　岩翁

秋送と年玉扇のけておく　角

朧なる月に座頭を送らする　翁

花も柳もわかる宗（シュウ）論　角

山鳩いとゞくもる日の聲□（□は翁とあるべし）
ゐさゝ川蕪（カブ）の枯葉をかき流し　角
草枕御坊の色にしられたり　仕（草枕の句以下は別の歌仙なり）
命の恩にとまる盜人　角
きぬ〳〵やどう寐忘れて旭影　船
あまり思ひに酒ばかり吐ク　仕
消る身の三味線ひくも我（が）に成て　角

丁卯のとし
一芭蕉菴の月みんとて舟催して參りたれば
名月や池をめぐつて夜もすがら　翁
すゝめて船にさそひ出しに清影をあらそふ客の舟大橋に坼（ワカ）れてさはぎければ淋しき方に漕廻して各句作をうかゞひけるに仙花が從者（ズサ）舳のかたに酒□（あたた）□□めて有りながら

（以下欠）

（藥方の聞書としてノートせしものなり。一茶の手帖の中には斯業なる治方の覺書、甚多し）

麻藥部

草烏三分　當歸　白芷各二分半

右末每服伍分熱酒調下麻倒不知痛

九烏散

曼陀羅花一錢　露蜂房三分五厘　鵝糞同

反鼻一錢一方無反鼻

右四味細末以麻酒飯服實人九分虛人八分許

沈不醒者與濃煎茗一碗爲妙

治傷骨節不敀窠者用此麻之然後下手

○麻沸湯

蔓六錢

白芷一錢

南星同

當歸三錢

川芎六錢

烏頭一錢

草烏散

整頓

白芷　川芎　木鼈子

猪牙皂角　烏藥　半夏

紫金皮　杜當歸　川烏各二兩

舶上茴香　草烏各一兩　木香半兩

右爲細末諸骨碎骨折出臼者每服一錢好酒調下麻倒不知疼處

（右六味爲末溫酒云々は原本には「草烏散云々」の上に頭記とせり）

右六味爲末溫酒ニテ送下大人ハ二錢八才マテハ一錢五分煎法ハ大體三錢五分ヨリ四匁マテ用ユヘシ尤多ハ常ノ茶碗ニテ水二盞半ヲ二盞ニ煎ズベシ但シ武火ニテ

（校訂者記）友人、博物學者に考を求めしところ、右の處方は左の如く、判讀すべきものなりと云ふ。

痲藥部

○痲沸湯　草烏三分、當歸　白芷各二分半
　右末每服伍分熱酒調下痲倒不知痛
　蔓　六錢
　白芷一錢
九烏散　南星同（天南星のことか）
　曼陀羅花一錢（同とあるべし）
　露蜂房三分五厘
　鳩　糞同
（右六味爲末溫酒ニテ云々と位置することと考ふ）
草烏散　當歸三錢　反鼻一錢一方無反鼻
　川芎六錢
　烏頭一錢
　右四味細末以痲酒飲服實人九分虛人八分匁
　沈不醒者與濃煎茗一碗爲妙
　治傷骨節不歸窠者用此痲之然後下手整頓

なほ漢方藥に審かなる者につき意見を徵し又古書を調べしも「痲沸湯」なるもの普通の漢方書に見當らず

「九烏散」といふものも不明。六味四味とあるより斯く分けて見たり

整頓の二字は前の行に接續するものと思はる。下手整頓とは整形外科の處置を意味するなるべし

しだら　三

（善光寺なる桂好亭に滞在中、癰を獲したる病床の記なり。七番日記に據るに、
（六月）
十八日　桂好亭ニ
入同禮跡
去十五日癰光シ
今日甚
廿日、晴、夜雨
若村ヨリ牡丹湯
呑
廿二日、晴
山中赤田葉呑
夜大熱
廿八日、晴
一考ヨリソバ来
ル
廿九日、晴
灸善徳本寺参詣
来
（七月）
一、晴
柏原萬藏来
饅頭一袋

無常の風のはけしきと病の悪鬼のおそろしきは、佛もまぬがれ給ふとあたはず、まして荒凡夫の我／＼いかで是を避る事あらん、ことし六月の始つかたより、臀のかたはらしく／＼うづきけるが、旅中心に任せず、等閑にうち捨おきける、さるを十五日ごろより、鮫鱇の餌袋に水入れたらんやうに、腫れふくれて、其痛む事鎗もて突（か）るゝごとく、又大熱さらに炎の中に坐するがごとく、流るゝ汗は蓐を浸して、火車に乗るくるしびも是には過じと思れける、是癰といふやまひにて、世俗いのちとりといふとぞ、誠にさもありなん、醫師わが村の藥も楠本に塔ふごとく、骨折がひなく、外科小山の術も、死灰（に）針うつやうに、さら／＼しるしもあらねば、おのづから膿水出る時をまつにはしかじといひて、おの／＼歸りぬ、かくてかたりあふも枕と向きあふばかりなれば、寝蓬の目をかぞへて日をくらし、ある時はともし火の花を詠て夜を明しつゝ、いつを果ともしらで、かくあることとのもどかしく

二、晴
仙六來ソバ一袋
七、晴
雞大臘出）

蚤蠅にあなどられつゝけふも暮ぬ　一茶
凉しく見ゆる庭の艸花　文路
水風呂の桶の際より月出て　反古
としの綿のはけ口をとふ　春尾
初雁にちよろ〱川を渡る也　路
花の玄關の小ぎれいな事　茶
また活て居ます〱と袴きて　古
大佛作る大淀の寺　尾
棒の降る酒屋の喧嘩とし暮ぬ　路
二人揃て歸る絆賣　古
縁むすぶ神の榎の噂して　尾
書付ておく曉の夢　路
秋風の隣も同じ艸枕　古
五百が虫を放す須磨山　茶

鼻先に月は上らせ給ひけり　路
　洗濯すれの門の青石　尾
朝〳〵の澁茶のために花植て　茶
　非人の眞似るうぐひすも春　尾
彼岸迚目出度水の流けり　古
　烏帽子序に京へいて來る　路
おとゝひの菖蒲千句をよく覺へ　尾
　入相聞けと窓をあてがふ　茶
世を忍ぶ藥にもなれ角田川　路
　焚火おり〳〵見ゆる乙姫　古
打付るやうに霰のたばしりて　尾
　一番鎚が急ぐ松原　路
山寺に金二包ほふり込み　古
　どちの砧も古郷でなし　尾

月の雲うそ〳〵寒く成まゝに　茶
露の中から下る川舟　古
みちのくや最上郡の住よくて　尾
鮪もいはしもたゞ五文也　路
寄合て念佛頭に灸をすへ　仝
日がな一日花のちる也　茶
かる〳〵と笠をかぶれは鳴雲雀　古
庄家のせどに春風が吹　路

六月廿八日、おの〳〵夜伽ともなく枕元により添へ、ひとつ二ついひ出るより、つひにくだらぬ一巻とはなりぬ

御祓

灯籠のやうな花さく御祓哉　一茶
麻の葉に借錢書て流しけり　、

皈菴納涼

一吹の風も身になる我家哉、

立秋病中

秋風やまたか〳〵と桃吹、

露ちるやむさい此世に用なしと、

七夕　仝

うつくしやせうじの穴の天(の)川、

□□(祈カ)小唄諷ひ小兵衛といふもの、おのれと同じ病おなじ睡所なりけるが、今日死(に)きとぞ、又此町彦左衛門といふ者も、おなじ病同じ所にて、いつ〳〵のところなくなりぬとかや、其外どこの誰、かしこの何がし、此病に消へぬるもの、もとの露末の雫よりもしげしとぞ、人〳〵物がたりし侍る、さらぬだに死出山を半越へぬる心ちなりけるに、かゝる事聞くにつけつゝ、身の行末のおぼつかなく、此次は我番かと思へば、しきりに心淋しく、さてしもせんすべなければ、たゞ〳〵桂好亭を終の敷寝とたのみて、けふか翌かと入相鐘聞くのみ、さりながら今身まかりぬとも、迹に泣迷ふ妻子もあらねば、な

かく〳〵いまはの時はうしろやすからん

入らば今(イマ)ぞ艸葉の陰も花に花、

柏原の艸庵の荒なんどを思やりて

おとなしく留主をしていろ蛬、

柴ちよぼ〳〵遠山作る秋の暮、

小丸山の塚も思ふばかり也

うら盆の御墓の方を枕哉、

盆が來た來たとやさはぐ女郎花　文路

名月の疊の上の小鍋哉　反古

ちつぽけな影法師も見ゆ小夜砧　一考

七月二日文通　秋風の出所見たか親鳥　(ノジリ)闕之

七月十六日來　門先や榎の外に天の川　(長沼)相我

鼻(棒鼻)棒に成て鳩吹爺哉、

七月廿八日文通　白露や名なし艸迄あつばれな　魚淵

文化十 小笠原

人づてのかしこの山や春の月　日護事 柏翁

添い足らで夏の月夜ぞうつくしき　下フサ 太節

手に持や辻の佛も梅の花　〃 雀老

ひとり打畠の上や二王門　アハ 杉長

小窓から皃の見ゆるも春めきぬ　ヒタチ 道隣

提て行梅にも犬の吼る也　タカ田 左琴

松盡てしらぬふりして桐火桶　白石 乙二

文化十 小松引

花戀て我も寄居虫（がうな）のやどり哉　羽州 長翠

しなのにて不二を見にけりけさの秋　葛三

誰上に雫おとすぞ天の川　鶯老

立待や客を見くだすしなの山　對竹

蓬から虹のまたがる夏野哉　下フサ 素迪

螢見やつり合わろき夜の笠　雨塘

けさの雫竹の臥所も見廻たし　古人柳荘

蛙の大聲上る卅日かな　一茶

晝よりも夜は誰をかともし火の
咲ちる花もひとりながめてと
契仲あざりの病床のありさま
此通りの淋しさなるべし

さて長い夜が永いぞよなむあみだ　仝

先スル時ハ制シ人、後ルヽ時ハ制セラル人となん、青雲の志ある人はつゝしむべきの第一にぞありける、かゝる世捨人はしらずありぬべきことにはあれど、脉論口訣といふ書にいはく、凡諸浮數ノ脉、當ニ發熱スベクシテ發熱セズ、而モ反テ酒淅惡寒若シハ痛ム所有カゴトキハ必癰疽ヲ發ス、結膿未成者ハ宜ク下スベシとぞ、げに〳〵此書に明かせる通りなりし物を、前にかゝる事夢にもしらば、はからふべき術あるべかりしを、醫師ならぬ身のつたなさは、たゞそれなりにうち捨おける物から、病は思ひのまゝにはびとりて、つひに癰

にせいせられて、長□（ムシ）月日をくるしみにおくりぬ、彼西上人もそとを合点して、雪の降る日は寒くとこそあれと申されし、さるをおのが世情にうときは棚へ上て、うき世を看破したる皃つきこそ、又なくはづかしきわざなれ

名月や寝ながらおがむていたらく　一茶

名月やとばかり立居むづかしき　、

あの月をとつてくれろと泣子哉　、

寝あまる夜といふとしにいつか成りぬ　、

列子曰昔吳大宰嚭問孔丘曰夫子聖人歟孔子對曰丘博識強記也非聖人也又問三王聖人歟對曰三王善用智勇聖非丘所知又問五帝聖人歟對曰五帝善用仁信聖亦非丘所知又問三皇聖人歟三皇善用時聖亦非丘所知太宰大駭曰然孰爲聖人乎夫子動容有間曰西方之人有聖者焉不治而不亂不言而自信不化而自行蕩々乎民無能名焉若以三皇五帝必是大聖孔子豈容隱而不

説便有二隱レ聖僭一以レ此校量推レ佛爲二大聖一也

しら露に浄土参りのけいこ哉　一茶

日々中の刻といふに大熱發しければ

けふも又きのふのとろや足引の
　病の責よあはれいつ迄　仝

菴の夜も小長く成りぬ遊ぶ程　仝

我宿は萩一本の野と成りぬ　仝

おそろしや寢あまる夜の罪の程　仝

又泊れ行灯にとまれ青い虫　仝

下駄からり〳〵夜永のやつら哉　仝

火ともして生おもしろき艸の露　仝

あばら骨なでじとすれど夜寒哉　仝

山霧のさつさと通る坐敷哉　仝

痩艸のよろ〳〵花と成にけり　仝

二百十日晴天

世中はよすぎにけらし蝉の露　仝

宵寝すな虫もはたをりつゞれさす　仝

我拵へし野けぶりも秋の暮　仝

勝たぬふりして南山を見る角力哉　仝

寝くらしに丁どよい程夜寒哉　仝

茶店の万灯日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒哉　仝

うそ寒も小猿合点か小うなづき　仝

よん所なく菊に立夜永哉　仝

若爲大水所漂稱其名號即得淺處

橋杭や泥にまぶれしきりぎりす　一茶

雲雷鼓掣電　降雹澍大雨

念彼觀音力　應時得消散

（文路―上原氏、善光寺の人、門人）

雷もそつとおちしか女郎花　、
芒から枯立られし艸家哉　文路
稲妻の連れて来たやらうそ寒き　、
艸花や立日程の尻の迹　一茶
車坐に佛も並ぶ紅葉かな　文路
名月や鍋も芦から首出して　、

（七番日記を参照するに―
（九月）
五日折々雨大寒
長沼上丁ニ入
戒美ニ出書ニ入
六晴呂芳ニ入
北山東山雲
七晴キクトニ入
八晴素ニ入
九晴笹ニ入
十晴アサノ入　頭巾貰）

桂好亭にわづらふと七十五日にして、九月五日といふに、節にすがりて、霜がれの虫の這ふやうに、二足三脚歩きては一息つき、四足七脚運びては臑をさすりて、一里ばかりの道吉田といふ所に到れば、白鳥山の午の鐘つくところになんありける、是より横路に入る、此界隈六月通りし時は田植さなかなりしが、稲はこと〳〵く穂の出揃ひて、久しくやみぬることとの目に見へてひとりおどろく

かな釘のやうな手足を秋の風　一茶

□□（やまカ）國のならひ、俄に空かき曇りて、北山おろし雨を吹とばして、便るべき木立も見へ

ぬ野はらなれば、腰かけて休ふ片陰もなく、されど急ぐとのかなはねば、濡たきまゝにぬれつゝ、申の刻過るところ、かろうじて長沼の郷に入

死とぢれ〳〵つゝ寒(さ)かな、

三木亭にやどる、其夜大熱兆して眠られぬ物から、長〳〵寝馴たる善光寺の閨の灯かけなど見るやうに覺へてしたはしく

蚤どもゝ夜永だろうぞ淋しかろ、
名月や天窓の高き名なし艸　掬斗
名月やキ様の山のうしろから、
晝皃はもつとの中にそよぎけり　白飛
旅(たび)盲女(ごぜ)の仰向く皃へ柳ちる、
盆が來てそよ〳〵艸もうれしさう　一茶
秋風に歩行て逃る螢かな、
此所姥捨などや鹿のなく、
朝皃のちよいと咲たるかゝし哉、

朝〳〵や茶がむまく成る霧おりる、

紅葉

門の森澁紙色で果るげな、

（柳荘—今井氏、古松亭と號す、信州善光寺の代官。文化八年十月二日歿、享年六十一）

柳荘といへる叟は又なく俳諧といふを好みて、普く人にもしられて、おのれもよそ〳〵しき交ならざりしが、ふと無常の風に吹とばされてより、三とせばかりも過ぬ、其子今井儀右衛門と成りて、おほやけの政正しく、松柏の末たのもしく、親の役うけつぎてつとめければ、獅子の威風漂々(凛々)として、誰ありて歯の立者もなく、此地のきりものなりしが、廳の礎もや踏はづしけん、ことし八月廿九日といふに、代官職けづられて、たゞ人とぞなり下りぬ、あはれきのふはとぶ鳥おそれておちしいきほひも、けふは追鳥あなどりて迯ぬおとろへとはなりし、一盛一衰是春秋のならひ、おどろくはおろかなれど、虎嘯きて風起りしも見たりし物から、俄に鼠のあなう世中のありさま、いたはしくぞ覚へ侍る

鴫立や門の家鴨も貰ひ鳴、

しだら

（巣兆―建部氏、米翁と號す、武藏千住に住）

八月廿七日認　九月十四日來書通　　成美

うつり、しや世にたとへたる艸の露　、
蓬や家はつたなき海老のつら　、
淺艸や木は稻葉に二ヶの月　、
名月や雀の鐵は舞も出す　、
いなづまにほぐれもどるや忍冬（すいかつら）　、
明神の大（太）皷まで這ふ葛の花　、

七月十四日出　仝日來通　　巣兆

谷へ掃はゝ木の先や時鳥　、
うの花や振て投込む炬の殼　、
見し人の鍋掻て居る清水哉　、

立秋

うち出る稻葉の波や貫之の（マヽ）　、

六月廿日認　仝日來　　一瓢

（奇淵―茅治氏、大黒庵と號す、泉州茅停浦の人、大阪に住）

更衣人の噂もけふらかから[ ]、
玄關からかつぎ込たるぼたん哉、
朔日もすむや扇の空はぢき、
御祓してへんてつもなし宵の程、

八月十四日出　仝日來

朝皃の卅日朔日と咲にけり、　久臧
名月に桐の葉うごく少（カし）哉、

八月廿一日出　仝日來

鵙の聲いつ迄空の高くなる　素玩
淺艸や心はやくて秋の月、

四月廿六日出　仝日來

壁二ツ間の有てかんこ鳥　（ナニハ）奇淵

五月廿二日出　仝日來

鳴まいと思ふ夜はなしほとゝぎす　丹波山城西大山西尾與左衛門　武陵

夏山や朝のまぎれにかけのぼる　、

檜笠

茶の花の下を通るや立田川　少年 奇邦

葛城や夜を引のこす峰の雲　武陵

蛸壺

江に入て歸らずなりぬ時鳥　京 蒼虬

弟が貰ふ家也わかれ楓　江州 春雄

○

湖を眞中にして田植哉　尾州 岳輅

何書て見ても淋しき團（うちは）かな　竹有

道連は蝶とこたへん人とはゞ　求巴

鳴子引て酒よぶ窓のかすみ哉　梅間

遠山の遠くもあれな歸鴈　鹿野

旅立に送りて

なつかしや不二見る所の菫草　少汝

○

□葉合

百合咲や世間の書のかた揃ひ　梨月

山蟬やせどの小水のいそがしき　百枝

日盛りをとらへて居るや松一木　芳水

山吹の小柴に交る世はうれし　エド素坑

みそ萩や露にとはるゝ母の年　袁丁

饅頭のけぶりもかよへ花の雲　久臧

をぢ甥の家のごぢや〳〵夜寒かな　一茶

木兎が株にちよんぼり夜寒かな

九月盡

けふ迄はまめて鳴たよきり〳〵す

久しく臥たる善光寺の閭を放れて長沼にやどる

蚤どもが夜(長)だろうぞ淋しかろ

死とぢれ〳〵つゝ夜寒かな

玉霰峰の小雀も連て来ぬ

玉霰それ〳〵□(兎□(が□(耳カ)たぼに

熊坂が大長刀をあられかな○

深川や一升(カ)炭もわ、たし舟○

爐・開やあつらへ通り夜の雨

やあしばらく蛼だまれ初時雨

霜がれや新吉原も小藪並○

霜がれや庇の上の茶呑道

徳利を蔦に釣すや網代守

有明や月より丸き捨氷

下町や曲らんとして鐘氷る

今夜から世が直るやら鐘さゝる

釜　其大根を今引ぞ

どなたやら世をうぢ山の冬籠

鳩どもが起して見たり柚みそ哉

さし捨し柳の陰を冬籠

西の木と聞てたのむや冬籠

上置の干菜きれとや夕千鳥

御地藏と日なたぼこして鳴千鳥

菊かつぐうらしろ見よとの紙衣哉

しぐるゝや家にしあらば初時雨

漏るどのがおそろしとかぶる衾哉○

唐のよし野迄も紙衣哉○

零ちるやきのふは見へぬ明家札○

門番が足て掃よするみぞれ哉○

門並やたゞ二日も餅さはぎ

一夜でも寒念佛のつもり哉○

餅花の木陰にてうちあはゝ哉

嵯峨山へ節季で候鳴り込ぬ○
せき候に蹴とばさるゝな迹の児
はやるものは
せき候を女もす也それも御代○

九月六日認　十月廿四日來　十一月廿八日屆

はつ秋や何のけぶりも目にかゝる　成美
秋風をまつとて立や女郎花　〃
飯櫃や下葉をれ込む風の秋　〃
目の前に蝶死てなく鶉哉　〃
はゝ木々にかくれてうてる砧哉　〃

十月十二日認・全日入

暮方やしぐれはなしの裸鐘　一峨

十二日

（一峨―路齋と號す、江戸の人）

我宿は紙□の□□をなる、

九月十三日認 仝日入

麥秋や家の尾にさへ隙のなき 上總白老

欠する羅漢の口へ青あらし 、

雁の聲鍋のいかけもけふ來たり 、

白露にまけじと明る住居哉 、

四月廿七日認 仝日入

鳴水鷄聞かぬ間は鳥に似て ナニハ井眉

桐の木は一つもの也夏木立 、

七月十日出

秋來ぬと我にをしゆる烏哉 アサノ文虎

九月廿四日十月十日兩通 仝日入

どの松を力くらべにとぶ鳴ぞ ノジリ關之

菊の花近腹へりの世也けり 、

十一月三日認　閏十一月二日長沼より來　蟬塚一冊入

椎の木の時雨にまけて朝寝哉　白老

枯芦や神は上らせ給ふ空　、

菜を蒔てちどりにかさんせど畠　、

十月廿三日認　仝日入

神女が袖百一升にしぐれけり　成美

酒舟かとよひ□□□□なくち鳥　、

鳥居塗る丹の□□小春哉　、

盗人も妹と寝る夜や呼ち鳥　、

九月朔日認　仝日入　短尺四葉來

逢坂の艸より明てなく鶉　仙臺領三本木驛　山口熊治　□茆

鹿なくや麥つく里の遠明り　、

九月卅日認　仝日入

一はつみするも朝湯と新酒哉　一瓢

砧せよ獨り枕の野心に、

咳一ッしても秋立もやら哉、

（以下一茶の書寫なり）

定

善光寺小御堂坊中并町屋敷等之儀可爲栗田計ト上者不可有ニ他之綺（イロヒ）但仕置等有ニ相違之儀ー者可加ニ下知ー事

同町屋敷諸役之儀向後乞免許之事

六月之高棚上町ニ有之者諸法度以下可爲栗田計事

佛前拜趨（スウ）之僧上下共不可致普請但於ニ無據義ー者爲如□（來カ）（集カ）宗潡ト之間若輩之人者可相勤之事

從□□□□集來之僧俗或罪科人等出ニ過錢等之役義ー一切停□

□□□□□隱置盜賊又者背□□□可行。嚴科之事

右□□□□判被定置ト上□□

（天正カ）□□□□月四日

栗田永□□□

其外善光寺中

（原本、諸所に破損あり、文字脱逸せり）

永禄九丙子の春大僧正の綸旨下ル時

題松間花　　武田信□

立ならふかひとそなけれさくら花松にちとせの色はならはて

廿二　一、浄土宗與日蓮黨於分國不可有法論若有取持人者師檀共可處罪科　天文十六丁未年六月定之

廿四　一、於出沙汰輩者可待裁許之處相論半不決理非致狼藉條非無越度然者不及善悪可付論所於敵人

晴信於行儀其外之法度以下有旨趣相違之事者不撰貴賤以目安可申依時宜可其覺悟者也

設復有人若有罪若無罪杻械枷鎖檢繫其身稱觀世音菩薩名者皆悉斷壞即得解脫

九月十四日出十二日　□□□

老懐

酒俳諧口かさかりて後の□　□　□

人を追ふて寺はいりする秋蝶　□

山椒の實迄楓のうつり哉　□

閏十一月廿六日出　十二月廿四日とゞく　、

みそさゞい身をかくすなら吉野椀　成美

辛崎の松も見ゆるや大根引　、

一ツ灯のなくなりもせず風の雪　、

いさ豆腐しる人もなし冬籠　、

世の中は月にむら雲花にかぜおもふにわかれおもはぬにそふ

牛糞も佛になれや鉢たゝき　成美

十二月十一日出　廿四日とゞく

人數やそれさへ炭のあき俵　梅壽

寒除の御札はないか日輪寺　仁

四縱五横吾今出行［　　　］蚩尤避兵盜賊
不起虎狼不行還歸故郷當吾者死背吾者亡急
急　太上老君律令

（此上に縱四線横五線の交錯したる圖形あり）

しだら

おら ゝ 春

（普甲寺―丹後國與謝郡宮內に近き山寺、此談は沙石集にあり）

昔たんご（丹後）の國普甲寺（ふかふじ）といふ所に、深く淨土をねがふ上人ありけり。としの始は世間祝ひ事してざゞめけば、我もせん迚、大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〳〵せよと、きといひをしへて、本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ隅ミ〳〵は小闇キに、初烏の聲とおなじくがばと起て、教へのごとく表門を丁々と敲けば、內よりいづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧に候、と答ふるよりはやく、上人裸足にておどり出て、門の扉を左右へさつと開て、小法師を上坐に稱（請）じて、きのふの手紙をとりて、うや〳〵しくいたゞきて讀ていはく、其世界は衆苦充滿に候間はやく吾國に來たるべし、聖衆出むかひしてまち入候、とよみ終りて、おゝおゝと泣（なか）れけるとかや。此上人みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきつゝ、初春の淨衣を絞りて、じたゝる泪を見て祝ふとは、物に狂ふさまながら、俗人に對して無常を演（のぶ）ルを禮とすると聞（きく）からに、佛門においては、いはひの骨張（頂）なるべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも、厄拂ひの口上めきてそら〳〵しく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家は、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず、煤はかず、雪の山路の曲り形（な）りに、としの春もあ

なた任せになんむかへける。

目出度さもちう位也おらが春　一茶

とその五月生れたる娘に
一人前の雑煮膳を居(据)へて

○這へ笑へ二ッになるぞけさからは

文政二年正月一日

とし男つとむべき僕といふ
ものもあらざれば

○名代にわか水浴る烏かな　一茶

水江春色

○すつぼんも時や作らん春の月　〻

山の月花盗人をてらし給ふ　〻、

（句の上の點は一
茶自ら筆の尻にて
捺したりと見ゆ）

ツボサウゾクハウハギハ上衣ノツマヲハサミタル姿也今云カイトリハシヲリノサマ也玉カツラニツボヲリ姿ト云々

善光寺堂前

灰猫のやうな柳もお花哉　ゝ

さくら〳〵と唄はれし老木哉　ゝ

○櫻へと見へてじん〳〵端折哉　ゝ

初午

花の世を無官の狐鳴にけり　ゝ

○かくれ家や猫にもすへる二日灸　ゝ

○稗からあんな胡蝶の生れけり　ゝ

上野遠望

白壁の誹(そしら)れながらかすみけり　ゝ

苗代は菴のかざりに青みけり　ゝ

○花の陰あかの他人はなかりけり　ゝ

二月十五日

小うるさい花が咲とて寝釋迦かな　ゝ

み佛や寝ておはしても花と錢　ゝ

猫の子や秤にかゝりつゝじやれる　一茶

玉川

さらし布襞の足しに縫へけり　ゝ

妙専寺(明)のあと法師たか丸(鶴丸)とて、ことし十一に成りけるが、三月七日の天うら〳〵とかすめるにめでゝ、くはんりう(観了)といふ、ふとくたくましき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまかりて、芹薺など摘みて遊ぶ折から、飯綱おろしの雪解水黒けぶり立てゝ、動々(どうどう)と鳴りわたりておし來たりしに、いかゞしたりけん、橋をふみはづして、だぶりと落(ち)たり。やあれ、觀了たのむ〳〵と呼はりて、爰に頭いづると見れば、かしこに手を出しつゝ、たちまち其聲も蚊のなくやうに遠ざかると見るを、此世の名殘として、いたましいかな、逆卷く波にまき込まれて、かげも容(すがた)も見へざりけり。あはやと村の人々打群りて、炬(たいまつ)をかゝげてあちこち搜しけるに、一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるをとり上て、さま〳〵介抱しけるに、むなしき袂より、蕗の薹三ツ四ツとぼれ出たるを見る(に)

つけても、いつものごとくいそ／＼帰りて、家内へのみやげのれう(料)にとりしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆々袖をぞ絞りける。とみに褐にのせて、初夜過るころ寺にかき入れぬ。ちゝ母は今やおそしとかけ寄りて、一目見るより、よゝ／＼と人目も耻ず大聲に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も、其身に成りては、さすが恩愛のきづ(絆)なに心のむすび目ほどけぬはことは(理)りなりけり。旦には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍と成りてもどる、目もあてら(れ)ぬありさまにぞありける、しかるに九日野送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

（原稿「笑ひののしりて」と書きて消す）

思ひきや下萌いそぐわか草を
　　野邊のけぶりになして見んとは　　一茶

長々の月日雪の下にしのびたる蕗、蒲公(英)のたぐひ、やをら春吹(く)風の時を得て、雪間／＼をうれしげに首さしのべて、此世の明り見るやいなや、ぽつりとつみ切らるゝ草の身になりなば、鷹丸法師の親のごとくかなしまざらめや、草木國土悉皆成佛とかや、かれらも佛生(性)得たるものになん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙哉　一茶

梅の花笈を盗めとさす月か　〃

○松島の小隅は暮て鳴く雲雀　〃

大猫の尻尾（しっぽ）でなぶる小蝶哉　〃

三月十七日ほしな詣

花ちるやとある木陰も小開帳　〃

通りぬけせよと垣から柳かな　〃

餅腹をこなしがてらのつぎ穂哉　〃

正月元日の夜の丑刻より始りて、打つゞき八日目〳〵に、天に音樂あるといふこと、誰いふともなく云觸らして、いつ〳〵の夜そんぜうそこにてしかときゝしと(云ふ)人も有、又吹風の迹なし事とけなすものもあり。其噂東西南北にぱつと弘りぬ。つら〳〵思ふに全く有りと信じがたく、又ひたすらなしとかたづけがたし、天地ふしぎのなせるわざに

て、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下(あまくだ)りて舞したためしなきにしもあらず、今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優(わざをぎ)してたのしむならめ、それを聞得ざるは其身の罪の程によるべし。何にまれあしからぬとりさたなりと、三月十九日夕過より、誰かれ我菴につどひつゝ、おの／＼息をとらして今や／＼と待うち、夜はしら／＼明て、窓の梅の木に一聲有(あり)。

今の世も鳥はほけ経鳴にけり　一茶
鶯の馳走に掃しかきねかな　ゝ
馬までもはたご泊や春の雨　ゝ
雀の子そとのけ／＼御馬が通る　ゝ
かすむ日やしんかんとして大坐敷　ゝ
横乗の馬のつゞくや夕雲雀　ゝ

京島原

入口のあいそになびく柳かな　ゝ
藪村やまぐれあたりも梅の花　ゝ

おらが茶

正月や夜はよるとてうめの月　ゝ

茶屋むらの一夜にわきし櫻かな　ゝ

翌〳〵と待たるゝうちが櫻かな　白飛

なぐさみにわらを打也夏の月　一茶

卯月八日

長の日をかはく間もなし誕生佛　ゝ

五月雨も中休みかよ今日は　ゝ

病後

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　ゝ

五月雨も仕廻のはらり〳〵かな　ゝ

小坐頭の天窓にかぶる扇かな　ゝ

竹の子と品よく遊べ雀の子　ゝ

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ　ゝ

谷藤橋

這わたる橋の下よりほとゝぎす　ゝ
はつ瓜を引とらまへて寝た子哉　ゝ

人形町

人形に茶をはとばせて門涼み　ゝ
今までは罰もあたらず晝寝蚊屋　ゝ
蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　ゝ
世がよくばもう一ツ泊(留)れ飯の蠅　ゝ
卯の花に一人(ツ)きりの社かな　ゝ

幽栖

蟲にまで尺とられけり此はしら　ゝ
身一つすぐすとて山家のやもめの哀さは
おのが里仕舞てどとへ田植笠　ゝ
あつぱれの大わか竹ぞ見ぬうちに　ゝ

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ　〃

としよりと見るや鳴蚊の耳のそば　〃

戸隠山

居風呂へ流し込たる清水かな　〃

此入りはどなたの菴ぞ苔清水　一茶

一つ蚊のだまつてしくり〱かな　〃

其門に天窓用心ところもがえ　〃

かくれ家の柱で蚤を打れけり　〃

越後女旅かけて商ひする哀さを

麦秋や子を負(ひ)ながらいは(わ)し売　〃

筝よ人の子なくば花咲ん　〃

芝でした休み所や夏木立　〃

山苔も花さく世話はもちにけり　〃

孑孑の天上したり三ケ(日)の月　〃

獨樂坊

寢(ね)所(どこ)見る程は卯(の)花明りかな

法の山や蛇もうき世を捨衣

似雲法師

西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖

天哉子ノ迹ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌ

ながらへて歸らんことも白川の關をはる／＼越る身なれば　一茶

ととしみちのくの方修行せんと、乞食袋首かけて、小風呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行らしく見へて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と思へば／＼入梅晴のそらはづかしきに、今更すがた替へるもむつかしく、卯花月十六日といふ日、久しく寢馴れたる菴をうしろになして、二三里も歩みしところ、細杖をつく／＼思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば、一期の月も西山にかたぶく、命又ながらへて歸らんことも、白川の關をはる／＼越る身なれば、十府(とふ)の菅菰(すげごも)の十に一ツもおぼつかなしと、案じつゝくる程に、ほとんど心細くて、家々の鷄の時を告る聲もとつてかへせと、よぶやうに聞へ、畠々の麥に風のそよ吹くも、誰ぞまねくごとく覺へて、行道もしきりにすゝまざれば、とある木陰に休らひて、痩脛さすりつゝ詠(ながむ)るに、柏原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名殘りおしさに

思ふまじ見まじとすれど我家かな　一茶

おなじ心を

故郷に花もあらねどふむ足の
　跡へ心を引くかすみかな　〃

あまびらをおどろかさじと青麥に
　ほどよき風の吹すぐるかな　〃

日々懈怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり蟲よ翌も又　一茶

無限欲（慾）有限命

此風に不足いふなり夏坐敷　〃

翌〳〵の欲（慾）目引張る青田哉　〃

心に思ふことを

故郷は蠅まで人をさしにけり　〃

（あまびら―麥等につく蛾の一種）

宋文公勸學文
勿謂今日不學而有來日、
勿謂今年不學而有來年、
日月逝矣歲不我延、嗚呼
老矣是誰之愆

直き世や小錢程でも蓮の花　〻

松陰や寢莚一ツの夏坐敷　〻

題童唄

三度播て蜻蛉とまるや夏坐敷　希杖

片息に成て逃入る一螢かな　一茶

夕顔の花で涕かむおばゞかな　〻

（原文、夕顔の花で涕てかむ）

あついとてつらで手習した子哉　〻

大螢ゆらり〳〵と通りけり　〻

田中川原如意湯に晝浴みして

なを暑し今来た山を寢て見れば　〻

（如意湯―門人湯本希杖の家、溫泉宿なり）

なむあみだ佛の方より鳴蚊かな　〻

とべよ蚤同し事なら蓮の上　〻

（とべよ蚤の句以下、筆蹟の尻の○點、句の下にあれども、之を略す）

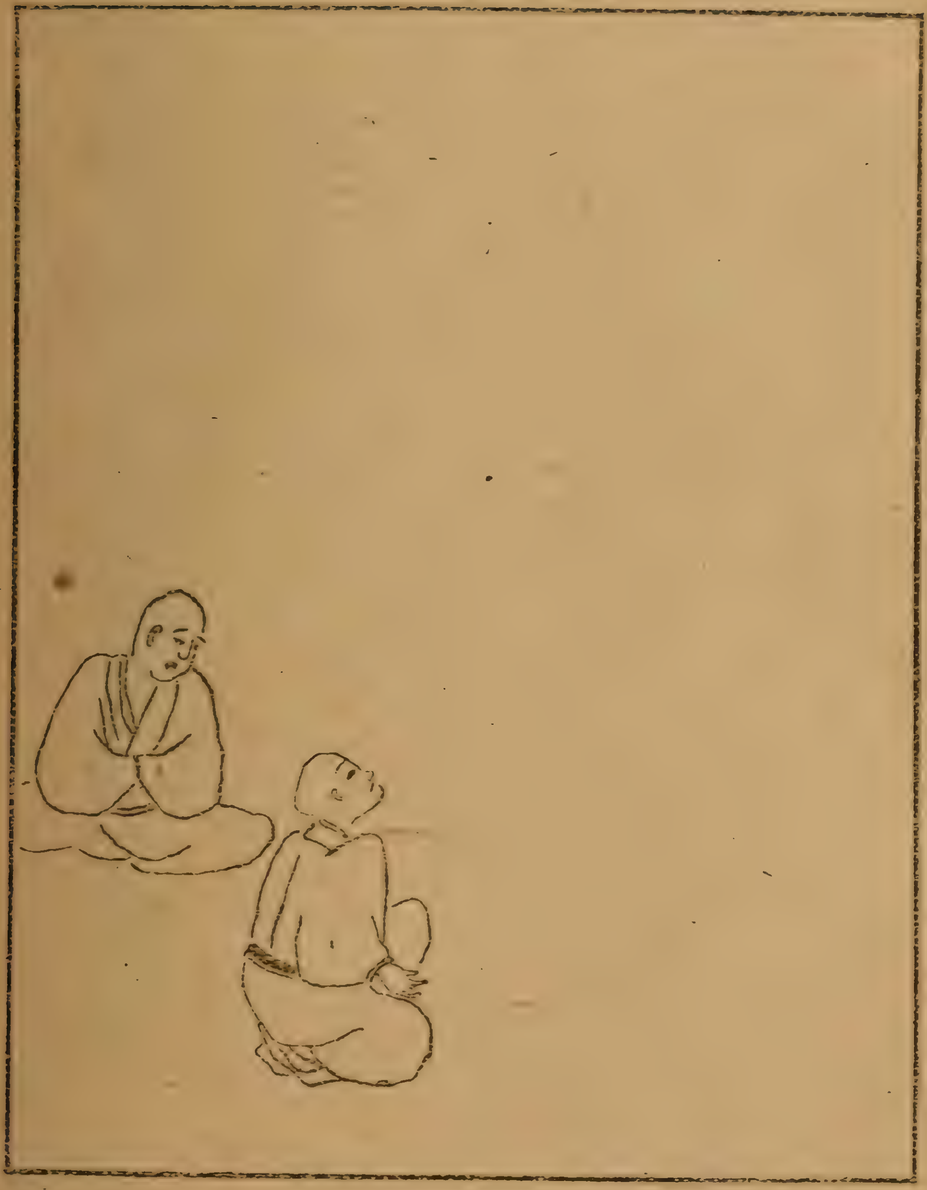
かくれ家は蠅も小勢でくらしけり　〻

ひいき鵜は又もから身で浮みけり　〻

松の蟬どこまで鳴て晝になる
今までは罰もあたらず晝寢蚊屋
はなれ鵜が子のなく舟に戻りけり

（魚淵―上水内郡長沼村の醫師佐藤信胤）

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたりとて、いひつぎきゝ傳へて、界隈はさらなり、よその國の人も足を勞して、わざ〳〵見に來るもの、日々おほかりき。おのれもけふ通りがけに立より侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらひ、雨覆ひの蔀など今樣めかしてりゝしく、しろ紅ゐ紫花のさま透間もなく開き揃ひたり、其中に黒と黄なるはいひしに違はず目をおどろかす程めづらしく妙なるが、心をしづめてふたたび花のありさまを思ふに、ばさ〳〵として、何となく見すぼらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りのたをやめの側に、むなしき屍を粧ひ立て並べおきたるやうにて、さら〳〵色つやなし。是主人のわざくれに紙もて作りて、葉がくれにくゝりつけて、人を化すにぞありける、されど腰かけ臺の價をむさぼるためにもあらで、たゞ日々の群集に酒茶つひやしてたのしむ主の心おもひやられて、しきりにをかしくなん。



紙屑もぼたん顔ぞよ葉がくれに　一茶

蛙の野送

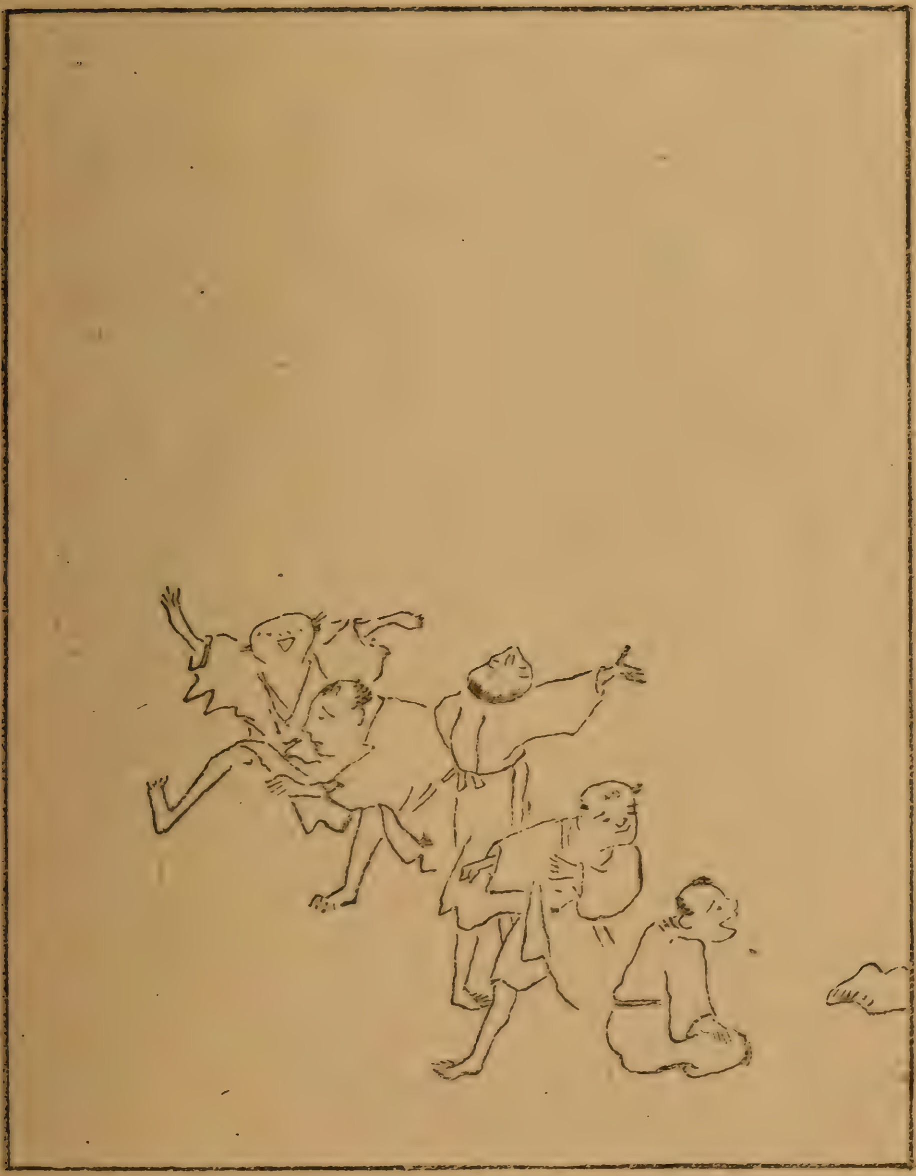
爰らの子どもの戯に蛙を生ながら土に埋めて諷ふていはく、ひきどのゝお死なつた、おんばくもつてとぶらひに〳〵と、日々にはやして荏蓢の葉を、彼うづめたる上に打かぶせて歸りぬ、しかるに本草綱目、車前草の異名を蝦蟇衣といふ、此國の俗がいろつ葉とよぶ、おのづからに和漢心をおなじくすといふべし、むかしはかばかりのざれごと(戯事)さへいはれあるにや。

卯の花もほろり〳〵や蟇の塚　一茶

此もの、諸越の仙人に飛行自在の術をなしへ、我朝天王寺には大たゝかひにゆゝしき武名を殘しき。それは昔々のことにして、今此治れる御代に隨ひ、ともに和らぎつゝ、夏の夕暮せどに莚を廣げて、福よ〳〵と呼べば、やがて隅の藪よりのさ〳〵這ひよりて、人と同じく涼む、其つら魂ひ一句いひたげにぞありける。さる物から長嘯子の蟲合に、

（諸越—唐土）

（長嘯子—木下勝俊、歌人、秀吉の姻戚たり）



歌の判者にゐらまれしは汝が生涯のほまれなるべし。

ゆうぜんとして山を見る蛙哉　一茶

鶯にまかり出たよ引蟾(ひきがへる)　其角

思ふことだまつて居るか蟾(ひきがへる)　曲翠

一。雫。天窓なでけり引かへる　一茶

（一茶自筆にて上欄に電(イナツマ)と書き添あり、一雫に代へて電と再案か）

そんじよそこ爰と青田のひいき哉　〃

閨の蚊のぶんとばかりに焼れけり　〃

鵜の眞似は鵜より上手な子ども哉　〃

寐並んで遠夕立の評義(議)かな　〃

留主中も釣り放しなる紙帳かな　〃

山番の爺が祈りし清水かな　〃

蓮の葉に此世の露は曲りけり　〃

狗(いぬころ)に爰へ來よとや蟬の聲　〃

五月二十八日

とらが雨など輕んじて濡れにけり

信濃の國墨坂といふ所に、中村なにがしといふ醫師ありけり、その父のわざくれに蛇のつるみたるを打殺したりけるが、其夜かくれ所の物づき／＼痛み出して、つひにくされてとろりとおちて死けるとかや。其子、親の業をつぎて三哲といふ。並み／＼より勝れてふとくたくましき松茸のやうなるものもちたりけり、しかるに妻を迎へて、始て交りせんとする時、棒を立たるやうなるもの、たゞちにめそ／＼と小さく、燈心に等しくふは／＼として、今さらにふつと用立ぬものから、恥しくもどかしくいま／＼しく、婦人を替たらましかば又幸あらんと、百人ばかりもとり替へ引かえ、妾をかゝえぬれど、みな／＼前の通りなれば、狂氣の如くたゞいらちにいらちて、今は獨身にてくらしけり。かゝる事うち(宇治)拾遺物語其外昔双紙などにばかりと思ひ捨侍りけるを、今目の前に見んとは、是かの蛇の執念に、其家血筋たやすならんと、人々ひそかに囁きけり、されば生とし活るもの、蚤虱にいたるまで、命おしきは人に同じからん、ましてつるみたるを殺すは罪深きわざなるべし。

(墨坂——當今は須坂と書く)

ヲヽ耻カシイ
コレミエイツト
ボウドウ
モノダナア

魚どもや桶ともしらで門涼み　一茶
とくかすめとく／＼かすめ放ち鳥　〃
彼岸の蚊釋迦のまねして喰れけり　大江丸
水ふねにうきてひれふる生け鯉の
命まつ間もせはしなの世や　光俊卿
ふしつけしおどろが下に住むはへの
心おさなき身をいかにせん　俊頼卿

浅間山

葊顔やぽつぽと燃る石ところへ　一茶

俳諧宗雲水に送る

鬼茨も添て見よ／＼涼み　〃

(「孟子」と一茶が上欄に自書してをり、盡心下編にあり)

古之爲關也將以禦暴今之爲關也將以爲暴

關守りの灸點はやる梅の花　一茶

人聲に子を引かくす女鹿かな　〃

はつ螢其手はくはぬとびぶりや　〃

蓮の花少曲るもうき世かな　〃

隈界(界隈)のなまけ所や木下闇　〃

大沼

萍の花からのらんあの雲へ　〃

越後

柿崎やしぶ〱鳴の閑古鳥　〃

(柿崎―淨福寺に親鸞上人のしぶしぶの名號あり)

江戸住居

青草も錢だけそよぐ門涼　〃

なでしとに二文が水を浴せけり　〃

小金原

母馬が番して呑(のま)す清水かな　〃

風あるをもつて尊とし雲の峯　〃

疫病神蚤も負せて流しけり　〃

茂林寺

蝶々のふはりと飛んだ茶釜かな　〃

櫻までわるく云はする藪蚊かな　〃

蟻の道雲の峰よりつゞきけん　〃

高井郡六川(ろくがは)郷六かはの里、山の神の森にて、栗三ツ拾ひ来りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にて家に家をつくり足しぬるからに、月日の恵みとゞかず、雨露の潤ひうとければ、其としやをら一尺ばかり伸びけり、しかるを此国のならひ、冬に成れば東より西より南より北より、家の大雪をひたおとし

（髪さげ蟲の歌―ちはやふる卯月八日は吉日よ髪さげむしの成敗ぞする）

に落しとむからに、恰も越のしら山、夜に兀と涌出たるにひとしく、其山に薪水をはこぶ道を作るに、愛宕山の石壇（段）登るがごとし、漸二三月ごろ、おしなべて長閑なるに、隣隣の脊戸畠は草木青みわたりて、花もまれ〳〵咲けるに、彼山はいまだ眞白妙に風冴へて、嚴寒を欺くけしきにて、やゝ卯月八日髪さげ蟲の歌を厠に張るところ、山鶯の折しり顔に鳴けば雪の消へ口より見るに、哀なるかな、栗の木末は根際よりほきりと折れて仕廻ぬ、人ならば直に無常のけぶりと立昇るべきだ、古根よりそろ〳〵青葉吹て、かろうして一尺ばかり伸けるを、又前のごとく、家の雪を落し込れて、ほきりと折れ、年々折れ〳〵て、とゝし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからなく、されど此世の縁盡ざれば、枯も果ずして、生涯一尺程にて生て居るといふばかりなるべし。我又さの通り、梅の魁に生れながら、茨の遲生へに地をせばめられつゝ、鬼ばゝ山の、山おろしに吹折れ〳〵て、晴れ〳〵しき世界に芽を出す日は一日もなく、とゝし五十七年、露の玉の緒の今まで切れざるもふしぎなり。しかるにおのれが不運を科なき草木に及すとの不便なりけり。

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花　一茶

ごろべき因縁ならんと思へば苦しみも平生とは成りぬ。

朝夕に覆(オヒ)かぶさりし目の上の
　辛夷(こぶし)も花の盛りなりけり　一茶

(辛夷―瘤と掛けことば)

其引

子ばかりの蒲團に蘆の穂綿かな　山崎 宗鑑

竹の雪はらふは風のまゝ子哉　正勝

うつくしきまゝ子の顔の蠅打ん　江雪

なげゝとて蚊さへ寝させぬまゝ子哉　未達

(まゝ子の句の作者は、正しくは嵐雪)

貞享四年卯歌仙

　葛の纏目をゆるされし文

まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて　芭蕉

祇園拾遺

　下部ひそかに首埋めける

繼母の又口ばしる夜の雨　未達

おく五歌仙

山木かくれて草に血をぬる　芭蕉

わづかなる世をまゝ母に偽られ　風流

小さき土鍋のありけるを我腹の子にとらせて、とらせざりければ、鶯の鳴をきゝてよめるとなん。

鶯よなどさはなきそちやほしき

小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでも知れる爪を咥(くは)へて門に立、と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に蹲りて、長の日をくらしぬ。我身ながらも哀なりけり。

我と來て遊べや親のない雀　六才彌太郎

昔、大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽(のど)を十日程ほしてより、飯を、椀見せびらかしていふやう、是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、

まゝ子はびだるさたへがたく、石佛の袖にすがりて、しか〳〵ねがひけるに、ふしぎやな、石佛大口明て、むし〳〵喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もほつきり折て、それより我うめる子とへだてなく、はごくみけるとなん、其地藏ぼさち(菩薩)今にありて折々の供物(絕)たへざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風　一茶

とその夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世に生れたる娘、おろかにしてものにさとかれとて、名をさとゝよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵あはゝ、天窓(おつむ)てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるをしきりにほしがりてむづかれば、とみにとらせけるを、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て、露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りつゝ、それもただちに倦て、障子のうす紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば、誠と思ひきやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきら〳〵しく淸く見ゆれば、迹なき俳優(わざをぎ)見るやうに、なか〳〵心の皺を伸しぬ。又人の來りてわ

んくはどこにといへば、犬に指し、かあくはと問へば、烏にゆびさすさま、口もとより爪先まで、愛教（敬）こぼれてあひらしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺え侍る。このおさな、佛の守（もり）し給ひけん、迨（逮）夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして、鈴（リン）打ならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらび（早蕨）のちいさき手を合せて、なんむくと唱ふ聲、しほらしくゆかしくなつかしく殊勝なり。それにつけてもおのれかしらにはいくらの霜をいたゞき、額にはしばく波の寄せ來る齢にて、彌陀たのむすべもしらで、うかくと月日を費すこそ、二ツ子の手前もはづかしけれと思ふも、其坐を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりつゝ、剰（あまつさへ）佛のいましめし酒を呑む。（是ヨリ見ルニツケ、マデ小児ノサマ）折から門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、たゞちに小椀投捨て、片いざりにいざり出て、聲を上げ手眞似してうれしげなるを見るにつけつゝ、いつしかかれをも振分髪のたけになしておどらせて見たらんには、廿五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れてうさをなんはらしける。かく日すがら、をしかの角のつかの間も、手足をうごかさずといふことなくて、遊びつかれる物から、朝は日のたけるまで眠る、其うちばかり母は正月

と思ひ、飯焚、そこら掃かたづけて、團扇ひら／＼汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺る相圖とさだめ、手かしこく抱き起して、うらの畠に尿やりて、乳房あてがへば、すは／＼吸ひながら、むな板のあたりをうちたゝきて、にこ／＼笑ひ顔を作るに、母は長々胎内のくるしびも、日々襁褓の穢らしきもほと／＼忘れて、衣のうらの玉を得たるやうになでさすりて、一入よろこぶありさまなりけらし。

蚤の跡かぞへながらに添乳かな　　一茶

じり／＼思ひ寄せたる小兒ども遊び連にもと爰に集ぬ。

柳からもゝんぐあゝあと出る子哉　　ゝ

蓬萊になんむ／＼といふ子哉　　ゝ

年問へば片手出す子や更衣　　ゝ

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷　　ゝ

名月を取てくれろとなく子哉　　ゝ

子寶がきやら／＼笑ふ榾火哉　　ゝ

あとが餅／＼とて並べけり　ゝ
妹が子の脊負ふた形りや配餅　ゝ
餅花の木陰にてうちあはゝ哉　ゝ
涼風の吹く木へ縛る我子かな　ゝ
わんぱくや縛られながらよぶ螢　ゝ

其引

あゝ立たひとり立たることし哉　貞徳
子にあくと申人には花もなし　芭蕉
袴着や子の草履とる親心　子堂
花といへもツいへやちいさい子　羅香
春雨や格子より出す童の手　東來
早乙女や子のなく方へ植てゆく　葉捨
折とても花の木の間のせがれ哉　其角

はしとり初たる日

鶏鳴や赤子の類をすふ時に　同

男にきらはれて親のもとに住みけるに、おのが子の初節句見たくも昔は人目茂ければ

去られたる門を夜見る幟かな　よみ女 しらす

子を思ふ實情さもと聞へて哀なり。猛きものゝふの心を和らぐるとはかゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも、風の便りにもきゝなば、いかでかふたゝび呼び歸さざらめや。

所有畜類是レ世々ノ親族ナリとなん、親をしたひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

人の親の鳥追けり雀の子　鬼貫

夏山や子にあらはれて鹿の鳴　五明

負て出て子にも鳴かする蛙哉　東陽

鹿の親笹吹く風にもどりけり　一茶

小夜しぐれなくは子のない鹿にがな　ゝ

子をかくす藪の廻りや鳴雲雀　ゝ

楽しみ極りて愁ひ起るはうき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる、千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、ね耳に水のおし来るごときあら／＼しき疱の神に見込れつゝ、今、水濃(膿)のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日経たれば疱はかせぐちにて、雪解の峡土のほろ／＼落るやうに、瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやして、さん俵法師といふを作りて、笹湯浴せる真似かたして、神は送り出したれど、益々よはりて、きのふよりけふは頼みすくなく、終に六月二十一日の蕣の花と共に、此世をしぼみぬ。母は死顔にすがりてよゝ／＼と泣もむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたゝび帰らず、散る花の梢にもどらぬくひ事などゝ、あきらめ顔しても、思ひ切がたきは恩愛のきづななりけり。

露の世はつゆの世ながらさりながら　一茶

去四月十六日、みちのくにまからんと、善光寺まで歩みけるを、さはる事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらんとて道祖神のとゞめ給ふならん。

其引

子におくれたるころ

似た顔もあらば出て見ん一踊　落梧

母におくれたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮　尚白

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて三月三日野外に遊ぶ

宿を出て雛忘れば桃の花　猿雖

娘身まかりけるに

十六夜や我身にしれと月の欠　杉風

猶子母に放れしころ

柄をなめて母尋るやぬり團扇　来山

愛子をうしなひて

春の夢氣の違はぬがうらめしい　ゝ

子をうしなひて

蜻蛉釣りけふはどこまで行た事か　かゞ千代

やんごとなき人々の歌も心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

哀なり夜半に捨子の泣聲は
母に添寢の夢や見つらん　よみ人知らず

捨て行く親したふ子の片いざり
世に立かねて音こそなかるれ　爲家卿

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道に迷ひぬるかな　兼輔卿

頌曰

未レ舉レ歩時先已到ル　未レ動レ舌時先說了ル
直饒著々在ニ機先ニ　更須レ知レ有ニ向上ノ竅ニ

著々ハ非ノ言バ一手々々ト云心也
（右は一茶の自註なり）

貰ふよりはやくうしなふ扇かな　　一茶

俄川とんで見せけり鹿の親　　〃

大寺や扇でしれし小僧の名　　〃

曲者（くせもの）隠れてうかゞふ圖

あはれ蚊のついと古井に忍びけり　　〃

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな　　〃

太郎冠者まがひに通る扇かな　　〃

（桑の里―上高井郡高井村）　桑の里近きあたり、とある門に衣摺程なる黒き臭鳥をとらへて、籠伏せして有けるに、其夜親鳥らしく、夜すから其家の上に鳴ける哀さに

子を思ふ闇やかはゆい／＼と

聾を鳥の鳴あかすらん　一茶

盗人おのが古郷に隠れて縛(ら)れしに

業の鳥罠を逃るゝむら時雨　ゝ

御成り場所に、鳥どもの餌蒔をしたふ不便さに

人昵き鶴よどちらに箭があたる　ゝ

箭の下に母の乳を呑む鹿子かな　立志

さすがのさつ男も弩切りしは斯る折になんありける。

（さすがのさつ男――空也上人に關する俗傳か）

おのれ住る郷は、おく信濃黒姫山のたら〳〵下りの小隅なれば、雪は夏きへて、霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、萬木千草上々國よりうつし植るに、ことごとく變じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻けり　一茶

鎮西八郎爲朝人礫うつ所に

時鳥蠅蟲めらもよつく聞け　ゝ

鹿の子や横にくはへし萩の花　ゝ

（老翁—黄石公と張良）

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる圖に

我汝を待ことゝ久しほとゝぎす　一茶

幽栖

（恰好鳥—カッコウカッコウと鳴く閑古鳥）

我家に恰好鳥の鳴にけり　ゝ

二三遍人をきよくつて行螢　ゝ

飛螢其手はくはぬくはぬとや　ゝ

史記李廣傳賛桃李不言下自成蹊

成蹊子とその冬つひに不言人と成りしとなん。鶯笠のもとより此ごろ申こせたりしを

（右は一茶自筆にて成蹊の語に註したるもの）（成蹊子は江戸の人、傳未詳）

つの國の何を中も枯木立　ゝ

白笠を少しさますや木下陰　ゝ

まかり出たるは此藪の蟇にて候　ゝ

雲を吐く口つきしたり引蟇　ゝ

赤い葉の榮耀にちるや夏木立　ゝ

稲妻や一切づゝに世が直る　ゝ

石川はくはらり稲妻さらり哉　ゝ

夕霧や馬の覺へし橋の穴　ゝ

秋風に歩て迯る螢かな　ゝ

二番休

乳呑子の風よけに立かゝし哉　ゝ

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮　ゝ

七月七日墓詣

一念佛申だけしく芒かな　ゝ

木啄のやめて聞かよ夕木魚　ゝ

木つゝきが目利して居る菴かな　ゝ

經堂

蟲の屁を指して笑ひ佛かな　ゝ

得手ものゝ片足立や小田の雁　ゝ

山寺や椽(緣)の上たる鹿の聲　ゝ

下手笛によつくきけとやしか(の)草　　一茶

茸狩のから手でもどる騒かな　　〃

さと女三十五日墓

秋風やむしりたがりし赤い花　　〃

さをしかの喰とぼしけり萩の花　　〃

我やうにどつさり寝たよ菊の花　　〃

のらくらが遊びかげんの夜寒哉　　〃

露の玉つまんで見たるわらは哉　　〃

(おはむき―追蹤して媚びる言葉)　立よらば大木の下とて、大家には貧しき者の腰をかゞめておはむきいふもことはりになん。爰の諏訪宮に大きさ牛をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は菓(このみ)一ツもあらざりけるに、其下をゆきゝする人、日々とり得ざるはなかりけり。

(梨本氏―門人稲長)　十五夜は高井野梨本氏にありて

古郷の留主居も一人月見かな　　一茶

（潜上―潜越にも）

月蝕皆既　亥七刻右方ヨリ缺ク子六刻甚ク出ノ左ニ終ル

人数は月より先へ缺にけり　一茶

人の世は月もなやませ給ひけり　〃

潜上（せんじやう）に月の缺るを日利かな　〃

酒盡てしんの坐につく月見かな　〃

おのが味噌のみそ嗅を知らず

蕎麥國のたんを切つゝ月見かな　〃

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農顔や菊の花　〃

菊園や歩きながらの小盃　〃

枝先で畫解（ゑとき）するなりきくの花　〃

入道の大鉢卷できくの花　〃

下戸庵が疵なりとんな菊の花　〃

さと女笑顔して夢に見へけるまゝを

頬べたにあてなどしたる眞瓜かな　ゝ

どう追れても人里を渡り鳥　ゝ

山雀の輪抜しながらわたりけり　ゝ

鵙の聲かんにん袋きれたりな　ゝ

蟷螂や五分の魂是見よと　ゝ

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山　ゝ

行灯を松に釣して小夜砧　ゝ

行な雁住ばどつちも秋の暮　ゝ

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩き　ゝ

とんな村なんとの[一]行か渡り鳥　白飛

藪陰やととし酒屋のこととし酒　士英

一（こんな村なんどと一の書き誤ならんか）。

（ゑひして―お互に）

老楽

子どもらを心でおがむ夜寒かな　一茶

蟋蟀（こほろぎ）のとぶや唐箕のほこり先　〃

小菊なら細目の恥はなかるべし　〃

戸迷ひせし折からに

小便所爰と馬よぶ夜寒かな　〃

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥　〃

さをしかやゑひしてなめるけさの霜　〃

狼は糞ばかりでも寒かな　〃

一つかみ塗樽拭ふ紅葉かな　〃

むら千鳥そつと申せばぱつと立　〃

炭の火や朝の祝儀の咳ばらひ　〃

三介が敲く木魚もしぐれけり　〃

木がらしやから呼されし按摩坊　〃

善光寺門前憐乞食

重箱の錢四五文や夕時雨　〃

大根引拍子にころり小僧かな　〃

はつ雪の降り捨てある家尻哉　〃

木がらしや折介歸る寒さ橋　〃

菜畠を通してくれる十夜哉　〃

雪ちるやおどけもいへぬしなの空　〃

能なしは罪も又なし冬籠　〃

強盜はやりければ

張番に莚とられけり夜の霜　〃

彼是といふも當坐ぞ雪佛　〃

お袋がお穎手ちぎる指南哉　〃

餅搗が隣へ來たといふ子かな　〃

餅花

かまけるな柳の枝にもちがなる　ゝ

（かまけるな―くよくよするな）

子のまねを親もするなり節き(季)候　ゝ

（節季候―年末に来る門付の乞食藝人）

東に下らんとして中途まで出たるに

椋鳥と人に呼るゝ寒(さ)かな　一茶

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋

兩國橋

寒垢離にせなかの龍の披露かな　ゝ

かも川をわたらじとちかひし人さへあるにひと度籠りし深山を下りてしら髪つむりを吹れつゝ名利の地に交る

（かも川をわたらじとちかひし人―石川丈山）

恥かしやまかり出てとる江戸のとし　ゝ

其迹は子どもの聲や鬼やらひ　一茶

小人閑居シテ成不善

冬籠り悪く物喰を習(ひ)けり

廿一日節分

一番に此茶の鬼は逃るゝた

けふからは正月分ぞ麦の色

札納

梅の木や御祓箱を負ながら

二十七日晴

坊守り朝とく起て飯を焚ける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例の通り来たるべし、冷てはあしかりなん、ほか／＼湯けぶりの立(つ)うち賞翫せよといふからに、今や／＼と待にまちて、飯は氷りのごとく冷えて、餅はつひに来ずなりぬ。

（坊守り――俳諧寺坊守の意味にて妻をさす）

我門へ来さうにしたり配(り)餅　一茶

他力信心／＼と、一向に他力にちからを入れて頼み込み候輩は、つひに他力縄に縛(しば)れて、自力地獄の炎(ほのほ)の中へぼたんとおち入候、其次に、かゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂(あつら)へに誂ばなしにしておいて、はや五體は佛染

み成りたるやうに思るすましなるも、自力の張本人たるべく候。問ていはく、いか樣に心得たらんには、御流儀に叶ひ侍りなん。答へていはく、別に小むつかしき子細は不存候、たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた樣の御はからひ次第あそばされくださりませと、御頼み申ばかりなり。如斯決定しての上には、なむあみだ佛といふ口の下より、欲(慾)の網をはるの野に、手長蜘の行ひして、人の目を霞め、世渡る雁のかりそめにも、我田へ引く盗み心をゆめ／＼持べからず、しかる時は、あながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は守り玉ふべし、是則、當流の安心とは申なり、穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしのくれ　　五十七齡　一茶

文政二年十二月廿九日

（ちくらが沖―支那海灘をいふ）

親鸞上人
隔スル地獄極樂ヨクキケバ只一念ノシハザナリケリ

（一茶自筆の頭註、本文の意に關して引用したるもの）

校訂餘言

我春集

「我春集」の原本は長野縣下高井郡平穩村、湯田中溫泉の湯本五郎治氏方に現存する。湯本氏の高祖父・希杖と、曾祖父・其秋とは共に一茶の門下であつたし、業が溫泉旅館であつた爲に、一茶はしば／＼其家に來て湯治しながら滯在してゐた。さうした關係から、一茶の眞蹟がこゝに多數所藏せられてゐる。「我春集」はその一つである。用紙は美濃紙を綴つたもので、紙數三十七丁。蘭井產のすゝみなかしの紙を以て裝幀してある。そして表紙の題簽に「我春集」とかいてある、其は故東松露香氏の筆である。本文を檢すると、書題は見當らない。一茶は、一册の著書らしい體裁に書き出したものではあるが、題をつけてなかつたのである。だが、露香氏の命題は惡くもない。「おらが春」の木版本の表紙裏に「我春集」と題したものがあるため、其とまぎれ易くはないかといふ點を除いては、惡くはない。且つ、近來、一茶研究家の間には、「我春集」といふ名が一般的になつてゐるさうだから、こゝにもやはり其の名を踏襲しておくことにする。

卷頭の「通說」に書いた通り、此の集は文化八年の正月、守谷の西林寺に於て筆を起して、其の住寺（鶴老の寺）にて興行した俳諧や來訪者の發句を書きとめるのを目的としたらしいが、一茶は其を持ちあるいて、江戶の知友との交遊句集としてしまひ、又、隨感隨想を記すものとしてゐる。又、此の中に別紙にして「文化三年十一月廿五日」といふ日付の歌仙一卷がはいつてゐるが、それは後人がこれを製本する時に綴

込んだものと思はれる。然し、今それだけ切りはなしてもまひごの觀を與へるので、こゝでは湯本家現存のまゝの體裁にして、改めないでおくこととする。

「我春集」を最初に校訂したのは東松露香氏である。私は氏から其の出版を依頼されて、東京の二三の書肆に交渉したがまとまらなかつたので、其原稿を氏の嗣子八洲雄君の手許に返しておいた。其は關東大震災にて燒失した。だが、原本は元の處に存してゐるので、こんどは私自身、湯本家に赴いて、改めて校訂した。それは大正十五年十一月に、東京の春秋社から「株番其他」といふ書題を以て上梓されてゐる。又、其後、私の校訂した「おらが春」と併せて、岩波文庫にも收められてゐる。

株番

「株番」の原本は、「我春集」と同じく、湯田中の湯本家に現存する。美濃紙の總紙數六十七枚、一茶としては丁寧に清書したもので、第一册の扉に「株番」といふ題字は一茶の自筆である（本書に口繪として挿入したものが其である）。第二册の「株番卷の二」とあるのも一茶筆に疑がない。そして第三册を開くと、それもたしかに一茶の字でやはり「株番卷の二」と書いてある。で、どちらが正しく「三」であるかが問題となるが、これは內容の日付の續きを見れば直に氷解する。現にある表紙は後日製本した時に加へたものに相違なく、其の題簽に書いてある字は故東松露香氏の筆蹟である。そして、露香氏は「卷の二」と「三」とを正すことをうつかり忘れて書かれたらしい。で、湯本家所藏の原本の表紙題簽の「二」「三」は入れちがつてゐるのである。

露香氏著「俳諧寺一茶」は一茶研究の嚆矢とも云ふべきもので、其に載せてある「一茶年譜」は苦心の編集にちがひないが、其中に――

文化九年（壬申）（一茶五十才）、一月、相馬の布川にありて「株番」三冊を編む。

とあるのは、「株番」を編まんとする考を起したと解すべきである。一月の記といふのは僅に數枚だけであつて、二月ごろまでは布川・守谷附近に滞在してゐたが、三月ごろからは江戸や上總の記になつてゐる。それから「せんき」の嚢や「さけどの嚢」のメモを同じ帖中に書込んだりしてゐる。「巻の三」の別冊（正しくは「巻の三」）の方には、文化十年刊行の「信濃札」の書き抜などがあるし、文化十一年正月に入手した音信の控もある。これらは何れも別紙に書いてある。恐らく、これらは本來「株番」の一部たるべきものではなく、端紙のまゝに傳來したものを、いつの時か、これを三冊として製本する時に、散逸をおそれて、此の中に綴り込んでしまつたものと思はれる。「七番日記」の書き抜のあるなど、あまりに内容とかけはなれてゐる。同時代の刷り物や文信の書き拔は一茶研究の外輪としても意義があらうけれども、元祿時代のものは、縁がなさすぎる。で、今回は其の部だけを省いたのである。

「株番」も「我春集」と同じに、露香氏が校訂した原稿は、大震火災にて失はれたので、私は改めて原本に就て校訂した。それは春秋社から刊行された「一茶遺稿・株番其他」の中に收めてある。其の方には、こゝに省いた「七番日記」の寫し等も採録してあるから、しひて參照されたい方は、其の方を見ていたゞきたい。

志多良

志多良の原本は、わりあひに近年知られたもので、東京都大田區雪ヶ谷の代田冬蛙氏の所藏するところである。前から知られてゐた寫本は湯本方に二冊ある。私ははじめ湯本方に滯在して「我春集」「株番」の校訂をしてゐた際、その「志多良」の寫本を發見し、其中には未見の發句なども少くないことを知つたので、これを一茶研究の資料として公開した。それは「一茶句集、しだら」と題して、昭和二年五月、岩波書店から刊行したのである。

其後十年を經て、昭和十二年、前記代田冬蛙氏が突然、私をたづねて來て、一茶の眞蹟とおぼしきものを入手したから鑑定してほしいと云はれた。一見すると、原本は非常によごれて且つ破れてさへゐる、きたない反故と見えるものだつたが、一茶の眞蹟に相違はなく、題簽に自筆で「志多良」と書いてある、即ち「しだら」の原本なのであつた。一體、これは故中村六郎氏の手にあつたもので、大正十年ごろ、同氏と出版の相談をしたこともあつたが、其が書肆の都合で實現しないまゝに、同氏は宮城縣岩沼に移り住まれ、そこで死去された。私は「志多良」の原本はどうなつたことかと時々思ひ出さないでもないが、それが何處をどう廻つたか、代田氏の手に歸したものなのである。で、其を借りて、前に出版した寫本の「しだら」と較べると、大そうな出入があることが解つた。で、版元の故岩波茂雄君にたのんで、前の「一茶句集、しだら」を絶版として、改めて原本に依つて校訂したものを「一茶遺稿・志多良」といふ書題にして出版したのであつた。昭和十二年、六月のことである。今、此の全集にをさめたものは、それである。

「志多良」の原本が大そう汚損してゐるといふことは上に書いたが、代田氏が私の家へ持参されたものは、大きな形の折本仕立として新幀されたりつぱなものだつた。だが、其の原本そのものが如何にみすぼらしい

有樣であるかはかくすべくもない。その昔の面影がかくされずに殘つてゐるところにこそ、研究家にとつては、たまらなく懐しい面白い味があるのである。一體、古い原稿といふものの、缺けたり闕けたりしてゐるものは、ムシに依る害が普通であるが、これは雨のためにベタベタに濡れ、カビが生えてくつついてしまつたものを強ひてはがさうとして一部が破れてしまつたといふ甚だみじめな有樣なのである。長く雨じみに浸つてゐたことは、黑の字が對ひ合つた面へにじみ出て、吸ひ取られてゐるので解る。カビは完全に除くことが出來ずして、今もその青い斑點が到る處にくつついてゐる。又、初め裝幀し換へた時に、丁付の順序を間違へたのではないかといふ疑もある。又、一茶自筆の「志多良」といふ題字は、最初の丁にはなくして、「しだら第三」といふ前にあつたもので、代田氏が改積する時に、其を前に出したといふ談で、その事は墨のにじんでうつつてゐる所を見ても、元の位置は解るのである。原稿の紙の寸法は、横五寸、縱七寸五分、紙數五十一丁である。

「志多良」には一茶の寫した「插圖」がある。圖までつけてあるところを見ても、これを著作のかたちにまとめようとした意圖はうかゞはれる。但し此の圖——火吹竹を以て圍爐裏の火を吹いてゐる圖——は本文と密接な關係がない。又、一茶のよく書く一筆書き風のものとしては、緻密すぎる。恐らくは何か讀み本の中にあつた圖を模寫したものであらうとおもはれる。さうしてみると、「おらが春」の中にある插圖も亦、同樣のものであらうかと推測されるのである。

おらが春

「おらが春」の原本は、長野縣上高井郡中野町、小林萬次郎氏方に現存する。もとは帖になつてゐたものに違ひあるまいが、現在は巻物に仕立替してある。中野には一茶の門人、山岸梅塵其他がゐたし、又、湯田中へ行く途中でもあり、一茶はしば／＼梅塵方へ立寄つてゐる。「おらが春」の原稿は梅塵方に長く所藏されてゐたらしく、それが又いつか同町の白井一之方に移動してゐたらしい。一茶の歿後、廿五年を經て、嘉永五年、一之は此の一茶の原稿をたくみにすき寫しにし、版本に彫らした。それが「おらが春」の初版本である。「おらが春」は一茶の遺稿のうちでは最も好くまとまつてゐるもので、數葉の挿圖さへ入れてあるといふ風で、そつくり開板出來るやうな體裁になつてゐるのであつたが、たゞ其集の題名だけが付いてゐなかつた。「おらが春」といふ書題をつけたのは一之であらうと思ふ。その題簽の字體は、いかにも一茶らしく見えるが、それは本文全體をすき寫しにしたのと同時に――「目出度さもちう位也おらが春」といふ此句の下五字の字體になぞらへて書いたものと推せられる。「おらが春」といふ題名が此句に因んでゐることは云ふまでもない。一茶自身の述作は、門人知己の句を集めた選集や記念出版風のものを別としては、生前には一冊も出版されてゐない。門人數名が手をわけて抄錄して作つた「一茶發句集」の出來たのは、一茶の三周忌にあたる文政十二年であつた。その增補再版とも云ふべき「一茶發句集」の出來たのが、それから十九年後の嘉永元年であつた。その次に出版されたのが嘉永五年の「おらが春」なのである。これは門人の編集ではないから、一茶自身の著述として最初に公にされたものは、此の「おらが春」だと云つてよろしい。

一之は之を出版する時、その師事してゐた江戸の兒玉逸淵（可布庵）に乞うて、その序文を付けてゐる。その文は――

世々の變風元祿に至りて正雅やゝ定りしよりこのかた、諸家の風調おの／＼その得失によりて風姿極り

なしといへども、かの向上の一路は踏たがふ事なく、ひばりのくちさかしく、蚯蚓の鈍くおかしげなる、又は蓬の直よかに、葎のくねれるも、みな自然の風骨を具して、しかも正雅にもとらざるは、天の妙といふべし。其一妙を得たるしなぬの一茶、一期の風雅言行ともに洒落にして、猫王も腮をとき、獄卒も跡をかゝゆべし。しかはあれど、毛頭れいの向上の本意を失はず、實に近世獨歩の俳道人とせむか。こたび同國の一之、家に傳へし坊が遺稿をその儘上木して、追慕のこころざしを盡す。予も亦舊知己をわすれず、坊が命終の年、柏原の舊里を訪ひて往事をかたるに、あるひは泣、あるひはわらひてわかれぬ。其俤まぼろしに見へて、扨こそこの集の序者にたてるも、これ又因縁によれるべらし。

嘉永壬子春涅槃日

東都　瓢隱居逸淵（可布庵）

といふのである。又、跋文が二つ添へてある。その一つの瓢界四山人といふのは、松平志摩守直興といふ出雲の母里の大名である。

此一卷や、しなのゝ俳諧寺一茶たるものゝ草稿にして、風調洒々落々と杜をなす。こゝ寸毫も洒落にあらず、しかもよく佛籬祖室をうかがひ、さる法師がつれ〴〵もあやからず、一休白隱は猶しかなり、手ぶりはおのれが手ぶりにして、あが翁の細みをたどり、敢て世塵を厭ず、人情はたやするかたたし。悪（いづくんぞ）我此外に何をかいはむ。

嘉永四年の亥春彼岸仲日

瓢界四山人しるす

かの岸もさくら咲日となりにけり

もう一つの跋文は富處西馬（惺庵）であつて、上州高崎の產、惺馬の門人である。

惟然坊は元祿の一畸人にして、一茶坊は今世の一奇人なり。そが發句のをかしみは、人々の口碑に殘り

て、世のかたり草になるといへども、たゞに俳諧の皮肉にして、此坊が本旨にはあらざるべし、中野のさと一之が家に秘めおける一巻物や、ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを盡して、人情世態無常觀想殘す處なし、もし百六十年のむかしに在て、祖翁の過眼を得むには、惟然の兄とやのたまはんか、弟とや申し玉はむか。

惺庵西馬

明治になつてから、同じ版木を用ひたものが再刷されてゐる。これには夢中庵笠翁が其角、嵐雪と共に火燵に假寢してゐる自畫讃の圖（「三韓人」所載）を新に口繪とし、又、菱陀生といふ名の漢文の序が加へられてゐる。

是爲白井一之老人所藏。小林一茶翁手書之俳諧卷、可愛玩者、昔者鄭板橋、手書其集、鏤而公於世、翁之集亦已梓、可謂板橋以後第一人也、書之還之

戊寅二月　菱陀生

奥付には「明治十年十一月御屆、明治十一年六月出板」とあり、出版人は「長野縣平民、白井彦兵衛、俳名、有明庵一之」。發行所は「東京神田區錦町三丁目七番地、好文堂」である。又、初刷には、附錄として追善の俳諧なども添へてあつて、六十枚の厚い本になつてゐるが、「おらが春」の本文としては、挿圖とも三十七枚である。

活字本となつたものは、博文館の「俳諧文庫」中の「一茶大江丸全集」を嚆矢として、俳書堂の「俳諧名著文庫」中の「おらが春」。その以後はぞく〳〵と諸方から出てゐる。私の校訂したものでも、春陽堂の「一茶文庫」の中に、岩波書店の「岩波文庫」の中に、改造社の「改造文庫」の中にある。又、勝峯晋風氏が小林萬次郎氏方の原本を玻璃版として出版した「おらが春稿本」（古今書院版）が出てゐる。

挿圖小解

村松春甫筆　一茶畫像

一茶の肖像として、其の時代に寫されたものは、たゞ二つだけが今日に殘つてゐる。共に村松春甫の寫したもので、此の圖は其の一つである。春甫は信濃上水内郡長沼村の人、一茶の門人であつて、畫を好くした。ここに署名してある圖樂といふのは其の畫名である。平生、一茶に親炙してゐた人であるが上に、畫業にも堪能であつたのだから、肖像としてまづ信ずべきものと考へてよろしからう。もつとも、二つのうちの他の一つである「俳諧寺十哲畫像」中の一茶の像と、此の圖とはだいぶん感じの違ふ點があるけれども、大きい鼻、高い顴骨、出はつた顎などは、おそらく一茶の風貌の特色だつたらうとおもはれる。

此の圖は縦幅の下に寄せて描かれてあつて、その上に

やれうつな蠅が手をすり足をする

といふ句を一茶が書いてゐる。その句の最下端の一茶といふ署名が此の圖に入り込んでゐる。此の句は文政四年（五十九歳の時）の作であつて、晩年には好んで書いたものだから、此の像も六十を越した一茶であつて、おそらくは還暦を祝ふ意味かなぞで、春甫が描いたものではなからうかとおもはれる。現物は東京都世田谷區岡本町、小坂順造氏の所藏である。

一茶眞蹟色紙

一茶の眞蹟として殘つてゐるものは、相當に多いのではあるが、その中の名品とも稱すべきものは、近來はとんと雲がくれしてしまつたやうである。今から十餘年前、私が「一茶眞蹟全集」を編むために、その所藏家を歷訪したころには、その重なるものは殆ど信濃一國にあつまつてゐたが、東京の美術俱樂部其他に於て、一茶遺墨展觀などが行はれる每に、地方から持ち出されて、新しい愛好家の手に移つて行つた其の數はおびたゞしからう。かくて傳來的な土藏をはなれて、都會にたゞようたものに、戰爭に依つて、疎開せられたり、或は火災に會つたりして、有耶無耶になつたものも少くなからうと思はれる。

是程のぼたんと仕かたする子かな

此の句は文政元年の作であり、其後もテニヲハをかへて改作をこゝろみてゐる。書體は、文政元年か其に近きころ、即ち、一茶の筆が圓熟をきはめて、これより枯淡に入らうとする、その頂上時代ともいふべき時であつて、まづ、一茶の書蹟の代表的なものと云つてよからうと思ふ。これは越前の墨ながしの小色紙に書いてある。一茶の眞筆の短册といふものは澤山あるけれども、色紙に書いたものは甚だ少いのである。編者の家藏である。

昭和二十四年四月二十日印刷　定本　一茶全集　第一卷
昭和二十四年四月三十日發行　おらが春・其他

定價三三〇圓

校訂者　荻原井泉水

東京都千代田區神田駿河台三ノ四
發行者　伊藤竹男

東京都中央區日本橋久松町二〇
印刷者　眞野自治

發行所　東京都千代田區神田駿河台三ノ四　株式會社　羽田書店
會員番號A一〇八〇二三號
電話神田(25)　〇三一〇番　〇五七四番　四二七八番

（富士興業株式會社印刷製本）

定本 一茶全集 全六巻

荻原井泉水編

第一巻 おらが春・其他

我春集・株番
志多良・おらが春

B6判
二六九頁

第二巻 看病日記・其他

第三巻 七番日記上

次回配本

第四巻 七番日記下

第五巻 八番日記

第六巻 九番日記

一茶全集　全六巻

荻原井泉水編

第一巻　おらが春・其他
第二巻　看病日記・其他
第三巻　七番日記　上
第四巻　七番日記　下
第五巻　八番日記
第六巻　九番日記

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03187 4225